

社会のグローバル化に対応した 初等中等カリキュラムの開発Ⅱ

— 大学と連携した研究開発システムの構築に向けて —

平成 26 年 3 月

広島大学附属学校園
研究推進委員会

【はじめに】

グローバル人材の基盤を養う附属学校を目指して

グローバル化に向けた社会の動きはめまぐるしい。筆者の机上にも、スーパーグローバルハイスクール、英語教育強化地域拠点事業などそれに関連した資料や情報、応募書類が散乱している。本学においては、グローバル化に対応した新学部の設置、スーパーグローバルユニバーシティの申請、グローバル教員養成の設立などがあわただしく動き、日々会議が重ねられている。広島の一地域においてすらそのような状況であるのだから、全国を見渡すとどこまで対応が進んでいるのか想像できよう。ちなみに、上述したスーパーグローバルハイスクールには50校の募集に対して、全国で246校が応募したとのことである。

これまで、教育の在り方は国内に閉じて語られることが多かった。とりわけ、教員の意識としては、生徒を国内の「有名、一流」大学へ進学させることを最終のゴールとして初等・中等教育が実践されてきたように思える。しかし、そのゴールが大きく転換したことを認識しなければならない。かつては、経済的な理由から広島県の高校を卒業した生徒は広島県の大学へ進学する割合が高かった。今は日本中の大学へ進学している。しかし、世界を見回すと、自国の高校を卒業した生徒が世界各地の大学へと進学している。中国や韓国など周辺各国でもその流れは大きく、欧米の有名大学のキャンパスでも多く見受けられる。

わが国でもその動きが拡大しつつあり、ある有名私立高校では、海外の有名大学への進学を補助するために事務体勢を強化したそうである。これらの動きはすなわち、グローバル社会の進展に伴い学力もグローバル化してきたことを意味している。国内にとどまらず世界で通用する学力をつける必要に迫られているのである。

附属学校の主要な使命は、教育研究と教員養成について大学と協力することである。本学の附属学校園は上述のような認識に基づき、すべての学校園で教育研究の共通テーマとしてグローバル人材を育成するためのカリキュラム開発に取り組んできた。とりわけ本年度は、これまで行ってきた取り組みを整理して、次年度に試行するための準備をする年であった。

最初に、昨年の報告書で示した本学の附属学校園が考えるグローバル人材に求められる資質・能力の見直しを行った。次には、同定された資質や能力を、幼稚園から高等学校まで15年間のどの年齢でどのようなものを付けることがふさわしいかを論議した。そのうえで各附属学校園が分担して、それぞれの資質や能力を付けるためのカリキュラム開発を行ってきた。従来よりそれに関する取り組みを行っている学校園ではその試行例を、これから着手する学校園では次年度の計画をまとめたものがこの報告書である。

さらには、本年度もシンガポールを訪問して、各校の参考になる実践例を紹介している。シンガポールは教育用語を英語と定めて、授業を英語で行っている（休憩時間は中国語やマレー語で話している）。華やかで活気があるシンガポール。そこには世界中の有名会社がオフィスを構えられている。同行した先生方に話した。「今教えている生徒の中には、将来あのビルのオフィスで働いているかもしれませんよ」と。

最後に、本プロジェクトの推進に尽力されている研究推進委員会の先生方、とりわけ教育学研究科の先生方には心より感謝を申し上げたい。

平成26年3月

広島大学副理事（附属学校担当）松浦 伸和

目 次

はじめに

1. グローバル人材に求められる資質・能力とその要素	1
2. 各学校園の取組	
I. 広島大学附属幼稚園	5
II. 広島大学附属小学校	10
III. 広島大学附属中・高等学校	20
IV. 広島大学附属東雲小学校	25
V. 広島大学附属東雲中学校	33
VI. 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校	39
VII. 広島大学附属福山中・高等学校	54
3. 海外の取組（シンガポール視察報告）	67
4. コメント（1）教育学研究科 丸山恭司	81
（2）再編計画室長 竹田敏彦	83
おわりに	95

グローバル人材に求められる資質・能力とその要素

教育学研究科 岩田昌太郎

1. はじめに

わが国では、1980年代頃までに「(経済的)豊かさ」を達成した結果、フロンティアを喪失することとなり、現在の技術の先進性や一定規模の国内マーケットの存在などが却って「日本のガラパゴス化」を招きかねないとの懸念すら指摘される状況にある(グローバル人材育成推進会議, 2012)。

そのような懸念の中、グローバル化は刻一刻と進展しているが、その一方で持続的な成長と生産性向上を実現するための鍵を握るのが人材の育成と活用である。その人材の育成を担っているのが、まさに学校教育であり、その進むべき方向性や具体策が議論されている渦中である。そのグローバル化については、現在までに様々な提言や方策が議論されている(経済産業省, 2010; グローバル人材育成推進会議, 2012)。

そこで本稿では、グローバル人材に求められる資質・能力について現在までの各種答申や報告書を手がかりにして、各附属・学校園における重点的要素を検討することを目的とする。

2. グローバル人材に求められる資質・能力とその要素

学習到達度調査(PISA)の基となった経済協力開発機構(OECD)の「DeSeCo(Definition and Selection of Competencies)」や北米を中心に研究が進められている「21世紀型スキル」の影響のもとで、コンピテンシーに基づいた教育改革が世界的潮流となっている。

一方、そのような潮流の影響を受けて、わが国においても「これからの日本人にはだれしも、グローバルな視野をもち、社会の変化に耐えうる幅広い知識やICTリテラシー、柔軟で高度な思考力や判断力、人間関係力等を支えられながら、知識基盤社会の『21世紀を生き抜く力』が求められている」(勝野ら, 2013, p.39)ことが強調されている。

そのような中、わが国においてもグローバル化における様々な提言や方策が議論されている。例えば、中央教育審議会答申(2005)の「新しい時代の義務教育を創造する」の中で、「我が国が、変動の激しいこれからの時代において、今後とも国際的な競争力を持つ活力ある国家として、また世界に貢献する品格ある文化国家として発展するためには、国民一人一人が、そのような国家・社会の形成者として、それぞれの分野で存分に活躍することのできる基盤を、義務教育を通じて培う必要がある」と指摘している。このことは、社会情勢の変化に応じて、グローバルに活躍できる人材を育成する必要性を謳っているものであるといえる。

また、経済産業省(2010)は、グローバル人材に共通して求められる能力として、以下の図1のような3つの「力」を提言している。

- ①社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）
- ②外国語でのコミュニケーション
- ③異文化理解・活用力

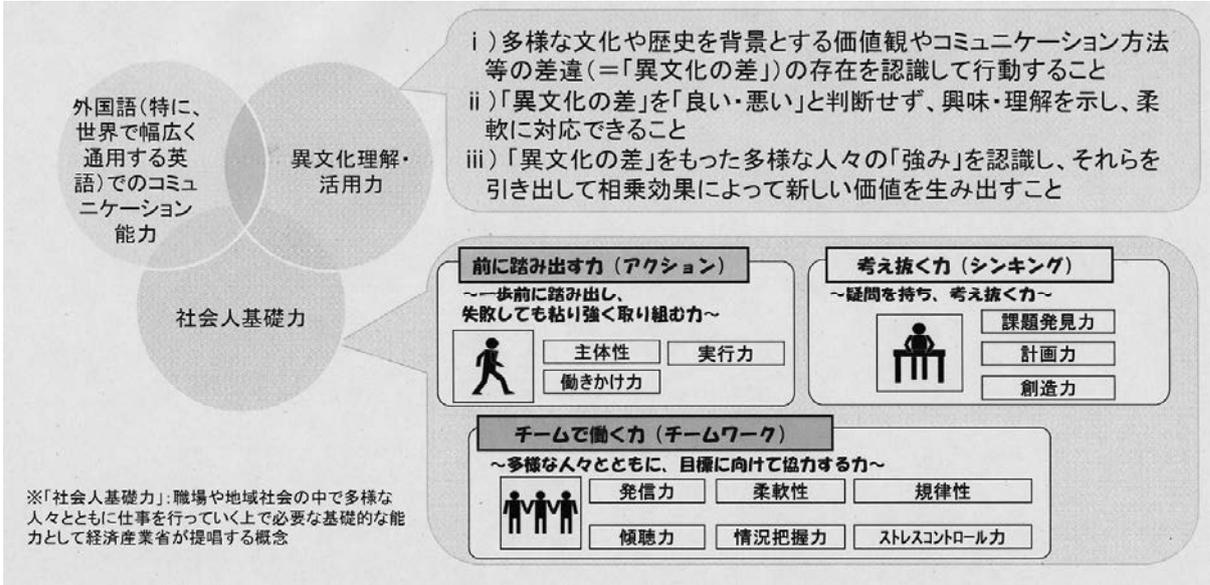


図1 グローバル人材に共通して求められる能力

(産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会報告書より抜粋)

さらに、グローバル人材育成推進会議（2011）においても、グローバル人材の定義について以下のような要素の項目を挙げている。

- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

(グローバル人材育成推進会議中間まとめより)

以上より、グローバル人材に求められる資質・能力としては、上記のような要素を考慮して検討していくことが肝要である。それでは、次節において、本学の各附属・学校園におけるグローバル人材育成の取組みについて概観する。

3. 各附属・学校園におけるグローバル人材育成の取組み

各附属・学校園では、グローバル化における方向性や具体策への貴重な示唆を与える多くの有益な実践事例を蓄積していることが平成24年度の『広島大学附属学校園研究推進委員会報告書』（以後、H24年度報告書と略記）から確認できる。しかも、その取組みは、多種多様であり、独創的な実践事例を示すものである。しかしながら、各

附属・学校園における様々な取組みの独自性ととも、その共通性や発展性を模索する中で、さらなる各附属・学校園の発展を検討していくことは、各附属・学校園の将来的なグローバル人材育成をより具現化する上において重要な課題であろう。

そこで表1は、先述したH24年度報告書に掲載されていた各附属・学校園における特色ある取組みとグローバル人材育成の要素の対応を示したものである(岩田, 2012)。まず、左欄の要素は、グローバル人材育成推進会議(2012)の審議のまとめとして提言された「グローバル人材育成」の要素を援用している。その要素は、Ⅰ～Ⅲまで提言されている(表1を参照)。また、「グローバル人材育成」の要素Ⅰ～Ⅲに含まれずに、独自に提言あるいは実践事例の成果を紹介している要素については「要素0」あるいは「その他の要素」として示している。もちろん、その内容には、広島大学における「グローバルリーダーに求められる資質・能力」の一端も含んでいる。

表1 各附属・学校園における特色ある取組みと「グローバル人材育成」への対応表

	幼稚園	附属小	附属中・高	東雲小	東雲中	三原	福山
要素0 要素Ⅰ～Ⅲの基礎となる心情・意欲・態度	◎						
要素Ⅰ 語学 コミュニケーション	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	◎ ◎	○ ○
要素Ⅱ 主体性・積極性 チャレンジ精神 協調性・柔軟性 責任感・使命感	○ ◎ ○ ○			○ ○ ◎ ○		◎ ◎ ○ ○	○ ○ ○ ○
要素Ⅲ 異文化理解 アイデンティティ	○	○	○	○ ○	○ ○	◎ ◎	○ ○
その他の要素 問題解決能力 批判的思考 ICT活用能力						○ ◎ ○	◎ ◎ ○

◎・・・特に力点をおいている取組み ○・・・力点をおいている取組み

表1からもわかるように、「グローバル人材育成」の要素との対応をみると、各附属・学校園の特色ある取組みがすでにグローバル人材の要素を網羅していることが見受け

られる。とりわけ、要素Ⅰの「コミュニケーション」と要素Ⅲの「異文化理解」は、多くの附属・学校園が身につけさせようとしている資質・能力であることがわかる。一方、「その他の要素」において散見することができる資質・能力は、わが国の今後の教育に求められている資質・能力であり、そのような資質・能力を身につけるような実践事例を蓄積している傾向も見受けられる。

しかし、各附属・学校園の実践で共通する要素が多いものは、附属間で協働的に実践を共有できる1つの可能性を示唆するものであり、今後の全附属・学校園の横の連携を一層強化する可能性を示唆するものである。また、要素Ⅱの資質・能力は、人材育成を実践する上で基盤となる要素である。そのような要素は、本邦の教育課題ともリンクする点であり、その要素を身につけさせたエビデンスを提示していく必要がある。さらに、あまり共通していない要素については、各附属・学校園が独自に新たな実践を企画・運営していくことが今後の検討課題として挙げられるであろう。

4. おわりに

前節より、グローバル人材の育成を目指して、各附属・学校園が特色ある多くの有益な実践を蓄積していることが明らかとなった。そこで本年度は、その蓄積を基盤として、附属学校園の研究開発システムを構築するにあたり、共通的な実践あるいは独自の実践を企画・運営する準備段階である。しかも、来年度は、その研究開発システムを構築するための試行が求められる。

それでは次章において、各附属・学校園における具体的な取組みを参照していただきたい。

文献

岩田昌太郎（2012）コメント（3）．平成24年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書：pp.94-96.

勝野頼彦（2013）社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理．教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5．国立教育政策研究所：p.39.

平松守彦（1990）グローバルに考え、ローカルに行動せよ．東洋経済新報社.

グローバル人材育成推進会議（2012）グローバル人材育成戦略 審議のまとめ．平成24（2012）年6月4日．文部科学省.

(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/> 閲覧2014.2.12)

経済産業省（2010）報告書～産学官でグローバル人材の育成を～．産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会．2010年4月

(http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/global_jinzai.htm 閲覧2014.2.12)

中央教育審議会答申（2005）新しい時代の義務教育を創造する．文部科学省

各学校園の取組

I. グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培うための幼児期におけるカリキュラムの開発

広島大学附属幼稚園

1. グローバル人材育成のために幼児期にすべきことは何か

グローバル人材育成推進会議（2012）では、「グローバル人材」の概念として以下の要素を挙げている。

- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

（グローバル人材育成推進会議審議まとめより）

以上、要素Ⅰ～Ⅲの資質や能力がグローバル人材には求められることが提言されているが、これらは主に青年期に海外留学や海外勤務を想定してのものである。同まとめには「初等中等教育段階では、基礎的な学力・体力・対人関係力等をしっかりと身につけさせることが重要である」とあり、グローバル人材育成のための基礎を培うことの大切さが述べられている。

幼児期の教育はそもそもが、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う（教育基本法第1章第1、幼稚園教育の基本）」ものであり、「義務教育及びその後の教育の基礎を培う（学校教育法第22条）」ものである。前述の要素Ⅰ～Ⅲの資質や能力を有するグローバル人材育成のためのカリキュラムを考えた場合、幼児期において大切なのは、小学校以降の教育につながるための礎となる学力・体力・対人関係力等であろう。その要素Ⅰ～Ⅲの基礎となる内容を私たちは昨年度の研究推進委員会報告書において「要素0」として位置づけた（広島大学附属幼稚園，2013）。

グローバル人材育成のためには、幼児期には「要素0」を育成するカリキュラムを開発する必要がある。その具体的内容は、以下の通りであると本園は捉えている。

- ①自己肯定感・他者への信頼感の獲得
- ②好奇心や探究心の育成
- ③豊かな感動体験による感性の涵養
- ④体力・身のこなしの向上

また、要素Ⅰ～Ⅲのうち要素Ⅱは心情・意欲・態度を中心としたものであり、その中でも主体性やチャレンジ精神などは、幼児期から培うべきものであると私たちは考えた。そこで、グローバル人材育成のためのカリキュラムには以下の内容も含まれる。

- ⑤主体性・積極性，チャレンジ精神の育成

本園では、グローバル人材育成のために幼児期にすべきこととして、以上5つの資質・

能力を重点的に身につけることが大切であると位置づけ、これらを身につけるためのカリキュラムを開発することとした。

2. グローバル人材育成に向けての具体的取組

幼児期の特徴として、大脳皮質のシナプス形成やネットワーク化の全体の90%が完成する時期であることが知られている。そして、それらを促進するためには、多様な五感刺激による原体験の重要性が指摘されている（体験活動と指導のあり方に関する調査研究委員会、2004）。また、自然物や自然事象と触れる原体験を通して、好奇心、感性、探求する意欲などに関与する大脳新皮質の鍛錬、育成につながることも指摘されている（小林、2000）。また、森という環境が、幼児に多様で十分な量の運動を保障し、小学校以降の体力に引き継がれていることも指摘されている（日切ほか、2013）。

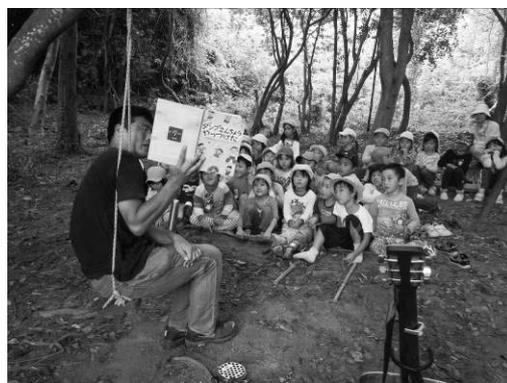
本園は、広島大学の所有する森に隣接しており、森を日常の保育で使うことができるという、全国的に見ても大変恵まれた自然環境を有している。上記の指摘を受け、幼児期に上記の5つの資質や能力を身につけるためには、森という環境で自然とふれ合う原体験を保障しながら遊び込む体験を積み重ねることが大切であると私たちは考えた。具体的には、以下の内容を含んだカリキュラムを開発し、実践を行う予定である。

①他者とのかかわりを通じた自己肯定感・他者への信頼感の獲得

どのような人材を育成するにしても、自分に自信をもち、他者を受け入れる心が育っていることが前提となるだろう。この「自己肯定感と他者への信頼感の獲得」の両者は表裏一体のものである。本園では、この自己充実欲求である「私は私」の心と、繋合希求欲求である「私は私たち」の心の両面をバランスよく育むことを中心としたカリキュラムを開発中である。学校教育のスタートである幼稚園の時期に、自分に対する肯定感と他者への信頼感を獲得することをめざした保育実践を行う。

②森での遊びを通じた好奇心や探究心の育成

幼児は遊びを通して様々な事を学んでいく。遊び込むことで、そこからさらにやってみたいという気持ちやどうなっているんだろうという疑問などが生まれ、好奇心や探究心が育成されていく。特に、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること



一日中森で過ごす「森の日」

（幼稚園教育要領，2008）」とあるように，幼児期には，自然とかかわることで好奇心や探究心が培われる。そこで，一日中森で過ごす「森の日」を保育に取り入れながら，自然の中でたっぷりと直接体験する機会を保障していく。そこで育まれた好奇心や探究心は，小学校以降の学習との連続を生み，語学力をはじめ学びの基礎として生きてくると考えている。

③自然とのかかわりを通した豊かな感動体験による感性の涵養

本園の特徴は「森の幼稚園」として，教育課程の中に五感を通した原体験を位置づけていることである。原体験の必要性和現代社会における不足は様々に指摘されているところである。

「子ども体験活動の実態に関する調査研究」報告書では，自然における原体験，感動体験の不足により，子どもの心が育ちにくくなっていることが指摘されている（国立青少年教育振興機構，2010）。私たちは，十分な自然体験を保障する保育を展開することで，センス・オブ・ワンダー

（神秘さや不思議さに目をみはる感性）を育むことをめざしていく。美しさや不思議さ，神秘さ，雄大さ，驚きや感動など様々な感情体験を積み重ねることで，豊かな感性を涵養しようとする。



大きなキノコを見つけてびっくり！

④森での遊びを通した体力・身のこなしの向上

自然の中には直線はないと言われるように，森の中には平坦な部分はない。森の中で遊びや活動を行うことは，斜面やでこぼこなどがある環境で過ごすことになる。また本園は，広島大学が所有する陣が平山を日常的にフィールドとして使っており，幼稚園と山頂との標高差70mを行き来している。さらに山際には，全身を使って遊ぶことのできる綱渡りや縄ばしごなどの手作り遊具が設置されている。来年度以降も



全身を使った森での遊び

これらの環境を十分に活かし，遊びや活動の中で体力や身のこなしが身につくような保育実践を行っていく予定である。幼児期に身につけた体力や身のこなしは，今後の学力や精神力を支える上での基礎となると考えている。

⑤自然とかかわる遊びや活動による積極性やチャレンジ精神の育成

本園は教育課程の中に「挑戦的な遊び」を位置づけ、3年間を見通した取り組みを行っている。具体的には一本橋渡りや斜面登り、森の空中の綱渡り、おとまり保育での暗闇探険、卒園前の少人数グループで行う裏山探険などを行っている。子どもたちは、多くのことが禁止された状況の中におり、本来自分のもっている能力を十分発揮できないままの子どもも多いと言われている（汐見，2001；河合，2003 など）。本園では、そのような禁止をなるべく少なくし、子ども



道なき道を行く裏山探険

もたちが自然に立ち向かっていくことを推奨した保育実践を行っている。これらの実践を通して、積極性やたくましいチャレンジ精神を育んでいきたいと考える。

3. 取組に対する評価・検証方法

上記5つの資質や能力を検証する方法は、対象が幼児であるため、また内面の育ちを含むものが多いためにいずれも容易ではないが、以下の方法を検討している。

①自己肯定感・他者への信頼感の獲得

保護者によるアンケート。

②遊びを通した好奇心や探究心の育成

具体的な学びの場面をエピソードにより抽出。また、これらの能力がその後の学力に反映されているかどうか検証するため、卒園児の標準テストの成績を平均と比較。

③自然とのかかわりを通した豊かな感動体験による感性の涵養

保護者によるアンケート及び、エピソードによる事例の収集。

④森での遊びを通した体力・身のこなしの向上

幼児の運動量の調査。可能であれば他園と比較。また、幼児期に培った能力がその後の体力に反映されているかどうか検証するため、卒園児の新体力テストの成績を平均と比較。

⑤自然とかわる遊びや生活によるチャレンジ精神の育成

保護者によるアンケート及び、エピソードによる事例の収集。

引用文献

グローバル人材育成推進会議(2012) グローバル人材育成戦略 審議のまとめ. 平成 24(2012)年 6月 4日. 文部科学省.

(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/> 閲覧 2014.2.15)

日切 慶子・関口 道彦・小嶋 治鈴・久原 有貴・松尾 千秋・杉村 伸一郎・七木田 敦(2012) 森の幼稚園の保育環境が幼児の体力・運動能力に及ぼす影響—MKS 幼児運動能力検査および新体力テストによる検討—: 学部・附属学校共同研究紀要, 41,

pp. 115-122.

広島大学附属幼稚園（2012）グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培う．平成24年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書：pp.3-5.

河合雅雄（2003）森に還ろうー自然が子どもを強くするー 小学館

小林辰至（2000）原体験を基盤とした科学的問題解決学習のモデル化に関する研究．兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 博士論文：pp.16-17

国立青少年教育振興機構（2010）「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書
(http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/62// 閲覧 2014.2.15)

文部科学省（2008）幼稚園教育要領

汐見稔幸・加用文男・加藤繁美（2001）これが、ボクらの新・子どもの遊び論だ 童心社
体験活動と指導のあり方に関する調査研究委員会（2004）「少年期に必要な体験活動と指導のあり方」ー少年・少女が一人前になるための体験活動ー．国立信州高遠少年自然の家：pp.44-101

Ⅱ. グローバル化に対応した人材育成に関する取組について

広島大学附属小学校

1. はじめに

グローバル化に対応した人材育成について、本校では、昨年度までの段階で、理論的なアプローチとして、グローバル化した社会において求められるであろう資質・能力を『社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発』に、次のようにまとめている⁽¹⁾。

- 基礎的能力（基礎的知識・技能）、活用力（思考力・判断力・表現力）、語学力
- 知識スキル（多文化・自文化）、異文化尊重の態度と異文化の価値観の理解
- コミュニケーション能力（対話力・交渉力）、課題解決能力（情報収集、分析能力、批判的思考力、代替案の思考力・提案力）

本年度は、さらに、きわめて様々な概念を包含するグローバル化について、その規定を試みた。そして、実践的なアプローチとして、上述の資質・能力を育成するための授業に取り組んできた。そこで、本論では、グローバル化の規定について、これまでの知見から明らかになったことを報告するとともに、今年度の実践を、第2回の会議において提案された以下の3つの枠組み、特に要素Ⅰと要素Ⅲに基づいて述べていくことを目的とする。

- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

2. グローバル化の規定について

まず、国レベルで、グローバル化がどのようにとらえられているのか。この点について明らかにした。これについては、文部科学省にその記述が見られる。平成21年に「国際教育交流政策懇談会（第1回）」が行われ、その後計9回の会議が行われている。その中で、「グローバル化」を、「情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物材、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義があいまいになるとともに、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象⁽²⁾」ととらえている。さらに、平成25年には、中央教育審議会の答申において、我が国を取り巻く「危機的状況」の一つに、「グローバル化の進展」が掲げられている。それでは、上述に示した文部科学省のグローバル化のとらえが、どのように「危機的状況」となりえるのだろうか。この点については、これまでの本校のグローバル化に伴う理論的アプローチの中で、国際競争の激化といった、経済的影響、異文化交流の機会の増加と、文化的差異の減少といった、文化的影響、そして地球規模での環境問題の進展といった環境的影響の3点について言及している⁽³⁾。

このような社会において、林はその論稿で、藤田英典の論を引用しながら、情報化とグ

ローバル化がすすむ社会においては、共生原理に基づいた社会構築を目指すのか、それとも競争原理に基づいた社会構築を目指すのかという点について言及している。林は共生原理に基づいた社会構築を目指す立場をとっており、「固有の文化を認め合いながら、共生のあり方を求めているような素養・資質を育てていくことが、これからの学校教育に課せられた大きな課題」であると述べている⁴⁾。そして、その専門性から、体育科の学習集団づくりについて言及している。このように、「文化」という側面で見れば、競争原理に基づいて、排他的に他の文化をとらえるのではなく、固有の文化を認め合いながら共生の道を歩もうとすることが、ひいては、ヒュー・マッカイの指摘するところのアメリカないし西洋の文化が受け入れられ、諸国民に広がるという「文化帝国主義 (Cultural imperialism)⁵⁾」と呼ばれる地球規模での文化の均質化に対応するための一つの方向性と言えるであろう。

しかし、その一方で、「グローバル化」には、国際競争の激化という一面があることもまた事実である。そのような現状において、共生の原理だけで、本当に「グローバル化」に対応することができるのであろうか。この点については、競争の原理もまた、「グローバル化」に対応するためには必要なのではないかと考える。競争の原理が必要といっても単に体育科において競争を奨励すればよいという意味ではなく、そこには新たな技術開発により国際競争を勝ち抜こうとするための科学教育の充実であったり、弁論の場にて、相手を論破するための論理の習得であったり、国際政治において、自国に有利に物事を進めるためのコミュニケーション能力であったりと、いろいろな面が存在すると考える。

すなわち、「グローバル化」が多様な意味を含んでいるため、それに対応する教育について考える際には、「共生」と「競争」という視点が不可欠なのではないかと考える。一見すると相反するように見えるこの視点であるが、これらを両立させた教育こそが「グローバル化」に対応する教育の一つの形ではないかと考える。そして、このような教育は多様な教科による教科教育全体を通して身に付くものではないかと考える。言い換えれば、多様な意味を含む「グローバル化」に対して、多様な教科全体でもって対応していこうとする方略であるといえる。

以上を踏まえ、本論では既出の文部科学省のグローバル化のとらえに、グローバル化に対応したカリキュラム構成の原理として「共生」と「競争」という視点を取り入れ、次のように規定することとする。

情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義があいまいになることで、カリキュラムの目的論、内容論、方法論にも大きな影響を及ぼし得る、共生と競争の両方が求められる社会の多面的な変化。

グローバル化に対して、このように規定をし、本校では実践を行ってきた。それでは次に、本委員会において提案された3つの枠組み、特に要素Ⅰと要素Ⅲに基づいて述べていくことを目的とする。

3. 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 —本校 英語科の実践—

(1) 本校英語科の概要

広島大学附属小学校では、「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力」の向上のため、平成25年度より第1学年から英語を教科として導入し小学校6年間のカリキュラム開発を行った。

本校英語科の目標と低・中・高学年各段階の目標（表1）は次の通りである。

〈広島大学附属小学校 英語科目標（平成25年度）〉	
英語を通じて、ことばや文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、英語コミュニケーション能力の基盤を養う。	

表1 《附属小学校英語科の低・中・高学年各段階の目標（平成25年度）》

	コミュニケーションの 関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
低	英語を用いて積極的にコミュニケーションを図る。	自分や身の回りのものについて英語で聞くことや話すことができる。		自分や身の回りのものについての英語の単語や表現を知る。
中	英語を用いて積極的にコミュニケーションを図る。	地域や郷土について英語で聞くことや話すことができる。		英語の綴りや発音・イントネーションなどについて知る。
高	英語を用いて積極的にコミュニケーションを図る。	社会や世界について英語で表現することができる。	社会や世界について英語で理解することができる。	言葉の決まりや、異なる文化について理解する。

これらの目標を達成するため、表2に示す指導形態を用いて、授業を行った。

表2 各学年の指導時間・指導形態・学習場所

学年	時間数	指導形態	場所
1～2学年	週1時間 (年35時間)	英語専科教員とALTのTT	各教室・英語教室での一斉指導(32人)
3～6学年	週2時間 (年70時間)	英語科専科教員・ALT・非常勤講師	各教室・英語教室での少人数指導(27人)

注) 1～2年生は32人学級での一斉授業、3～6年生は40人学級2クラスを3等分した少人数指導。

(2) 各段階での取り組みについて

児童に英語コミュニケーション能力の基盤を身につけさせるため、発達段階や指導時数を考慮し、以下のように実践を行った。

(ア) 低学年

初めて英語に触れる低学年では、楽しみながら英語を学ぶ体験活動を重視し、主に身近な語彙や表現のインプットに主眼を置いて授業を行う。授業はALTとのTTで、ほぼ全てを英語で行い、音声での英語表現を主に扱う。時には教室で席に座って授業をすることもあがるが、多くは英語教室で体を動かしながら行っている。様々な活動を通して子ども達が豊富な英語のインプットに触れ、分からないことがあっても様々な手がかりをもとに推測しながら聞き続ける力を身につけさせることをねらいとしている。

(イ) 中学年

中学年では、低学年で慣れ親しんだ語彙・表現をスパイラルに扱い、その定着を図る。三年生からは文字も扱い、フォニックスの学習も取り入れて徐々に読むこと（単語レベル～文レベル）の学習も導入する。また、児童の負担を考慮しながら読むことから、書くことの指導も取り入れている。



図1 カードを用いて、聞こえてきた単語を作る (ten)



図2 カードを用いて、聞こえてきた単語を作る (magnet)



図3 聞こえてきた単語をノートに書く

(ウ) 高学年

小学校での英語学習では音声での「聞くこと」「話すこと」の学習の割合が高い方が良いと考えるが、高学年ではそれらに「読むこと」「書くこと」を加え、児童の負担を考慮しながら4技能を統合させて指導を行った。例えば、「読むこと」の学習では、辞書を活用し Oxford Reading Tree の絵本を読む学習を取り入れた。「書くこと」の学習では、5年生で、これまでに学習してきた表現を用いてアメリカの North Davis Elementary School とグリーンティンカードの交換を行った。



図4 辞書での学習

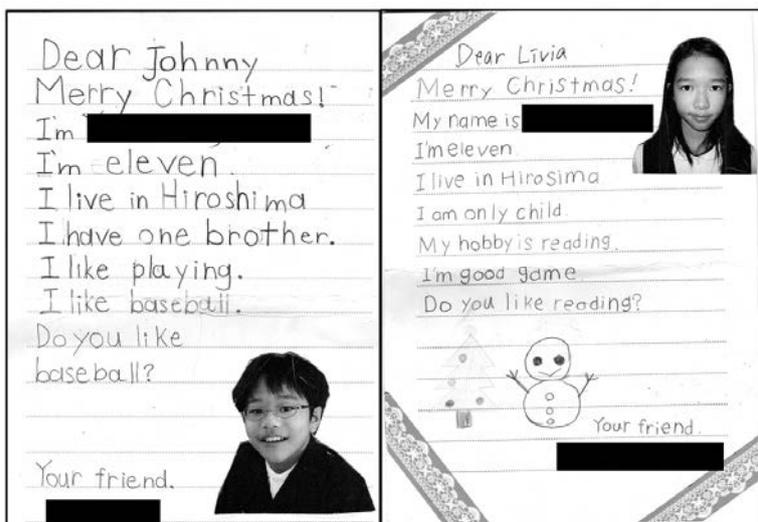


図5 5年生児童の書いたクリスマスカードと返事で送られてきたバレンタインカード



(3) 異文化理解についての取り組み

日頃の授業で ALT（米国出身）による異文化の紹介等も取り入れているが、児童に

「外国の文化＝アメリカの文化」という先入観をもたせる危険性がある。そこで本年度は、広島大学教育学研究科の留学生3名（中国出身・タイ出身・インドネシア出身）を招致し、各出身の国について英語でプレゼンテーションを行ってもらおう機会を設けた。児童も日頃触れることのない文化圏について知ることができ、「タイでは男性と女性とで使う言葉が違ふと知った。」「(イスラム文化圏で) 女性が顔を見られてはいけない理由がなぜか気になった」などの感想をもつことができた。今年度は1回のみでの取り組みであったが、今後も広島大学への留学生の協力を得ながら、機会を増やしていきたい。

(4) 評価について

3～6年生では、各活動の観察に加え、7月・11月・2月末にペーパーテストを実施、加えて、音読テストやスピーチ・プレゼンテーション・インタビューテストなどのパフォーマンステストを実施した。1・2年生については年度末に1回（次年度は、前・後期1回ずつの予定）インタビューテストを実施した。

ペーパーテストは、公益財団法人日本英語検定協会の実施する児童英検を参考に作成した。主にリスニングの試験で、児童はスクリーンに提示される絵や写真を見ながら教師の出す問題を聞き、それに選択肢で答えるものである。テストの結果は概ね良好であったが、「テストを受けることで、確認になった」「テストを受けて、解説を聞いてわかってきた」という肯定的な感想と、「難しかった」「家で英語のテスト勉強するのが大変」などという否定的な感想と両方がみられた。



図6 ペーパーテストの例



図7 スピーチ発表



図8 インタビューテスト

小学校に英語が導入されはじめた頃には、評価を行うこと自体が児童を英語嫌いにしてしまうという認識があったようであるが、バトラー（2005）の指摘するように、「評価を導入することで、英語嫌いが増えるのではなく、評価の方法とその結果の使い方を誤ることで英語嫌いを作る可能性が出てくる⁶⁾」と考える。適切な評価とフィードバックは自律的な学習態度につながると考えている。評価の行い方については、今後も改善していく必要がある。

(5) 今年度の取り組みのまとめと今後の課題

今年度は英語科創設1年目として、カリキュラムの作成、実践、評価方法の開発等を行った。前期終了時（10月）に行ったアンケートによると3～6年生の児童（有効回答数304名）のうち94%以上が英語の授業は「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と回答している。また、聞いて分かったり、話せたりなど、自分が使

える英語の単語や文が「増えている」「どちらかと言えば増えている」と回答した児童は89%であった。

英語の技能面での伸長に関しては、今年度は外部試験等での測定を行っていないので定かではないが、「聞くこと」についてはある程度の技能が身につけていることが期待できる。しかしながら、1人1人を対象としてインタビューテストを実施した実感から、一定の成果は見られるもののそれほど飛躍的に英語の技能が伸びたという印象はもてなかった。これは、英語の授業が週2時間しかなく、家庭学習などでの反復練習などを課さなかったことなどから、英語に触れる時間が量・頻度ともに十分ではないことが要因の一つとして考えられる。英語技能の伸長を目指すのであれば、カリキュラム・指導方法・評価方法とともに、英語の授業時数や家庭学習の持ち方についても検討していかねばならないと考えている。

4. 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー ―本校理科の実践―

(1) 理科の学習と異文化理解の関連について

科学とは、自然を対象とし、実証性、再現性、客観性が保証されている科学の方法によって導き出された諸法則や原理などの総体を指すが、『小学校学習指導要領解説理科編』において、科学は「人間が長い時間をかけて構築してきたものであり、一つの文化として考えることができる」⁽⁷⁾ともとらえられている。つまり、科学は文化の一つとしてとらえることができるのであり、科学を学習の対象とした理科を学ぶことは、子どもたちにとっては、すなわち、未知の文化に触れる営みであると解釈することができるのではないだろうか。

理科に対して、このような立場をとるのであれば、異文化同士が触れあい、交錯する機会が多くなるであろう「グローバル化」した社会で生き抜くために、子どもたちが理科を通して何を学ぶことができるのかという問いについては、次の2点が考えられるのではないか。

○科学的知識の確実な獲得（内容知という側面）

理科においては、実験や観察の過程を通して、科学的知識を獲得していくことが、大きな目標の一つとなる。先述の「グローバル化」した社会においては、競争と共生の両方の要素が必要とあるが、特に、競争という点について、資源の乏しい日本において、様々な技術を確立していくために、このような科学的知識を確実に獲得していくということが必要であると考えられる。

○異文化を理解しようとする際の科学的アプローチの獲得（方法知という側面）

日本の理科の授業は、問題を解決していく過程そのものが授業のプロセスになっているところにその特徴があるといえる。そして、そのように問題があり、予想や仮説を立て、実験や観察を通して、新たな知見を得ていく過程そのものもまた、情報を取り扱っていく際に重要であると考えられる。つまり、知識基盤社会と呼ばれ、情

報が錯綜する時代においては、情報をいかに扱うかが学びの際の大切な視点となり、情報を先述のように科学的に扱っていくことは、情報の活用という視点において必要であると考えます。

以上のような考えのもとで、授業実践を行い、その効果を検証した。次節以降、その詳細について述べていくこととする。

(2) 小学校第5学年「電磁石」の実践について

本単元で主として取り扱う電磁石は、電気エネルギーを他のエネルギーに変換することができるものであり、その例にモーターがある。これは電気エネルギーを回転運動のエネルギーに変換することができる道具であり、私たちの身の回りに扇風機や自動車という形をはじめ、いろいろなところに用いられている。

しかし、児童たちにとっては、そのような身の回りの物と電磁石とはなかなか結びついていない。したがって、電磁石の学習においては、生活経験からの素朴概念はほとんどないものとする。つまり、児童たちには、情報を科学的に処理しようにも、活用する情報自体乏しいものがあると考えます。小学校段階の理科においては、4年生の電池の直列つなぎや並列つなぎの学習、第6学年のコンデンサやLEDの学習等、このような単元が「電気」系統には少なからず見られることではないだろうか。

そこで、本単元のような内容の指導においては、教師側が実験等を行う際には、教師から児童に情報を与え、情報活用の仕方がある程度教える必要があるのではないかと考えた。そこで、本単元の指導においては、描画法を用いることとした。描画法は、隅田(2000)をはじめ、様々な研究により、授業での活用による効果が示されている⁽⁷⁾。本時では実験の結果から得たことを考察する場面において、描画法で整合性のつく説明活動を取り入れることを単元を通じて行った。この学習活動における児童たちの情報活用に焦点を当て、教師側から与えることについての効果について、内容知の定着度から検証を行った。

なお、『小学校理科学習指導要領解説理科編』ではコイルの巻き数が増えると、電磁石の強さが変わるとなっている⁽⁸⁾が、電磁石の磁力の強さに関係するのは単なるコイルの巻き数ではなく、単位長さあたりのコイルの巻き数である。この点について、考えさせるために、コイルの巻き方が密になっているものと、疎になっているものの違いについて考えるような時間をとりたい。故に、本時では、コイルの巻き方が密になっている方が、同じ巻き数のコイルでも疎に巻いてあるコイルと比べて、磁力が違うということに気付かせることを目標とした。なお、本時の指導については、次項に示す流れで行った。

指導過程	学習内容・学習活動	指導上の留意点・評価
課題の把握	○これまで学習したことを想起する。 ・電磁石は電流の強さを強くすると磁力が強くなる。 ・電磁石はコイルの巻き数を増やすと磁力が強くなる。	○前時までのノートの記述を参考にさせる。 ○同じ 100 回巻のコイルでも、巻き方が違うことに気付かせる。
課題の提示	100 回巻のコイル A (密に巻いてある) と B (疎に巻いてある) では電磁石の磁力の強さは同じか？ちがうか？	
予想	○予想した理由等について、描画法を用いて自分の考えを表現する。 【個人→全体】	○描画法を通して、自分の考えに対する説明活動を行わせる。その際には、科学的に整合性のつく説明ができているかどうか留意する。
実験	○同じ 100 回巻のコイルでも、磁力が違うのかどうかについて、実験から検証する。 ○実験結果について、記述する。	○実験前と実験後の自分の考えを比較させるために、実験結果を書かせる。
実験結果の考察	○実験結果の記述を根拠に、描画法を用いて、分かったことについてまとめる。	

(3) 実践結果と課題

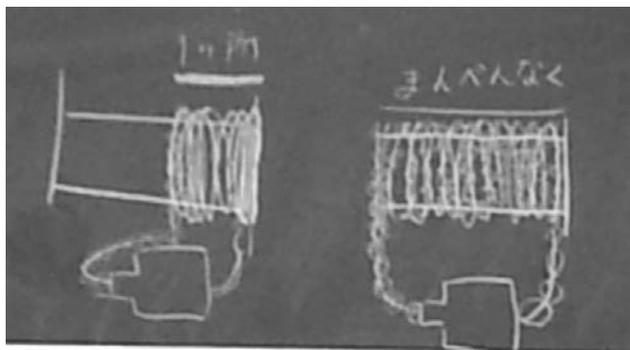
本実践の効果について検証する為に、授業後に、描画法を用いた学級と、用いずに指導した学級について、内容の定着度に対する違いの有無を調べるために、内容の理解度に関する定着度に関するテストを授業から2週間後に行った。

【A 群 39 名：描画法をもちいていない】

教科書の記述でよく見られる授業の流れで本単元の授業を行った。その流れでは、電磁石の磁力の変化について考える際には、描画法などは用いずに、実験結果という事実をそのまま根拠として、電磁石の磁力について結論付けるような授業を行った。

【B 群 37 名：描画法をもちいている】

先述のように、描画法を用いる際には、授業者が、「コイルに鉄芯を入れて、電流を流すと、「何か」が出てきているから、電磁石ができる」ということを教えて、描画法によりイメージ図を描かせる指導を行った。なお、ここでの「何か」というのは、



厳密に言えば、磁力線と言われるものが出て、磁界できることであるが、小学校段階ではそれは指導の範囲を超えているので、磁力線の内容にはふれずに、指導を行った。前頁の写真は児童が本時に描いたイメージ図の一例である。導線に描かれた○が、電流を流すと出てくる「何か」であり、児童はこれをそれぞれに自由に名前をつけて思考をしていた。これがコイルにどのような変化を及ぼすのかを実験結果をもとに説明する活動を単元を通じて行った。

A 群と B 群の定着度調査の正答率の平均を比較すると、次のようになった。なお、本単元の学習に入る前の段階では、両者の学力に、有意な差はなかった。

A 群の平均正答率	B 群の平均正答率
51.28%	60.98%

A 群と B 群の差が統計的に有意かを確かめるために、有意水準 5%で両側検定の t 検定を行ったところ、 $t(74) = -3.00273, p < .05$ となり、両者の平均点の差は有意であることがわかった。

このような結果から、描画法を用いて指導したクラスにおいては、電磁石の内容に関する理解の定着度が高いといえる。

設問ごとに見ていくと、調査問題は、電磁石で学習したことについて問う問題と、電磁石で学習したことを活用して解く問題で構成されているが、後者については、A 群が平均正答率 51.85%に対して、B 群は、66.67%であった。これは、授業段階で、電磁石の実験結果から得られた情報を、描画法を用いて、整合性をとりながら説明する活動により、情報の活用の仕方が A 群に比べてより分かったことが原因の一つではないかと考える。具体的に、本時の例で説明すると、実験の結果として、「密に巻いているコイルの方が、クリップがたくさんついた」という事実が得られた。この事実から、本時の課題である「電磁石の磁力の強さ」について言及する際、A 群の場合は、「密に巻いているコイルの方が、クリップがたくさんついたから、密にまいているコイルの方が電磁石の強さは強い」と考察において結論付けている。しかし、B 群の方は、同じような結果を得た時に、「密に巻いているコイルの方が、クリップがたくさんついた。これはつまり、コイルに電流を流すことで出るものが、密に巻いているコイル方が疎に巻いているコイルより集中しているから、電磁石の磁力が強くなったと考えられるのではないか」といった結論を出していた。両者のちがいは、事実を科学的根拠として書き連ねて、結論とするという A 群と、事実を科学的根拠として、そこから整合性がとれるように、描画法を用いてイメージをした上で、結論を出すという点にあるのではないか。このような情報の活用の仕方を単元を通して続けていくことでこのような差ができたのではないかと分析する。

その一方で、他学年の「電気」系統の場合には、描画法において、どのような実践をおこなえば良いのかという点や、他単元、それも、児童が素朴概念をある程度生活

経験から得ているような単元の場合には、描画法を用いた情報活用の仕方に差が出るのかという点についてはまだまだこれから検討していく課題である。

5. おわりに

ここまで、広島大学附属小学校の取り組みについて、英語科を中心とした、語学力・コミュニケーション能力に関する学習活動と、異文化理解を中心とした、理科の学習活動について、その効果の検証等を含めて論じてきた。

英語科の実践については、まだ1年目であり、始まったばかりであることから、先に述べた課題について検討し、カリキュラムを完成させていく必要がある。

理科の実践については、1つの教科の実践にすぎず、冒頭に述べたように、グローバル化に対応する人材育成のためには、教科教育全体を通じて行う必要がある。今回の実践を一つの事例として、他教科における取り組みについて、実践を重ね、効果を検証していく必要がある。

急速に進行するグローバル化に対応するべく、英語科をはじめとした本校での取り組みについて、実践を積み上げていくことは喫緊の課題であると考えられる。本年度の事例をもとに、次年度においても、実践を積み上げていきたい。

文献

- (1) 広島大学附属小学校, 「社会のグローバル化に対応した広島大学附属小学校の取り組み」, 『社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発』, 2013
- (2) 文部科学省国際教育交流政策懇談会, 「グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例」,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/attach/1247196.htm
- (3) 文部科学省中央教育審議会, 「第2期教育振興基本計画(答申)第1部 総論 概要 ～我が国の危機回避に向けた4つの基本的方向性～」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/08/1334381_01_1.pdf
- (4) 林俊雄, 「共生の世紀に求められる学力とは」, 『学校教育』, No.1066
- (5) デヴィッド・ヘルド編著 中谷義和監訳, 『グローバル化とは何か 文化 経済 政治』, 法律文化社, 2002
- (6) バトラー後藤裕子, 『日本の小学校英語を考える ―アジアの視点からの検証と提言―』, 三省堂, 2005
- (7) 武村重和・秋山幹雄編集, 『理科重要用語300の基礎知識』, 明治図書, 2000
- (8) 前掲書(1)

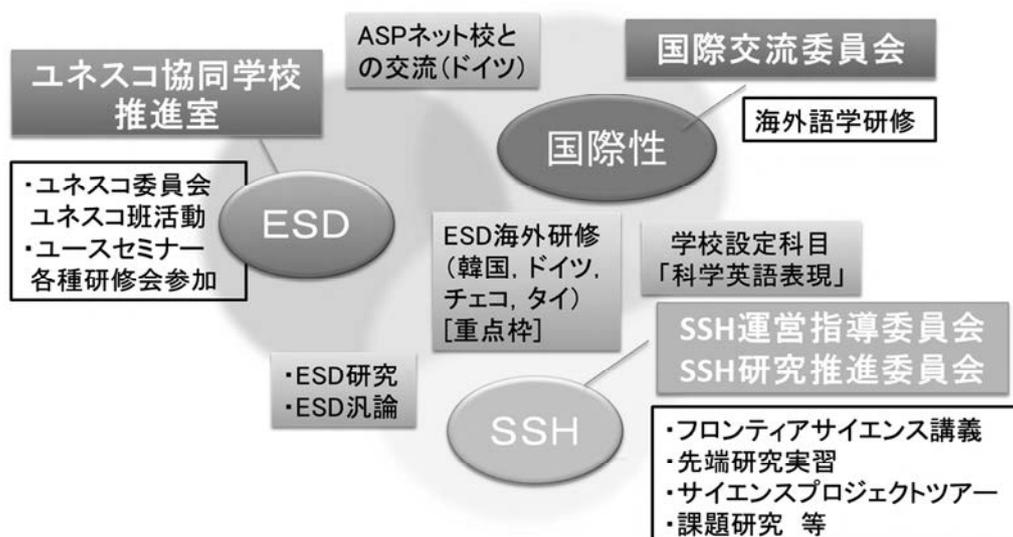
Ⅲ. グローバル人材の育成のための取り組みと今後の課題

広島大学附属中・高等学校

1. グローバル人材育成の3本の柱

本校がこれまで組織的、継続的に取り組んで来たグローバル人材育成のための教育プログラムは、次に示す3つの柱よりなる。

- (1) ユネスコスクール 昭和28(1953)年よりユネスコ協同学校に参加
 - ・広島ユネスコ高校生海外研修第1回1991年(訪問国米国)以降5ヵ年生徒参加
 - ・2006年度「アフリカの子どもたちに運動靴を」に毎年参加
 - ・ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)による国際教育交流事業に本校教職員2008年以降3ヵ年参加
- (2) SSH事業における海外研修
 - ・平成21(2009)年度,重点枠でドイツへ10名
 - ・平成22(2010)年度,コアSSH事業として,ドイツへ14名
 - ・平成22~25年度,韓国天安中央高等学校への訪韓,訪日研修(1回の訪韓で生徒約40名,平成25年度までで延べ150名程度訪韓,訪日参加,韓国の高校生約120名参加)
- (3) 国際性の育成
 - ・毎年,数名の生徒が約1年間の留学
 - ・平成20年,生徒20名がイオン環境財団イオン1%クラブ企画・出資プログラムに参加(ドイツ)
 - ・平成14年度より,高校1年の春期休暇中に約2週間の「海外語学研修」実施
 - ・留学生を数年に1名程度受け入れ



本校が取り組む教育研究の概念図

2 カリキュラム開発の事例

(1) 幅広い視野の育成を目指した取り組み

(ア) SSH事業（通常枠）に関する取り組み

・フロンティアサイエンス講義

平成 25. 6. 26 (水) 「地震学の発展でわかったこと、まだわからないこと、社会の役に立てること」 気象庁地震火山部 管理課長 上垣内 修 先生

平成 25. 7. 2 (火) 「地球外生命体が存在すると考えるわけ」 広島大学大学院生物圏科学研究科 准教授 長沼 毅 先生

平成 25. 9. 17 (火) 「宇宙はどこまで続いているの？」 KEK キャラバン 高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所 教授 橋本 省二 先生

平成 25. 10. 24 (木) 「フォトクロミズムー光によって色が変わる分子ー」 広島大学大学院理学研究科 助教 波多野 さや佳 先生

平成 25. 11. 6 (火) 「数学で人体を見る・視る・診る」 岡山大学大学院環境生命科学研究科 教授 水藤 寛 先生

・「科学と倫理」の取り組み

平成 25. 11. 20 (水) 「科学技術と倫理 未来に向けた倫理とは」 東北大学大学院文学研究科教授 直江 清隆 先生

平成 26. 2. 17 (月) 「倫理的判断・決断?誰のための研究なのか??」 獨協医科大学国際疫学研究室准教授 木村 真三 先生

(イ) ESDに関する国内外の取り組み

[国内] 平成 24. 8 月上旬 「SPACE」(広島県・山口県のユネスコ活動に取り組む高校生の交流) ディスカッション (4名参加)

平成 24. 8. 9～12 「ユネスコ全国子どもキャンプ」岩国市(山口県ふれあいパーク) スタッフ(指導員として5名参加)

平成 24. 11. 23 エコイノベーションメッセ 生徒発表「ユネスコ活動とエコイノベーション」(2名参加)

平成 24. 12. 23(日) 広島ユネスコ協会「国際理解セミナー」に参加

[国外] 平成 24. 3. 29～4. 5 カンボジアスタディーツアー参加 高校生1名

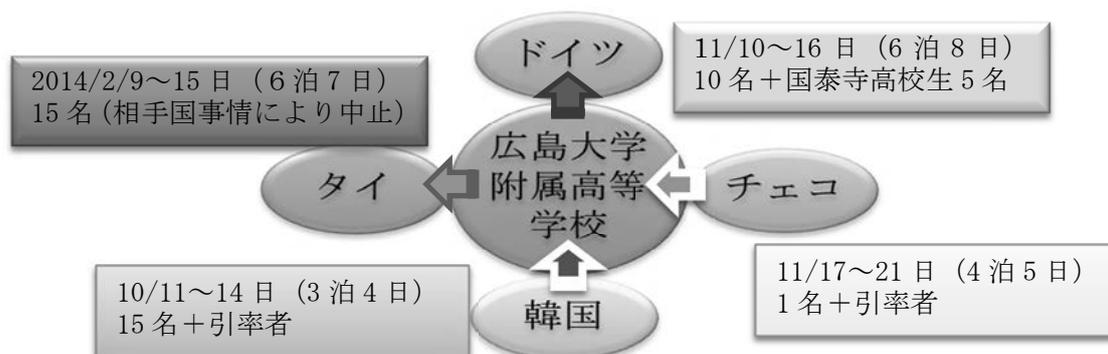
平成 25. 7. 18 (木) 朴大王教授(広島修道大学), 本校教諭による事前学習

平成 25. 7. 29 (月)～8. 1 (木) 韓国海外研修 韓国 天安中央高等学校 訪問

平成 26. 1. 14 (火)～1. 15 (水) 韓国訪日研修 韓国 天安中央高等学校 来校

(ウ) SSH事業（特別枠）における、海外校との連携事業

1) 訪問国、受け入れ国の関係、及び実施時期と参加生徒数



2) 研修内容

事前に実施してきた各国生徒による共同調査研究の成果を発表する。共同調査研究テーマとしては、地域の特性に応じた内容を計画している。(ドイツ：ゴミ処理を通じたエネルギー問題, チェコ：醸造所研修によるバイオ技術から見た環境問題, 韓国：瀬戸内海の開発と環境保全, 韓国：干潟の生態系と環境に与える影響, タイ：主に河川の水質から地域の水資源と持続可能性について) また、海外連携校生徒と一緒に、現地または日本でフィールドワークを行い、得られた成果に基づいて討論を行う。

3) 派遣, 及びホスト生徒について

①対象生徒

- ・高等学校1, 2年の全生徒を対象とする。
- ・ドイツ, タイのいずれか一カ国に参加できる。
- ・連携国(ドイツ, タイ)を訪問する高校1年生は, 平成26年度両国生徒訪日時のホスト生徒となる。
- ・チェコ, 韓国訪日交流事業で, ホスト生徒となった高校1年生は, 平成26年度連携国を訪問することができる。

②派遣生徒の主な活動

- ・国内において環境に関する調査研究を行い, プレゼンテーション資料を作成する
- ・連携国の生徒とインターネット等による情報交換を行う
- ・ドイツまたはタイの連携校を訪問し, 調査研究内容の発表, 相手校の生徒と合同フィールドワーク, プレゼンテーション, 意見交換等を行う
- ・実施内容を校内で発表する
- ・平成26年度, ドイツ, タイからの生徒訪問の際, 平成25年度に派遣された高校1年生はホスト生徒として参加する。

(2) 英語によるコミュニケーション能力育成のための取り組み

学校設定科目「英語表現」のカリキュラム開発

平成25.7.26(金) プレゼンテーション特別講義(講師: 有限会社インスパイア副代表 ヴィアヘラー幸代先生)

平成25.11.22(金) ~23日(土) 「英語合宿」

- ・実施場所: (財)広島市未来都市創造財団 広島市国際青年会館
- ・プレゼンテーションワークショップ(講師: ヴィアヘラー幸代先生)
- ・海外研究者による講義(独立行政法人日本学術振興会のサイエンスダイアログ事業)(講師: 広島大学大学院先端物質科学研究科 Dr. Ahmed Abd El-Rahman ASKORA 氏) マイケル・コリンズ先生(本校 ALT), 及び英語教諭の指導による英語ディベート
- ・英語による課題研究ポスター発表および指導

(指導者：広島大学国際センター准教授 恒松直美先生，ラング教育センター ALT，広島大学大学院理学研究科の引地奈津子氏，本校英語科・理科・数学科 教諭)

3. グローバル人材育成のための教育実践から抽出される資質・能力と評価・検証の在り方

平成 22 (2010) 年から本格的に実施している国際交流事業 (韓国研修) の実践を通して，グローバル人材に求められる資質・能力を次のように (1) ～ (4) の 4 つのカテゴリーとそれぞれに対応した項目に整理した。

(1) 幅広い視野と見識

- ・幅広い基礎的教養
- ・自国や他国の歴史，文化，生活習慣等の理解
- ・自国と他国の違いを認識し，理解しようとする態度

(2) 異文化に柔軟に対応する力

- ・旺盛な好奇心
- ・既存の考え方を変えることを厭わない進取性
- ・他者を尊重する態度 (他者への思いやり)

(3) 他者と共生し，他者の良さを引き出す力

- ・相互に理解しあい，協力することの大切さやすばらしさを見出し，将来に渡って互いを尊重し合おうとする態度
- ・新たな価値を見いだそうとする創造性
- ・全体をまとめ方向性を示すリーダー力
- ・問題を発見し，問題解決のための方法を他者に伝える力

(4) 英語によるコミュニケーション能力

- ・英語による表現力
- ・積極的に他者に働きかける力
- ・相手の考えを理解し，自分の考えを論理的に組み立て，説明する力

今回，「グローバル人材に求められる資質・能力」の対応表と比較して，特に本園が取り組んだ要素は要素Ⅰ (語学，コミュニケーション)，要素Ⅲ (異文化理解，アイデンティティ) に相当する。またこの領域は，上に示した抽出要素では，要素Ⅰは，(4) に，要素Ⅲは (1) にそれぞれ対応している。

4. 成果と課題—来年度の取り組み—

グローバル人材の育成に求められる資質・能力として，先に示した 4 つのカテゴリーにおける (1) 「幅広い視野と見識」を備えた生徒の育成については，科学技術系領域のみならず，昨年度より実施している「科学と倫理」，また。本年度より総合的な学習の時間等で

高等学校第Ⅱ学年 200 名を対象に実施している「ESD 研究」等を踏まえ、多面的な取り組みとなってきた。また、特に（４）「英語によるコミュニケーション能力」の育成では、学校設定科目「科学英語表現」の実践による効果は大変高いことが海外での生徒達のパフォーマンスの様子や、アンケート結果から知ることができた。また、SSH 重点校事業として、４カ国（本年度は３カ国）との連携事業では、多くの生徒達が、合同授業参加の中で、あるいは各事業の事前・事後学習で、あるいは歓迎会等での海外高校生達との交流で、さらには共同で実施するフィールドワーク等で直接海外の生徒達とふれ合い、海外を身近にまた親しみを持って感じる機会を得ることができた。こうした取り組みは、先に３．で示した（２）「異文化に柔軟に対応する力」や（３）「他者と共生し、他者の良さを引き出す力」を育むものとして期待できる。

課題、また来年度の取り組みとして、次の点が挙げられる。

まず、これまで実践した内容を、様々な教育・研究機関における研究協力者等の指導、助言を得ながら精緻化、高度化を図ると共に、来年度はチェコ、韓国へ生徒を派遣し、またドイツ、タイから生徒を受け入れ、ESD に関する内容の教育実践を行う。さらに、韓国の科学重点校との連携を継続し、カリキュラム開発を続けていく。

また、その他のグローバル化対応の取り組みとして、教育実習生のグローバルマインド育成のために、本校が取り組んで来た実践内容を教育実習ガイダンス等の機会を利用して説明することや、いくつかの教科で英語を取り入れた授業実践等を行うことが考えられる。

以上示したそれぞれの教育活動に対して、生徒、教員等へのアンケート調査を実施し、分析を行うことによって、内容の評価・検証を行う。

IV. グローバル人材育成における共生社会の基盤となる「協調性・柔軟性」の要素に特化した取り組み

広島大学附属東雲小学校

1. グローバル化に求められる資質・能力と重点要素

情報やモノのグローバル化は、私たちの社会をとらえる見方を広げ、我が国の社会構造に変革をもたらす一方、経済面や文化面、環境面で様々な社会問題を引き起こしている。これらの問題は、自国だけで解決することが難しいため、他国との関係を保ちながら、互いに持続可能な社会が形成できるよう、価値観の違いを認め、尊重し合い、共生社会を築いていくことが重要視されるようになった。つまり、他国や他者との「共生」こそが、グローバル社会を構成していく上での鍵概念といえる。

これまで、教育において共生をとらえる場合、グローバル化によって社会問題が顕在化しやすい領域にスポットをあてて取り組まれることが多かった。そのため、学習内容は、「自然環境と人間」の共生や、「異文化理解」としての多文化共生に関するものがほとんどであった。しかし、これらの問題が生じる社会を形成しているのは、我々である。我々人間同士の関わりの在り方に着目して取り組まない限り、本当の意味でのグローバル社会の形成や社会問題の解決は、なし得ることができない。

そこで本校では、グローバル化の進む社会において、様々な国々や人々が共生関係を築く上で基盤となる「協調性・柔軟性」に着目し、これをグローバル化人材に求められる資質・能力の柱としてとらえることにした。この「協調性・柔軟性」を基に、グローバル人材育成推進会議で提言されたグローバル人材育成のための要素との関連を、以下に示す。

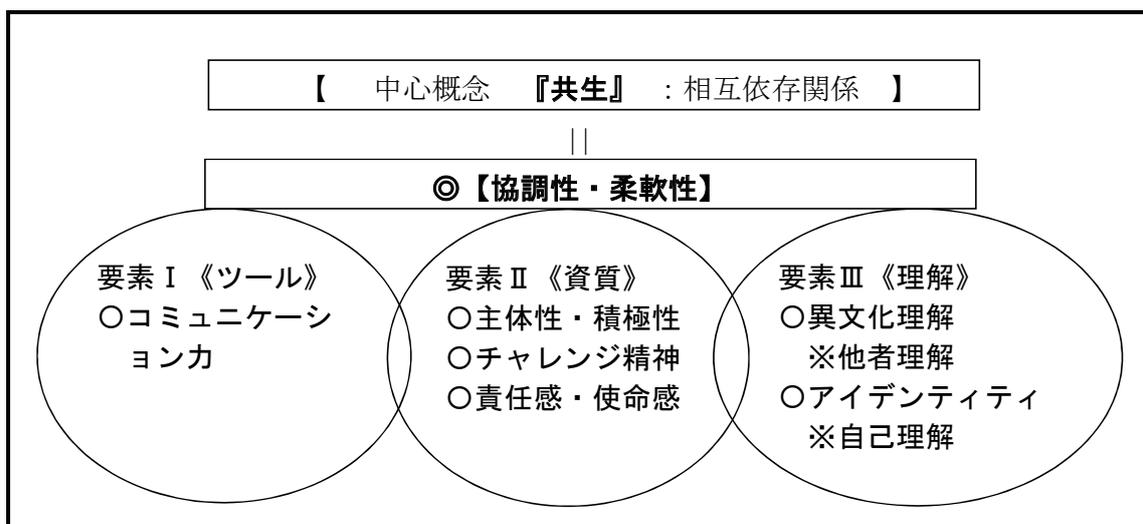


図1. 附属東雲小が考えるグローバル化に求められる資質・能力と重点要素

今回焦点化する「協調性・柔軟性」は、要素Ⅱに含まれる。要素Ⅱは人材育成の基盤要素である。本校では、「協調性・柔軟性」を中心としながら、それらと関連する「主体性・積極性」、「チャレンジ精神」、「責任感・使命感」も育むことをねらう。故に、3つのカテゴリーの中でも、要素Ⅱを中心として据える。しかしながら、資質を向上するには、他者はもちろん、自己の理解も必要である。また相手を知り、己を知るには、やはりツールとしての「コミュニケーション力」は大事である。これらの要素を「協調性・柔軟性」を育む下位の要素に定め、統合的に資質を高めていく。

以上、これらを本校がとらえるグローバル化人材に求められる資質・能力とした。

2. 本校の取り組みに関する方向性

本校は、単式、複式、特別支援の3つの学級形態をもつ全国唯一の附属学校である。「自立」をキーワードとしながら、その特色を生かし、これまで各学級のよさや違いを認めながら、ともに活動するカリキュラムを組んできた。この「自立」は、互いの「依存」によって成り立つものである。しかし、この「相互依存」には、今回のESDやインクルーシブ教育の「共生」に含まれている、単なる「協力」や「もちつもたれつ」の関係ではなく、互いに高め合う良い意味での「競争」関係も含まれており、実際の社会でもそれらを併せ持つ状況が多く存在する。今回着目したグローバル人材育成の要素の柱として挙げた「協調性・柔軟性」は、この人々の相互依存関係を形成していく上での重要な要素と言える。また、本校が大事にしてきた「自立」概念と、グローバル人材育成の要素として挙げる「協調性・柔軟性」には、共通点も多い。その共通点と違いをじっくり検討し、単式・複式・特支の互いの良さが生きる共生社会を形成するため、人と人との相互依存関係につながる「協調性・柔軟性」を重点としてカリキュラムの見直しを図っていく。

本校の年間のカリキュラムにおいて、児童の「協調性・柔軟性」の資質が、繰り返しかつ効果的に育まれるようにするため、今年度は以下の取り組みを行った。

第1に、子どもの意識調査のデータを基に、本校の子ども同士の関わりの中に、どのような傾向があるか、吟味・検討した。

第2に、本校の教育活動には、一体どのような集団形態で子ども同士の関わりが形成されているか、カリキュラムの中にある学校行事に着目し、類型化を行った。

第3に、分類した集団形態の活動が、どのように本校のカリキュラムの中に配置されているか、時間軸や学年の系統を基に検討した。

3. 今年度の取り組みの内容と方法

(1) 本校の子ども同士の関わりにおける傾向

本校では、先に述べたように、本校の特色である3つの異なる学級編成を生かし、各学級編成の児童が交流できる取り組みをカリキュラムの中に既に構成し、30年以上

継続して行っている。6年間を通して、所属学級での取り組みだけでなく、異なる学年や学級、性別、国籍、性格の児童と、色々な集団形態を組みながら目標に向かって取り組む活動を数多く行っており、学校規模ではあるものの、児童はお互いに関わり合いながら、小さな共生社会を構成していると言える。

しかし、児童の様子を見てみると、様々な人間関係づくりに関しての経験やスキルを積んでいるにも関わらず、一番身近な所属集団である学級内の人間関係において、その効果があまり見られない。

表1は、2012年度に行った各学級でのいじめアンケート調査の結果をまとめたものである。これによると、アンケート調査による個別対応を行ってきた結果、前期（7月）に比べ後期（2月）ではいじめに関する改善がみられることがわかる。

表1. いじめアンケート調査（2012年度）

	学年	いじめられたことある？		今も続いている？		いじめを見たことある？		今も続いている？		いじめを見たら？	
		ある	ない	続いている	終わっている	ある	ない	続いている	終わっている	助ける	何もしない
前期	低学年	59	98	26	34	51	108	26	24	142	0
	中学年	65	102	20	44	58	107	18	41	127	6
	高学年	70	98	14	56	89	79	34	49	113	19
	合計	194	298	60	134	198	294	78	114	382	25
後期	低学年	38	125	14	25	45	113	17	27	111	2
	中学年	68	100	21	46	64	105	12	45	98	10
	高学年	36	132	6	30	56	116	16	61	82	32
	合計	142	357	41	101	165	334	45	133	291	44

しかし、全校児童数に対する割合を見ると、いじめられたり、いじめを見たりしたことがある児童が約3割、いじめの継続に関しては、割合としては少ないものの、「続いている」と答えた児童が50名近くいることがわかる。また、いじめを見た場合の対応に関しても、「助ける」と答えた児童は半数以上いるものの、半年間で約1割減っている。それに対して「何もしない」と答えた児童の数は、先の数値に呼応するかのように増加していることがわかる。いずれの数値も学年が上がるほど人数が増えており、児童の発達段階が上がるとともに人間関係が複雑化していることが読み取れる。

いじめに関しては、児童のその時々々の心理状態で大きく変わり、各児童の人間関係の受け止め方も異なるため、1つの調査の数値だけで判断できるものではない。しかし、他の数値に改善がみられる中、いじめを見た時の対応で、何もせずに傍観する児童が増えている点は、抜本的な対策が必要と考える。

このような状況が生まれる要因は、一体何だろうか。

図1・図2は、いずれも毎年行っている児童への意識調査をグラフにまとめたものである。図1は「人と協力すること」、図2は「自分の考えをみんなの前で発表すること」の項目に関する結果を示す。

実際の調査では、小学1年～3年は3段階、小学4年～6年は5段階の選択肢で行

ったが、今回は全学年の数値を相対的にとらえられるよう、グラフの右に示す3を「できる・ややできる」、2を「どちらでもない」、1を「できない、ややできない」と、3段階で示した。

図1と図2を見比べると、本校では、自分は「人と協力することができる」と考えている児童が7割以上と多いことが分かる。実際の児童の様子や子どもの日記や学年末の文集の記述を見る限り、児童の実態と意識のずれには大きな変化はみられない。

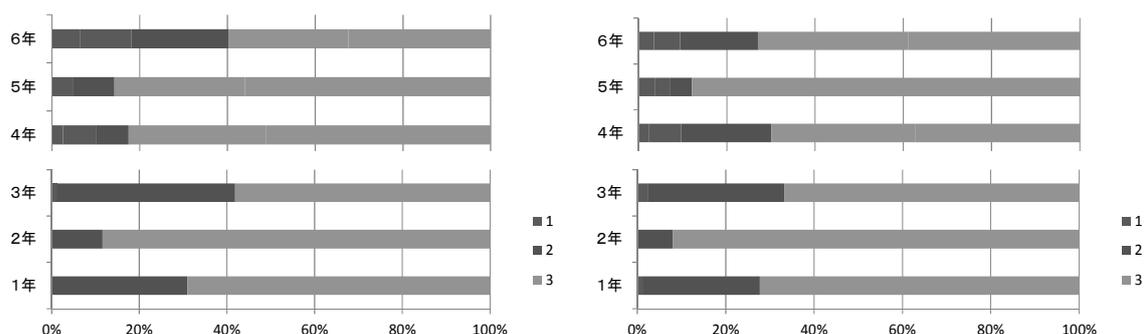


図1. 「人と協力する」ことに関する意識調査 (左 2011, 右 2012)

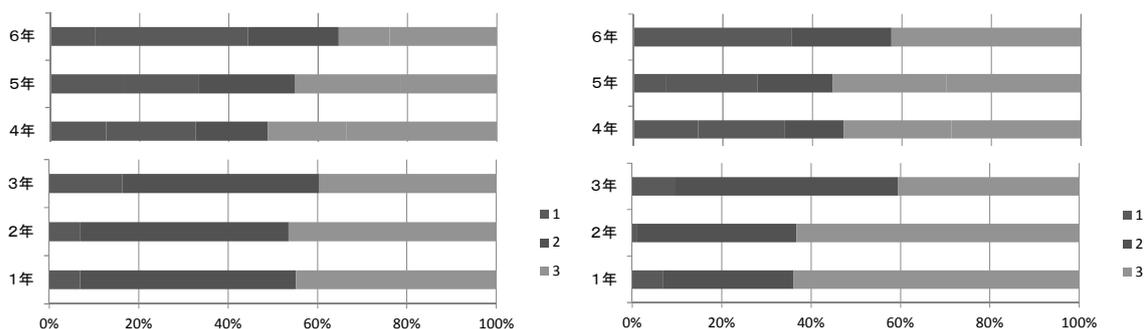


図2. 「自分の考えをみんなの前で発表する」ことに関する意識調査 (左 2011, 右 2012)

他方、「自分の考えをみんなの前で発表できる」と答えた児童は、学年でのばらつきはあるものの、平均して5割に満たない状況がある。自分の意思を表現する場において、受け身的な児童が多いことが見て取れる。特に「できない・ややできない」と考える児童に関しては、学年に挙がるにつれ多くなっていることがわかる。

本校では、高学年をリーダー、サブリーダーとして、縦割り班などではまとめ役として位置付けている。そのため、リーダーにはグループをまとめるための裁量が与えられ、自分らしい縦割りグループを形成することができるが、まとめ役としての自覚や責任も同時に求められている。高学年の縦割り等での姿を見る限り、どの児童も積極的に自分の考えを伝えたり、グループの協力や和を考えたりした言動をとっている。

しかし、クラス内では、思春期という発達段階もあり、縦割りでのリーダーとしての経験やスキルが活かされていないことが見て取れる。他の学年に関しても、縦割り

と学級では大きく様子が異なる点や、授業中での児童の声の小さい点などが、教員間の会議の場で取り上げられることがある。学級の枠を超えた集団作りや人間関係づくりが、学級内に生かされていない実態が垣間見える。

次に、図1・図2のデータを2011年と2012年で比較すると、1年経過して児童が変わっているにも関わらず、どの学年も同様の結果・割合となっていることが分かる。

児童の各発達段階における特性としてとらえる考え方もあるが、この分布を見る限り、それだけでは言い表せられない別の要因が考えられる。場合によっては、縦割り活動など縦の集団での関係づくりを行っていることが、かえって各学年の役割や特性などを生み出し、児童相互の関係性を固定化させているとも推測できる。

そこで、学級集団以外での様々な集団活動について、そのねらいを調べて分析することにした。すると、その多くは学校・学年への児童の所属感や自尊感情を高めたり、各児童の自立を育む上で人間関係を構築していく資質を養ったりする場として、自己や他者の「理解」に関するねらいを中心に取り組みが行ってきたことがわかった。

つまり、これまでの取り組みを通して、児童は集団内のメンバーへの個人理解を高めたり、メンバー内の人間関係を構築したりすることは可能であったが、メンバーの異なるものの見方・考え方を学んだり、メンバーの立場から物事を考えたり判断したりすることを意識して取り組んでいなかったため、児童一人ひとりの人間関係における見方・考え方を広げられず、学級内で汎用させることができなかつたと考えられる。

特に、活動する児童を支援する教師側に、その意識が低かったり、なかつたりしたことが、本校の異なる学級編成を生かす異集団での取り組みの効果を、学級内の人間関係に生かせない最大の要因と考えた。

さらに、身近な所属学級において発揮されない要因についても吟味・検討した。すると、児童が学校生活において、学級集団で活動する約9割が、教科等の授業時間であった。図2にあるように、「自分の考えをみんなの前で発表する」のは、その多くが授業である。この数値が低いことからわかるように、授業において先に示す本校の課題を意識して取り組まない限り、改善することはできないと言える。

本校では、附属学校の使命もあり、学級担任制であるものの、低学年から専門教科の乗り入れや専科による教科指導が行われている。児童の発達段階に合わせ学年が上がるにつれ、複数の教師が指導する体制となっている。そのため、学級担任だけのような意識をもって取り組むだけでは課題を克服することはできない。全教員が課題を意識し、連携して取り組む体制づくりが必要である。そして、各教師がそれぞれの専門教科を生かしながら、教科内容を通して共生社会に向けての児童の資質を高められるような取り組みを行っていく必要がある。

(2) 既存カリキュラムにおける子ども同士の関わりを育む集団活動の分析

次に、東雲小児童の共生関係を構築するためのカリキュラム開発に向けて、これま

での東雲小の特性を生かして行われていた異集団形成による活動を，既存のカリキュラム（表2）を基に種類別に整理した。すると，それらの活動は，学級別，学年別，色別，縦割り別，登校班別と，大きく5つの集団形態に分けることができた。また，それらの活動は，表2のように，主に学校行事として1年間のカリキュラムの中に種類ごとまんべんなく組み込まれているだけでなく，月ごと，週ごと，毎日といったように，様々なスパンで定期的かつ繰り返し行えるようになっている。

このように，東雲小のカリキュラムにおける集団活動の配置に関しては，既存のものを大幅に見直して新たな活動を組み直す必要性はないことが分かる。既存のカリキュラムにある活動をうまく活用し，児童が共生関係を築くことができるよう，活動のねらいを検討することが必要である。

表2. 附属東雲小の集団活動に関するカリキュラム

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	隔月	毎週	日々			
入学式(学年)	登校班別集会(登校班)	遠足(縦割り)	運動会(色組)	宿泊学習(学年)	登校班別集会(登校班)	宿泊学習②(学年)	大田川探検(学年・中学年)	東雲祭り(学級)	リズム縄跳び(学年)	東雲発表会(学年*養護は別)	登校班別集会(登校班)	六年生を送る会(縦割り・学年)	卒業式(学年)	登下校(登校班)	授業(学級・学年・色別)	掃除(縦割り)

そこで，5つに大別したこれまでの取り組みが，今回設定した共生概念に適応した取り組みとなっているか，まずは実際の活動を通して，児童相互が高め合い支え合う関係の有無に関して，集団形態別に見取ることにした。

第1に，学級別で取り組む行事についてである。ここでは10月後半に行う「東雲発表会」を具体として取り上げて述べる。「東雲発表会」は，東雲小の創立記念日に各学級が店を構え，創意工夫をこらし出し物を行うことで，創立を祝うお祭りである。各学級は客を呼ぶために，出し物はもちろん，広告や宣伝などにも力をいれて競い合う一方，より良い出し物にするため学級が1つになって取り組み，全学級が協力して創立記念日を祝っていた。学級ごとの「競争」・「協力」関係が組み込まれた児童の「協調性・柔軟性」を育む好例と言える。しかし，「東雲発表会」以外では，特に学級ごとで共生関係を築く取り組みはない。

第2に，学年別で取り組む行事については，11～12月に行う「リズム縄跳び大会」を具体として取り上げて述べる。「リズム縄跳び大会」とは，指定された技を加えながら，学年ごとに曲のリズムに合わせて縄跳びを行う競技である。但し，養護（特別支援）学級に関しては児童の実態を考慮し，養護学級単独で演技を行う。技を競い合うのではなく，各学年の児童全員がリズムに合わせてとぶことを学年間で競い合う。また，リズム縄跳び大会の練習を通して，上学年が下学年を指導したり，場を提供し

たりする一方、上学年の難しいテンポに合わせて下級生も一緒にリズムを合わせて跳ぶなど、全学年が協力して大会をよりよいものにしようとして取り組んでいる。

入学式や卒業式、東雲発表会、宿泊学習といった行事でも、学年別の取り組みが行われているが、いずれの式や会なども他学年や同学年を意識し自らを高めたり、協力して行事を盛り上げようとしたりする実態がある。

第3に、色別で取り組む行事では、5月末に行う運動会を具体として取り上げた。東雲小では各クラスが赤・白・青・緑の4色に分かれ、各色組で縦の集団を構成している。学年活動でもこの色別ごとに列を組んで活動し、学年の壁をなくすように配慮している。また週ごとの早朝活動や体育でも、色別ごとに活動することになっている。

運動会では、その色別ごとに優勝と応援態度賞の獲得を競い合う。運動会の月には、色組集会も設けられ、どうすればそれらの賞を獲得できるか、作戦を練ったり練習したりもする。他方、運動会が盛り上がるように、高学年を中心に協力し合って大会運営を行ったり、競技や応援合戦でも、自分の色組だけでなく他の色組の健闘をたたえ合ったりしながら、運動会を盛り上げるために協力している。

学年を解体し色組別で取り組む学校行事は、主に運動会しかない。しかし、早朝活動や体育などで学級・学年単位での色組活動が多く組まれており、ゲーム等を通して、互いに競い合い協力し合うような「協調性・柔軟性」を育む関わりが行われている。

第4に、縦割り別の取り組む行事では、2月に行う6年生を送る会を取り上げる。この会では、後半に各学年の出し物もあるが、前半では縦割りに分かれてゲームラリーを行い、各縦割り班の結束を競い合う。サブリーダーである5年生はこのゲームラリーがうまくいくよう、また6年生に色紙のプレゼントがきちんと渡せるよう、各班で協力して会の運営にあたる。

他方、学年ごとに体育館の掲示を協力して作成したり、6年生の歌を全員で歌ったりするなど、全縦割りで会を盛り上げることに協力している。

縦割りで取り組む行事には、他にもお迎え遠足があるが、ここでは互いが高め合い競い合うというよりは、各縦割りのメンバーとの仲間意識を構築することに重点が置かれている。リーダー同士が協力して取り組んでいる実態はあるものの、縦割り班相互での協力体制という意識はあまりない。

第5に、登校班別の取り組みとしては、年3回行う登校班別集会がある。登校班ごと集まり、登下校の仕方や態度を振り返る一方、よりよい登下校となるよう各班が協力して取り組んでいる。年1度全児童でバスの乗り方指導の授業が行われるが、登校班ごとが話し合い、より良い登下校ができるよう高め合う場はない。

このように、本校の既存カリキュラムにある集団活動は、大きく5つの集団形態にわけることができ、それらが年間や月ごと、週ごとなど、様々な周期で複数組み込まれている。中には、宿泊活動のように系統的な集団活動もあり、児童の共生関係の基盤となる「協調性・柔軟性」を育む上で有効な場が数多く設定されている。

しかし、当然各集団活動には、それぞれのねらう目的にそって内容が組み込まれており、全ての活動形態が児童の共生関係を直接育む場とはなっていない。これまでの利点を生かし、共生関係の基盤資質の育成に重点を置く集団活動と、共生の関係性に直接関連する資質の育成に重点を置く集団活動に区別し、それらをスパイラルに育めるようなカリキュラムに編成し直す必要があると言える。

これらについては、現在審議検討中である。来年度の始まりまでは、何らかの改善を加えてスタートできるように配慮したい。

4. 今後の取り組みとその評価・検証方法

今年度は、グローバル人材育成という観点から本校の児童に育むべき資質を検討し、児童の共生関係を築く基盤となる「協調性・柔軟性」の育成を柱として取り組むことに決めた。また、本校のカリキュラムにおける集団活動の内容について、児童の共生関係を構築する上で有効かどうか吟味し検討を行った。

来年度は、既存カリキュラムにある集団活動のねらいに着目し、グローバル人材育成に反映されるものか検討するとともに、場合によっては一部を児童の共生関係の基盤である「協調性・柔軟性」を育むねらいに改善していく。また、学級内での活動を通して、児童間の共生関係を形成できるような取り組みについて、特に授業に着目して検討していきたい。

これらの評価・検証方法については、本校の子ども同士の関わりに関する傾向でもふれた、いじめアンケートや児童の意識調査のデータを基に、カリキュラムの見直しにおける児童の変容から、その有効性について検討していきたい。

引用・参考文献

- ・魚住忠久他『グローバル社会入門－環境・経済・文化の文脈から－』黎明書房，1997。
- ・伊豫谷登士翁『グローバリゼーションとは何か－液状化する世界を読み解く－』平凡社新書，2002。
- ・2013年度広島大学附属東雲小学校教育課程
- ・山田勉「相互依存主義」大森照夫他編『新訂社会科教育指導用語辞典』教育出版，1986，pp. 1-10。
- ・鴨武彦・山本吉宣編『相互依存の理論と現実』有信堂，1988。
- ・ロバート・コヘイン，ジョセフ・ナイ『パワーと相互依存』ミネルヴァ書房，2012。
- ・岡地勝二『相互依存の経済学』晃洋書房，2006。
- ・国立教育研究政策所教育課程研究センター「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_leaflet.pdf

V. グローバル人材育成のための中学校カリキュラムの構築

広島大学附属東雲中学校

1. グローバル時代に求められる資質・能力とは

(1) Global と International

1990年代の冷戦の終焉とともに、地球を一つの球体（グローブ）と捉えるグローバルイズムの考え方は急速に広がった。同時に、冷戦後の技術開放（軍事技術の民生転換）により「パケット交換方式ネットワーク技術」が市場で応用され、インターネットをツールとした世界の人々との情報の共有や交換が急速に進み、ヒト・モノ・カネ・情報の移動はますます加速化した。地球上のあらゆる問題が、国境を越え、ボーダーレス化していくのに伴い、グローバルな問題（政治、経済や環境問題など）を〇〇人としてどのようにとらえ、対応していかなければならないのかが問われてくる訳である。ただ、ここで〇〇に入る言葉が非常に重要になってくる。「国際」なのか「日本」なのかである。どちらの言葉が入るかによって、教育の方向性が大きく変わってくる。

「グローバル」と「インターナショナル」は同義語ではない。前者が地球を一つの球体として捉えているのに対して、後者は国家を前提としている。換言すれば、将来のグローバル問題に直面したとき、グローバル益を優先するのか、それとも、国益を優先するのかである。実は、これらの議論なくして、グローバル人材の育成は始まらないと言っても過言ではない。

(2) グローバル時代に求められる資質・能力（わが国の場合）

グローバル化に関して学校教育においては、中央教育審議会答申（2005）の「新しい時代の義務教育を創造する」の中で、「我が国が、変動の激しいこれからの時代において、今後とも国際的な競争力を持つ活力ある国家として、また世界に貢献する品格ある文化国家として発展するためには、国民一人一人が、そのような国家・社会の形成者として、それぞれの分野で存分に活躍することのできる基盤を、義務教育を通じて培う必要がある」と述べている。このことは、社会情勢の変化に応じて、国際社会で活躍できる人材を育成する必要性を謳ったものであると言える。

このようなグローバル化社会に生きる人材の育成が社会的に要請されている中で、経済産業省（2010）は以下のグローバル人材に必要な資質・能力を挙げている。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）②外国語でのコミュニケーション③異文化理解・活用力 |
|--|

（産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会報告書より）

また、グローバル人材育成推進会議（2012）においては、グローバル人材の定義について以下の項目を挙げている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション力

要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

（「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）」より）

以上のような経済産業省とグローバル人材育成推進会議の定義をみると、グローバル人材に必要な資質・能力はほぼ共通しており、国をあげてこのような資質・能力を有した人材を育成していく方向性であることが確認できる。そして、要素Ⅲからも判断できるように、わが国の場合で言えば、冒頭の〇〇には「日本」という言葉が入ったものと解釈できる。このことに対する是非は問わないが、要素Ⅲの取り扱いによっては、わが国のグローバル人材育成は、表面的には「グローバル」という名の「こわばったナショナリズム」の育成に陥ってしまう危険性も孕んでいることを認識しておく必要がある。つまり、要素Ⅲはそれだけ繊細なものであり、実際に教育現場で教える教師には、高度な国際的見識が問われてくると考える。

平成 25 年 11 月 2 日に、「グローバル化する社会を生きる子どもの育成」をテーマに開催されたお茶の水女子大学附属中学校教育研究協議会に参加した。日本総合研究所理事長で多摩大学学長の寺島実郎先生の「グローバル化する社会を生きる子どもを育む」という講演も用意されていた。その講演の中で、グローバル時代のリーダーには、価値観や文化が異なる多国籍の人の中で仕事をしていく（プロジェクトを進めていく）際に、それらのメンバーをまとめながら仕事を遂行していくカープロジェクトマネジメント能力が重要になってくることを指摘していた。その能力とは、具体的には「語学力」「その業界における高い専門性」「筋が通っていてフェアである精神」という力であった。グローバル人材育成をグローバル時代のリーダー育成と捉えるならば、プロジェクトマネジメント能力という視点も看過してはならないであろう。

（3）初等中等教育におけるグローバル人材育成

新学習指導要領（平成 23 年度小学校完全実施，平成 24 年度中学校完全実施）においては、「伝統文化」に関する事項が明確に盛り込まれている。具体的には、「国語科での古典，社会科での歴史学習，音楽科での唱歌・和楽器，美術科での我が国での美術文化，保健体育科での武道の指導などを充実」が，学習指導要領改訂案等のポイントとして挙げられた。この記述はグローバル化社会を迎えるにあたり，日本人としてのアイデンティティーを確立させる指導の重要性を謳っていると考えられる。グロー

バル人材育成会議中間まとめの中にも、日本人としてのアイデンティティーがグローバル人材の要素の1つとしてあがっており、グローバル化社会を意識した内容になっていることがうかがえる。

また、コミュニケーション力の面で言えば、小学校においては外国語活動（英語活動）が小学校高学年（5・6年生）で週1時間、年間35時間が設定された。一方、中学校の教育課程においては、英語科の内容の増加はないものの授業時間数が1学年あたり140時間となり、中学校教科・領域の中では最も授業時間数が多くなった。これらのことは、グローバル化社会において英語を使用していくことが重要であること、世界で活躍できる人材を育てることが意図されていると推測される。

そして、高等学校では、文部科学省が「高校生の留学等を通じたグローバル人材育成のための取組」を行っている。その目的・意義として、①異文化理解を大幅に促進させる、②諸外国との友好親善の増進に寄与する、③外国語（英語）運用能力の強化、コミュニケーション能力の向上、があげられている。広島県においては公立高等学校において諸外国の高等学校と姉妹校提携を結ぶ取組が広がっており、「県立学校海外交流推進事業」が平成23年度から開始されて、平成25年1月現在では55校の公立高等学校が諸外国の高等学校と姉妹校提携を結んで、交流を行っている。

「英語でのコミュニケーション能力」という側面から見れば、早期に英語学習を始めたり、多くの英語使用場面を設定したりすることは大切であろうが、「日本人としてのアイデンティティー」という側面から見れば、あまりにも時期が早すぎるのではないか。そして、英語以外の教科の指導に英語を用いるイマージョン教育においては、各教科それぞれの目標を本当に達成できるのかという問題点も浮かんでくる。したがって、グローバル人材を育成することは必要ではあるが、どのような方法を用いるのか、どの時期に行うのか、どのような資質・能力を有した教師が指導するのか、など慎重に議論を重ねなければならないことが山積していると考えられる。「グローバル化＝英語」という発想だけではなく、先に述べたグローバル人材の資質・能力を正確に理解しながら、方法と時期を考慮していかなければならない。

2. 広島大学附属東雲中学校での取り組み内容

今年度、東雲中学校が取り組んだ教育活動を整理すると、上述したグローバル人材の要素Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを網羅した教育実践を行っていることが分かる。

（1）国際交流活動について

本校ではグローバル人材の育成に関して、国際交流活動に取り組んでいる。平成13年よりアメリカ合衆国ノースカロライナ州の Exploris Middle School, 平成19年よりカリフォルニア州の Odyssey School, 平成22年よりインドネシアの MENDOYO 第4中学校と国際交流を行っている。毎年、これら3校から生徒数名が本校を訪れ、授業交流や文化交流、ホームステイなどの交流活動を行っている。加えて、Exploris Middle

School が来校の際は国際ミーティング，Odyssey School が来校の際はリアル熟議，MENDOYO 第4中学校が来校の際はフラワーフェスティバルパレードを行い，特色ある国際交流を展開している。また，毎年8月には本校からも6～8名の生徒が Exploris Middle School や Odyssey School を訪問し，日米文化の共通・相違点を学んでいる。国際交流活動の来日・渡米活動に関する主な年間スケジュールを次に示す。

表1 国際交流活動（来日・渡米）に関する主な日程

日時	内容	備考
5月第1週	MENDOYO SMP4 来校（2日間交流） ・文化交流活動 ・フラワーフェスティバルパレード合同参加	通常生徒4名，教師5名が来校
5月第3週	Odyssey School 来校（3日間） ・日本の通常授業参加 ・意見交流会（相互の学校について） ・ホームステイ体験 ・リアル熟議* ¹ 開催	通常生徒8名，教師2名が来校
8月第3週	Exploris Middle School 訪問（1週間） ・アメリカの通常授業参加 ・文化紹介活動 ・ホームステイ体験	通常生徒8名，教師2名が訪問
8月第4週	Odyssey School 訪問（3日間） ・アメリカの通常授業参加 ・ホームステイ体験 ・フィールドワーク* ² 参加	通常生徒8名，教師2名が訪問
3月第3週	Exploris Middle School 来校（1週間） ・日本の通常授業参加 ・文化紹介活動 ・アメリカ人教師による授業 ・国際ミーティング* ³ 開催 ・ホームステイ体験	通常生徒8名，教師2名が来校

*¹ 「リアル熟議」とは文部科学省が推奨している「熟議」のことである。中学生，保護者，教育関係者，そしてアメリカ生徒・教師が参加して2012年度に初めて開催した。2013年度のテーマは「食」であり，グループでのディスカッションを通してそれぞれの立場から「食」について意見を交流した。

*² 「フィールドワーク」は Odyssey School が取り入れている活動の1つであり，

生徒がグループで様々なミッションを共同で達成していく内容である。2013年度は Odyssey School があるサンフランシスコの町で、協力してミッションを行った。

*³ 「国際ミーティング」は、広島市内の公立中学校も招待して、各校生徒会のメンバーがそれぞれの学校活動の取り組みを紹介する。お互いの紹介を通して、自校の良さや他校の良さを感じることができる。

ここで特筆すべきは、本校の国際交流活動は、学校間の交流やホームステイ等を通じた異文化理解に留まらず、「リアル熟議」や「国際ミーティング」のように国境を越えて、それぞれの立場や状況を踏まえながら、グローバルな問題を考えていく教育活動を取り入れていることである。ここでは、質の高い異文化理解だけでなく、国際社会における日本のスタンス、ひいては、日本人としてのアイデンティティーも必要となってくる。また、昨年度の広島大学附属学校園研究推進委員会報告書でも示した通り、これらの活動がグローバル人材の育成にどのような影響を示しているのかを調べた中学校3年生対象のアンケート調査の結果（浜岡ほか、2011）から、本校で行われている国際交流活動はグローバル人材を育成する一助になっていると判断できる。グローバル人材の資質・能力の基盤となる「チャレンジ精神」を培いながら、実際のコミュニケーション場面が多く設定されているので「コミュニケーション力」も伸びていることを生徒自身が実感していると考えられる。今後もこれらの国際交流を主軸とした「語学力・コミュニケーション力」「異文化理解や日本人としてのアイデンティティー」育成の更なる充実を図っていきたい。

（2）SMART（修学旅行）について

本年度より、東雲中学校（Shinonome）の修学旅行は、自らの使命（Mission）を自覚した上で、問題発見したことを現地で探求（Research）し、その過程において見通しをもった行動（Action）をとることが要求される旅行（Tour）—SMART—へと進化した。これは、問題を発見し、その解決に向けて見通しをもち、仲間と協力してミッションを遂行していく力の育成を図ったものである。また、この SMART は旅行の行程を予算や安全性に考慮しながら自分たちでデザインする。そこでは、必然的にプロジェクトマネジメント能力も求められることになる。

先進的な教育を展開しているシンガポールの Temasek Junior College では、英語力や学力の育成だけでなく、リーダーシップ育成のための教育プログラムを実践していた。本校においても国際交流活動の更なる充実に加え、グローバル社会のリーダー育成という視点にも重点を置く必要があると考える。従って、プロジェクトマネジメント能力の育成が期待できる SMART は、グローバル人材を育成する上で重要な位置づけとなる。今後もこの SMART を主軸とした「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・

柔軟性，責任感・使命感」育成の更なる充実を図っていきたい。

3. まとめ

来年度より試行するグローバル人材育成のための中学校カリキュラムの展望として、今年度構築した「国際交流を主軸とした要素Ⅰ・要素Ⅲの育成」と、「SMARTを主軸とした要素Ⅱの育成」を2本の柱とし、グローバル化に対応した東雲中学校の特色ある教育を展開していきたいと考えている。今年度は、カリキュラム構築に主眼を置いていたが、来年度は、試行により生徒たちにどのような能力がついたのかを検証することに主眼を置く予定である。具体的な評価・検証の方法としては、本校のめざす生徒像に必要な力で、グローバル人材にも必要であろう3つの力「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」をアンケート調査によって評価・検証する予定である。最終的には、その検証結果を基に改善を重ね、地域、日本、世界をリードする人材の育成を目指したカリキュラムを完成させていく予定である。

文献

中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」，2005.

グローバル人材育成推進会議「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）」，2012.

浜岡恵子ほか「中学校における国際交流の在り方 —Exploris Middle School・Odyssey School・MENDOYO SMP4 との交流を通して—」，広島大学学部附属共同研究紀要 第40号，pp59-64，2011.

広島県教育委員会ホームページ <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/>
文部科学省「中学校学習指導要領」，2008.

産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会「報告書～産学官でグローバル人材の育成を～」，2010.

VI. 社会のグローバル化に対応する資質・能力及び態度・価値観を育成するための幼小中一貫のカリキュラム開発

広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校

1. はじめに

1990年代に急速に進み始めた社会のグローバル化に対応し、本学校園では「どのような時代になろうとも、どのような国に住もうとも、人間として普遍的に大切な資質や能力（ユニバーサル・シティズンシップ）」の育成が不可欠であると考え、平成15年度から平成21年度まで新教科「国際コミュニケーション科」を設置し、研究に取り組んできた。

さらに、昨年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、研究開発課題「社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発」を設定し、新領域「希望（のぞみ）」を中心とした幼小中一貫のカリキュラム開発を行い、新たなキャリア教育の在り方を模索している。

この新領域「希望（のぞみ）」では、本学校園が先の「国際コミュニケーション科」の研究で明らかにしたグローバル化に求められる資質能力とその育成のための取り組みを基盤とした単元を、「学習領域『つながり』から」に位置付けることとした。具体的には、「国際」を柱とし、多文化理解や他国の方々とのコミュニケーションを通して「なりたい自分」を考えていけるような12年間の系統性のある「希望（のぞみ）」単元を開発・実践し、社会のグローバル化に対応するための資質・能力および態度・価値観を育成するものである。

なお、その他の保育・教科等においても引き続きグローバル化に求められる資質・能力を育成していくことが重要であると考え、単元（題材）や活動を開発し、様々な交流学习への取り組みを進めるものである。

2. グローバル化に求められる資質・能力及び態度・価値観

(1) 「国際コミュニケーション科」研究で整理した4つの力

本学校園では、「国際コミュニケーション科」（平成15年度～平成21年度）の研究においてグローバル化に対応してつきたい力を「①日本文化の理解・②様々な文化の理解・③読み取ることを中心としたコミュニケーション力・④伝えることを中心としたコミュニケーション力」の4つに整理した。

①日本文化の理解・②様々な文化の理解は「多文化理解」を中核に据えた学習を通してつきたい力である。直接的な交流体験やメディアを介した間接的な交流体験を通して、子どもたちが自国や他国の人や文化と出会い、かかわりあう単元を設定する。

このことにより、自分をとりまく多文化の存在に気づき、積極的にコミュニケーションを図り、より広く自分以外の存在に目を向け、やがては自分の生き方や考えを発見するようになることをめざすものである。

③読み取ることを中心としたコミュニケーション力・④伝えることを中心としたコミュニケーション力は、「実践的なコミュニケーション能力の育成」の学習を通してつきたい力である。21世紀の社会の中で生きる子どもたちは、様々な国の人々、様々な年代の人々と対話し、豊かな関係を築きあげていく力を身につけることが必要となる。具体的には、ボディーランゲージや、絵、写真、文字、英語などを、様々な相手との直接的、間接的なコミュニケーションの場で効果的に活用する力や、それを通して他者の考えを読み取る力を育てようとするものである。

(2) 新領域「希望 (のぞみ)」で育成するグローバル化に対応する力

①「希望 (のぞみ)」がめざすもの

これまでの研究で培ってきた国際的コミュニケーション能力や人間関係力、協同的創造力を基盤に、本学校園のめざす子ども像、すなわち、義務教育時点での子どもの姿を次のように設定した。

【めざす子ども像】

様々な人々とともに、積極的に、粘り強く課題解決に取り組む中で、社会において有為な人となるべく自己の向上をはかる子ども

「有為な」とは本来「能力があること。役に立つこと。また、そのさま。(大辞泉)」という意味であるが、転じて「将来に期待が持てるさま」を意味する場合もある。「自らの能力を正しく認識し、それを社会のために生かし、またそのことを期待されるような人」を目指して、自分をよりよく育てていく子ども、それは言い換えれば『自尊(自恃)』と『共生』を、向社会的にバランスさせること(=自律的社会参画)ができる子どもである。そのような子どもの育成のために、本研究において設定する新領域が「希望 (のぞみ)」である。

「めざす子ども像」の実現に向け、「希望 (のぞみ)」における目標を表1のように設定した。

表1 「希望 (のぞみ)」目標構造 (概略)

目 標	自己についての理解を図り、自己の生き方・在り方についての具体的な目標や課題を明らかにする中で、社会的自立に資する基礎的・汎用的能力を育てるとともに、社会の形成者として必要な態度及び価値観を養う。		
学習領域	「つながり」から	「自分づくり」から	「もの」から
基礎的・汎用的能力	人間関係形成・ 社会形成能力	自己理解・ 自己管理能力	課題対応能力 キャリアプランニング 能力
態度・価値観	共生	自律	参画

また、今年度より3つの学習領域（「自分づくり」から・「つながり」から・「もの」から）を設け、各領域で重点的に育成する基礎的・汎用的能力及び態度・価値観について整理した。

これらを踏まえ、子どもたちがグローバル化した社会を生きていくうえで重要なことは、知識量や限定的なスキルの獲得だけではなく、自己を正しく認識し、異質な人々とも対等かつ自律的にかかわり、ともに難題を解決できる人材となることととらえ、「希望（のぞみ）」単元を開発していくこととしている。

②「グローバル人材育成」の要素と新領域「希望（のぞみ）」及び保育・教科との関連

グローバル人材育成推進会議（2012年）において「グローバル人材育成」の概念における要素Ⅰ～Ⅲが提言されている。それに各附属・学校園における取組をその他の要素としてまとめた対応表（岩田2012による）に対し、「希望（のぞみ）」で育成する基礎的・汎用的能力、態度・価値観及びその他の保育教科等で育成する資質・能力との関連性をまとめたものが表2である。

表2 「グローバル人材育成」の要素と新領域「希望（のぞみ）」及び教科等との関連

「希望（のぞみ）」 学習領域		「つながり」から	「自分づくり」から	「もの」から	教科等	
		基礎的・汎用的能力 態度・価値観	人間関係形成・ 社会形成能力	自己理解・ 自己管理能力		課題対応能力 キャリアプランニング能力
			共生	自律		参画
Ⅰ	語学				外国語活動 英語科	
	コミュニケーション	◎				
Ⅱ	主体性・積極性		◎			
	チャレンジ精神 協調性・柔軟性 責任感・使命感			◎		
Ⅲ	異文化理解	◎			美術科	
	アイデンティティ					
その他	問題解決能力			◎	社会科	
	批判的思考 ICT活用能力			○		

「希望（のぞみ）」の学習領域「つながり」からでは、主に「国際」を柱とした単元を中心に、要素Ⅰの「コミュニケーション」、要素Ⅲの「異文化理解」に係る能力、態度・価値観を育成する。また、学習領域「自分づくり」からでは、要素Ⅱの「主体性・積極性」、学習領域「もの」からでは、地域参画等の学習により、要素Ⅱの「チャレンジ精神」、その他の「問題解決能力」「ICT活用能力」を育成するものである。

(3) 新領域「希望（のぞみ）」における活動・単元の開発

「希望（のぞみ）」においては、学習領域「つながり」からの中で、「国際コミュニケーション科」の研究を引き継ぎ、異文化への理解や実践的なコミュニケーション能力の育成をめざし、「国際」を柱とした実践を行っている。この活動や単元では、本校校園のめざす子ども像に向かっていくためグローバル人材の育成に通ずる基礎的・汎用的能力である「人間関係形成・社会形成能力」と合わせて態度・価値観「共生」の育成に重点的に取り組む。表3に12年間の具体的な活動・単元の目標・つけたい力、態度・価値観について示す。

表3 学習領域「つながり」からにおける「国際」を柱とした活動・単元

		年少	年中	年長	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
単元・活動	留学生さんとうふれあおう												
	七まつりやお月見茶会などの年中行事で交流する。												
内容	留学生さんとうふれあおう												
	七まつりやお月見茶会などの年中行事で交流する。												
目標	留学生さんとうふれあおう												
	七まつりやお月見茶会などの年中行事で交流する。												
他者に働きかける力	留学生さんとうふれあおう												
	七まつりやお月見茶会などの年中行事で交流する。												
他者を理解する力	留学生さんとうふれあおう												
	七まつりやお月見茶会などの年中行事で交流する。												
態度・価値観	留学生さんとうふれあおう												
	七まつりやお月見茶会などの年中行事で交流する。												

(4) 各教科等における活動・単元の開発

更に各教科においても、グローバル化に求められる資質や能力及び態度・価値観を育成するために、関連的に研究・実践を行っている。

例えば、小・中学校社会科部会においては、「国際的な資質を育成する社会科学習—思考の再構成を促す授業づくりを通して—」を研究テーマとし、グローバル化していく社会に対応できる子どもの育成（『グローバル人材育成』への対応表」要素Ⅲ・その他の要素に対応）を目指し研究を進めている。その中で、思考力や適切な判断力を持ち、他者・他国との価値観の違いを認め、互いの関係を平和的に形成する資質という国際的な資質を身につけさせるために、社会参画に必要な社会判断力の育成に3年生から9年生の7年間で段階を設定して取り組んでいる。

その他、各教科等で行ってきたグローバル化に対応した単元（題材）を表4に示す。

表4 小中学校で行ってきたグローバル化に対応した単元（題材）例

学年	教科等	実践内容	交流相手
4年	社会	グローバル化に対応したクールジャパン戦略（キャラクタービジネス）の将来性について学習を行った。	
6年	外国語活動（一部新領域「希望（のぞみ）」）	修学旅行地で出会った方々にインタビューをする。	海外からの旅行者
8年	社会	自分の国の紹介をする。テーマは世界遺産、衣食住などであり、言語は英語を使用する。	広島大学の留学生
7～9年	英語	手紙の交換を年に3回程度実施する。C. M. Eppes 中学校は広島大学の相互体験型海外教育実地校である。	C. M. Eppes 中学校（アメリカ合衆国）
8年	特別活動 英語	修学旅行地沖縄において、Eアドベンチャーの活用により、沖縄駐留米軍家族との半日交流を実施した。	沖縄駐留米軍家族（E-アドベンチャー）
7年	美術	世界中の Art Links（クリエイティブ・コネクション）に所属する学校が、共通のテーマで互いに絵を描き、作品を交換・鑑賞・分析し交流する。	St. Ann School Toland Middle School（アメリカ合衆国）

3. 実践事例

(1) 幼稚園

① グローバル人材の育成のための具体的目標

幼稚園では、グローバル人材の育成に向け次のような目標を設定し、活動を行っている。

- ・いろいろな人（同年齢・異年齢・高齢者・他国の人）や文化に出会うことを楽しむ。
- ・自分と他者の違いやよさに気づく。
- ・いろいろな人（同年齢・異年齢・高齢者・他国の人）に自分の思いをいろいろな方

法で伝えようとする

②活動の概要（年少児）

幼稚園では、グローバル人材の育成のための具体的目標に向かうための活動の一つとして広島大学のいろいろな国の留学生との交流を年間5回行っている。以下は、10月に行った年少児と女性の中国人留学生との交流のねらいとその時の様子及び内容である。この事例における留学生との交流は2回目で、年少児にとってこの日に来園した中国人留学生とは初めての出会いである。

<留学生との交流のねらい>

- ・自分の好きな遊びを留学生と一緒に楽しむ。
- ・留学生の母国の遊びを知り、興味をもったり、言葉の違いに気づいたりする。

<留学生との交流の様子及び内容>

最初の出会いの場面では、色水・石けん泡遊びを楽しんでいる年少児たちのところへ、留学生に自然な形で遊びの輪の中に入ってもらった。

留学生が色水・石けん泡遊びを楽しんでいる年少児たちに日本語で「おもしろそうですね」と声をかける。

“誰だろう？”という様子で留学生の顔を見る年少児たち。教師が「中国という遠い国から日本に来て、勉強をしている留学生さんだよ。みんなのところに遊びに来てくれたんだよ」と年少児たちに紹介をする。少し安心したのか、A男が「留学生さん！？」と言い始める。B男も釣られて「留学生さん！？」と言い始める。留学生が握手を求め、A男やB男も喜んで応じている。その後、留学生が色水・石けん泡で遊んでいる年少児の様子を見てるとA男が「留学生さん！おいで～」と自分の作った石けん泡を見せるために呼んでいる。



留学生と色水を作る様子

いる。A男が留学生の手を引き、石けん泡が入ったボウルがあるところに連れてくる。石けん泡を見た留学生が、「すごいですね！どうやって作るのですか？」と尋ねる。A男が「こっちにおいで」と石けん泡遊びの道具のところに案内する。道具を持ち出し、A男が作り方を教え始める。留学生がA男の言う通りに作ってみる。泡が出てくると「すごい！すごい！」と留学生が喜ぶ。A男も留学生の方を見て「泡ができたね～」喜んでいる。

この他、名前を覚えてもらったり、年少児にとって親しみのある日本の鬼ごっこを留学生とクラス全員とで一緒にしたり、中国のジャンケンを覚えてもらったりした。また、意図的に中国語で絵本「おおきなかぶ」を語ってもらった。年少児には、留学

生の母国の言葉であることを伝えていった。聞きなれない言葉だが、それでも留学生の語りに耳を傾けている年少児の様子が見られた。中国の言葉に対し「わからんね～」という率直な声があったが、「これがリーさん（留学生の名前）の生まれたところの言葉なんだよ」と伝え、「みんなが使っている日本の言葉と同じかな？」と尋ねると「違うよ」と答えていた。「世界にはもっともっといろいろな言葉があるんだよ」と伝えていくと「ふ～ん」と頷いていた。



留学生の母国のジャンケンを楽しむ様子



留学生の母国語での絵本の読み語りを聞く様子

③成果と課題

エピソードに登場したA男のように、年少児が留学生に自分の好きな遊び（色水・石けん泡遊び）のやり方を教えながら一緒に楽しむ姿が見られた。留学生が自然な形で、年少児たちの遊びの輪の中に入っていけるようにしたこと、年少児が留学生に対し親しみが湧くような紹介をしたことが有効であったと考えている。

更に年少児は同じジャンケンでも国によって掛け声が違うことや、自分たちが普段使っている言葉とは違う言葉があるということに気づいた。この中で、普段聞きなれない言葉に対して年少児から「わからんね～」という声が上がっている。大切なのはその後である。教師はその後、「みんなが使っている日本の言葉と同じかな？」と尋ねたり、留学生の母国の言葉であることを伝えたりしている。年少児でも自分たちが、普段使っている言葉とまた違った言葉があることに気づけるような援助を教師が考えてしていくことが必要であると考えている。

留学生との交流のように、年少児の時からいろいろな人、言葉、文化などにかかわったりふれたりする経験の積み重ねが要素Ⅰ、Ⅲ（表2）にあるコミュニケーションや異文化理解の育成につながると考える。更には自分たちと異なる言葉や文化をもつ人に対し、積極的にかかわっていくという点で要素Ⅱ（表2）にある主体性・積極性、チャレンジ精神の育成にも通ずると考えている。

しかし、全ての年少児がA男のように積極的に留学生にかかわっていたわけではない。中には、初めて出会う人へのとまどいや緊張がある年少児の姿も見られた。教師や身近な友だちへのかかわりを持ち始めた年少児だからこそ、留学生との交流は同じ

方に来園していただき、親しみをもてるようにすることも必要であろう。

(2) 小学校

①単元名：「外国人の方へインタビューIN 修学旅行」(外国語活動)

「京都の旅をプロデュースしよう」(新領域「希望 [のぞみ]」)

②単元の概要

本単元は、平成15年度から21年度まで「国際的コミュニケーション能力」の育成をめざして本学校園で取り組まれてきた研究の中で開発された単元の一つである。外国人観光客へのインタビュー活動を行うことを通して、外国の人と意欲的にコミュニケーションを図ろうとしたり、自国や他国の文化への理解を深めたりたりすることができるようにすることを目的としている。

平成22年度以降は外国語活動と総合的な学習の時間を、さらに本年度は外国語活動と新たな研究開発である新領域「希望 (のぞみ)」とを横断する単元として、コミュニケーション能力の素地を養うことに加え、「他者の尊重」という価値観の育成に取り組むものである。

③実践の概要

「他者の尊重」の視点から“Excuse me.” “May I ~?” “Thank you.” “Have a nice day(trip).”等、相手への配慮や感謝を表す表現を重視した。また、英語以外の各国の挨拶も調べ、できるだけ相手の国の言葉で挨拶できるようにした。さらに、アイコンタクトやジェスチャー等のパラ・ランゲージを活用するなど、「(英語が) 通じる」こと以上に「(互いに) 分かる」ことを大切にした。

実施したもの

- Excuse me. I study English.
May I ask you some question?
- I`m from Hiroshima/Where are you from?
- My name is _____. What`s your name?
- Nice to meet you.
- What do you like about Japan?
Please choose one.
- I see. / Wow!
- Thank you for your time.
- This is a present for you.
- Have a nice day! Bye.



日本らしいものを写真でしめし、一つ選んでもらう。インタビューに答えてくれたお礼に、折り紙をプレゼントする。

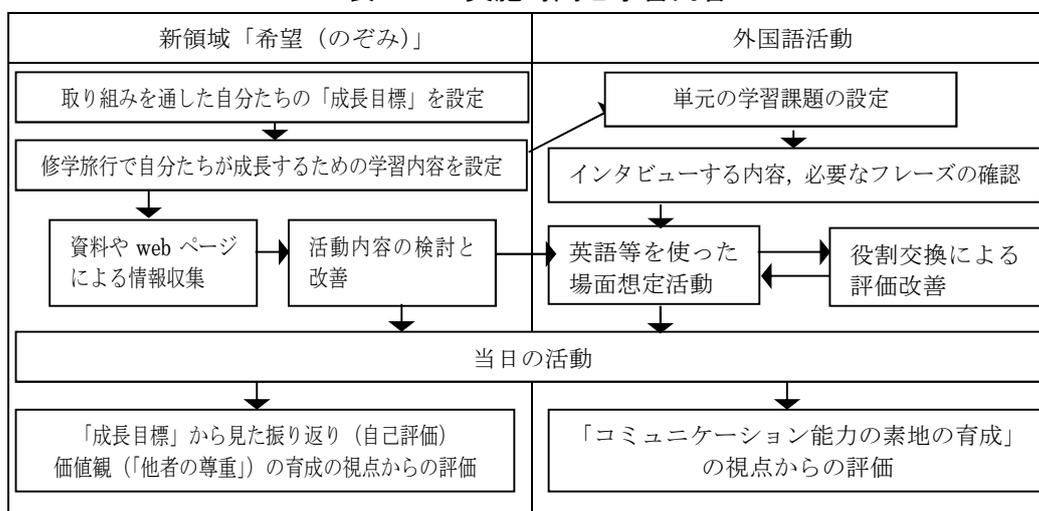
子どもたちの感想

- ・初めは緊張したが、友達と勇気を出して声をかけることができた。
- ・練習した英語を使うことができてよかった。
- ・名刺をもらったり、写真を撮ったりできてうれしかった。
- ・プレゼントを喜んでもらえてよかった。



外国の方へインタビューをする様子

表 5 実施時間と学習内容



④成果と課題

児童は学習に積極的に取り組み、当日も果敢に外国人観光客にアプローチしていた。また、逆に自分たちを気づかい、様々な工夫をしてコミュニケーションを成立させようとする外国人観光客の姿勢に感銘を受けた児童も多く見られた。しかし、児童が駆使できる単語やフレーズが自分たちの「尋ねたいこと（伝えたいこと）」にとどまり、「会話を継続する」には十分でなかったこと、「修学旅行」という大きな取り組みの中で、ねらいの焦点化が弱まるケースが見られたこと等は、今後検討を要するものと考えられる。

（3） 中学校

①題材名「動きのある人物」（海外の中学生と作品を交流しよう）美術科 7年（中1）

②題材の概要

作品交流に際し、クリエイティブ・コネクションズのアートリンクのシステムを活用した。アートリンクは、世界 56 か国に所在する生徒に、美術という媒体を通じてお

互いの文化や生活様式等を紹介し合い、異文化の発見を促す活動であり、このプロジェクトのゴールは ①生徒が外国に住む同世代の子どもたちの生活への認識を高め、理解し評価できるようになること。②生徒が新しい視点で自分自身が持つ文化を見直せるようになること。③考えを伝える手段として、生徒が美術の持つ力を発見することと定めている。交流の手順は次の①～⑫となっている。「①クリエイティブ・コネクションズにメールで参加手続きをする。②アートリンク教師用ハンドブックが届く。③クリエイティブ・コネクションズからパートナークラスが紹介される。④テーマに沿って作品を制作する。⑤作品解説シートに作品や自分の紹介文を書き、顔写真を添付する。⑥クリエイティブ・コネクションズに作品と作品解説シートを送る。⑦パートナークラスの作品と作品解説シートが届く。⑧作品感想フォームに沿って、作品鑑賞をする（文化の探偵になって作品を分析）。⑨意見や感想を作品感想フォームにまとめて、クリエイティブ・コネクションズにメールで送る。⑩パートナークラスの感想と質問がメールが届く。⑪パートナークラスの感想と質問を生徒に紹介する。⑫感想のお礼と質問への回答をメールで返す。」

2012～2013年度の交流作品のテーマは「私の文化に光をあてる：明かりをともしよう！」で、自分にとって特別な意味を持つ文化の一面を描き、文化の価値を表現するように示されていた。

この作品交流については、年度途中に計画したため、あらかじめ設定していた題材「動きのある人物」（13時間扱い）にアートリンクの趣旨を反映させ、「自分たちの一瞬の動きをとらえて、材料や表し方を工夫して描くことにより、基礎的な技能を身に付けると共に、海外の中学生とお互いの作品を交流することを通して、生活文化の異なる美術を楽しみ心豊かな生活を創造していこうとする。」をねらいとした。そして、生徒が部活動や行事に一生懸命取り組む姿を日本の中学生の文化の一面ととらえ、目標を持って一生懸命頑張っている表情や姿、応援している仲間などの中に込めた思いを「光」として説明するようにした。

完成作品に指定された作品解説シート（①作品で表した場面の説明・登場人物紹介②何の光が描かれているか③作品に描いた価値はなにか。なぜ大切なのか。④家族紹介⑤余暇の過ごし方⑥好きなもの、嫌いなもの⑦将来何になりたいか。）を添付し、クリエイティブ・コネクションズに送付した。

その後、パートナークラスから作品を受け取り、生徒一人が一枚を担当し、ワークシートの質問に記入した後、グループで作品を提示しあい、感想を交流する形で鑑賞をした。鑑賞の視点は表6のとおりである。意見は指定の感想フォーム（表7）に取



アートリンクのポスター

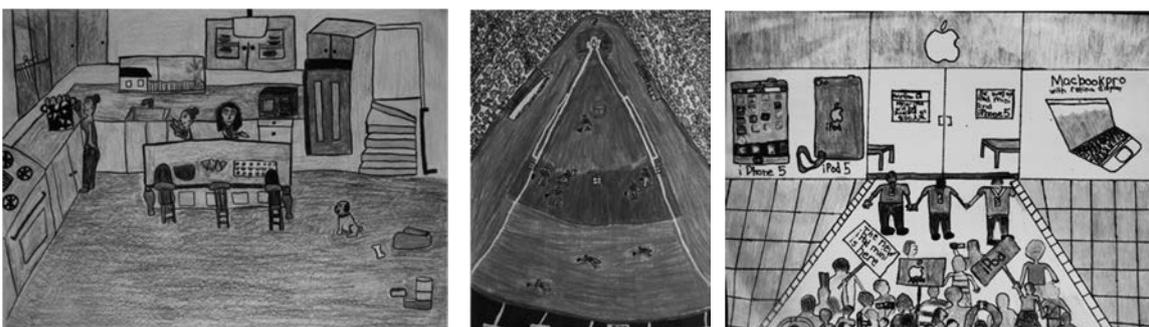


生徒の制作の様子

りまとめて、クリエイティブ・コネクションズ事務局を通してパートナークラスへ送付した。しばらくするとパートナー校からの感想・質問（表8）がメールで送付され、生徒に紹介し回答した（表9）。

 <p>①吹奏楽部練習風景 ②目の前の窓からいつも朝日が飛び込んできます。それに照らされながら朝練を頑張っています。 ③吹奏楽部に入部した時、ほかにも希望者がいた中で、私がクラリネットをふかせてもらっていることへの感謝 <以下省略></p>	 <p>①剣道 面打ちをしているところ ②もっと強くなりたいと思う気持ちの光 ③もっといい打ちができるようになって強くなりたい。試合で負けたら悔しい。ステップアップへの土台づくり <以下省略></p>
---	--

本校の生徒作品と作品解説シートの記述内容



パートナークラスの生徒作品

表6 鑑賞の視点（ワークシートの質問内容）

<p>文化の探偵になって作品を分析してみよう</p>		
<p><u>絵を見て考えましょう。</u></p>		
<ol style="list-style-type: none"> 1 描かれている場面は？（登場人物・場所・想像できるストーリーから考えましょう。） 2 一番興味をもったところや面白いとおもったことは？（全体から細部を見て答えましょう。） 3 工夫されているところは？（色彩・画材・描き方などの技法を見て答えましょう。） 4 文化的な価値観について感じることは？（共通しているところ・独特だと思う文化・風習を見つけましょう。） 5 どんな光が描かれていますか？ 6 絵を見て思い起こされる自分自身の生活は？ 		
<p><u>作品解説シートを見て考えましょう。（英単語を辞書で調べながら）</u></p>		
<ol style="list-style-type: none"> 7 情報の中で、一番興味をもったことは？ 8 作者に聞いてみたいことは？（作品について・解説シートの内容） 		
<p><u>鑑賞を振り返って答えましょう。</u></p>		
<ol style="list-style-type: none"> 9 鑑賞を通して、新しくわかったこと・新鮮だったことは？ 10 鑑賞を通して、自分についたと思う力は？ 	<p>グループで意見交流</p>	

表7 パートナークラスに送る作品感想フォーム

		プログラム認識番号	1213036
差出人の学校名		広島大学附属三原中学校	差出人の国名 日本
受取人の学校名		セントアン スクール	受取人の国名 アメリカ
No.	質問	答え	
1	あなたの文化で特に興味深いと思ったところ	クリスマスの過ごし方が日本とは少し違っているところ。・星や月の形に特徴があるところ。・家の形が独特なところ。	
2	あなたの文化的な価値観で、私たちと共通していると思ったところ	犬の散歩・マックがある・野球が好き・ストレッチやトレーニングをすること・家の中の家族の様子・兄が意地悪することがあるということ・新製品に並ぶこと・遠近法を使って描いていること	
3	文化的な価値観の中で、あなたの文化特有のものだと思ったところ	星や月の描き方・毎週教会へ行くこと・家族でキャンプへ毎年行き、マシュマロを焼いて食べること・広大な自然が身近にある。	
4	私たちが一番興味深いと思った、あなたの文化的な細部	野球が自分にとって大切だということ・キャンプをして家族を知る機会を持っていること・身近に兵士がいて、感謝や尊敬をしていること・灯台の意義を強く感じていること・エジソンの功績を称えていること	
5	それらの細部について、私たちが尋ねたいと思った質問	灯台の中に入ったことはありますか。・なぜ、エジソンを尊敬しているのですか。彼から何を学んだのですか。・なぜ、背景をオレンジ色にしたのですか。・兵士とふれあったり、話を聞く機会はありますか。	
6	解説シートに書かれていた個人的な情報の中で、私たちが一番興味深いと思ったところ	人をからかうことがきらいだということに共感した。・「はずかしい瞬間が嫌い」という考え方が新鮮だ。・みんな将来の夢がしっかりしていて、特に社会に貢献するような仕事を考えていることがすごいと思った。	
7	それらの個人的な情報について、私たちが尋ねたいと思った質問	テストがきらいなあなたは、どのように努力していますか。・宿題は毎日どれくらいありますか。楽しい宿題はありませんか。・子どもが何歳くらいまで家族でキャンプに行くのですか。	
8	絵の中に描かれた光が、特にすばらしいと思った作品の作者	人々から敬愛を受けている国旗の放つ光・芝生の緑色が美しい光を放っている。・人々の命を守る灯台の光・兵士に対する感謝や尊敬の思い	
9	作品に使われていた美術的な技術の中で、私たちが特にすばらしいと思ったところ(色彩、画材、パターン等)	色鉛筆でいろいろな色が使われている。・鉛筆のタッチを統一している。・輪郭線を強調し、いろんな線を組み合わせている。・絵の具の粉末を散らしている。・修正ペン(白のライン)?を使っている。・2・3種類の材料を使い分けることで、はっきりとした絵になっている。	
10	あなたの作品を見たり、解説シートを読んだりした後で、その前とはあなたの文化に対する考えが変わったところ	絵をじっくり見ていると、その国の文化やその人が大切に考えていることが伝わってくる。縦長の紙に球場を描いた作品を見て、自分のイメージでいろんな表現が可能だということがわかった。・疑問に思ったことを放置せず、英文の解説を辞書で調べて訳したら、よりよく文化を理解できて楽しかった。本場のクリスマスの様子がわかった。アメリカには、日本よりも大自然に囲まれた場所があり、家族でそこに行ってゆったりとした時間を過ごしなが、お互いを理解しあっているということがわかった。	

表8 Toland Middle School (アメリカ合衆国) からの感想・質問内容

<p>The aspects of your culture we found particularly interesting = You like the same activities that we do, such as soccer, baseball and music. Your interest in Mount Fuji and landscapes seem important to your culture. The way that your art is very similar to each other is very different from our style.</p> <p>The cultural values we think we both share: = We both value sports, music and being outside. Your families seem very important to you and we feel the same way.</p> <p>The cultural values we think are unique to you: = You play a game called Kapla and we do not. We may play something similar called Jenga. Mount Fuji seems to have some sort of significance for you and we do not have any physical feature that is very important to us.</p> <p>The specific details in your class' artwork we found fascinating: = We enjoyed seeing Mario and Pikuman in one of the art pieces. Video games are a big part of kids lives here in the United States. It was nice to see that sports and outdoor activities are important to you.</p> <p>Your personal information (written on the artist's description sheets) that we found particularly interesting: = We thought that "May 8th- Children's Day" is neat and American kids would love to have a special day to celebrate being a kid. We really enjoyed learning your names, they are very unique and interesting. Other personal details that we seemed to have in common were that we all want to have a professional job when were are older and have a family.</p> <p>The art techniques you used that we think are special (color, media, patterns, etc.): = The color choices were beautiful and it seems that all of the kids in your class have a talent for drawing and painting. The way that one student drew hands playing the clarinet were wonderful and demonstrated a lot of skill. We really enjoyed the Anime style too!</p> <p>The ways your art collection changed our preconceptions of your culture: = Before we looked at your art, we thought that Japanese kids would be very different from ourselves. Through your art, we realized that we have a lot more in common and are very similar.</p> <p>One difference and eye-opening detail for us was that way that you included light into your art pieces. You seemed to have a more philosophical interpretation and we were more literal. We included elements of light using stars, the sun, the moon and actual lightbulbs, whereas you included light coming from a surreal element.</p> <p>Our questions and comments for you: = How long do you go to school for? What is your daily life like? What do you do for fun? What is your favorite video game? What is the most misunderstood part of your culture?</p> <p>Thank you for exchanging art with us!</p>

表9 本校からの回答内容（一部抜粋）

<p>I am glad that you gave me the impression a lot.I will answer your questions. How long do you go to school for? →Students take classes from 8:25 to15:50. What is your daily life like? →Each class is 50 minutes. Students will take 4 classes in the morning, 2 classes in the afternoon.After schoolstudents join the club activities until 17:20. What do you do for fun? →Students like to talk with friends and do club activities and play video games. What is your favorite video game? → Pazzdra(puzzle and dragons), Monster Hunter, Doubutu-no-mori Pokemon ets. What is the most misunderstood part of your culture? →Many people foreign countries think that there are ninja and samurai now.But It's not true.They don't exist now.Our hairstyle is normal just like yours.</p>
--

③成果と課題（○成果・●課題）

- 作品解説シートの作成により，生徒は，自分の描いたテーマ（文化）のもつ価値を再認識しようとしたり，作品の中に描かれた「光」をキーワードに，パートナー校の生徒へ伝えたい独自の文化について語ろうとしたりすることができた。
- ワークシートを活用した鑑賞により，生徒は，共通点やパートナー校の生徒がもっている独自の文化を見つけることができた。
- 鑑賞の活動を通して，絵のよさだけでなく，その国の文化が理解でき楽しいと感じる生徒がいた。
- 絵を見て疑問に思ったことを放置せず，解説シートの英文を和訳することにより，相手の文化を理解することができたことに喜びを感じた生徒がいた。
- 作品解説シートの読解に時間を費やした面があり，和訳の方法を工夫する必要がある。
- 交流鑑賞を通して生徒がとらえたことを今後の表現や鑑賞に生かせるよう関連付けた指導を工夫する。

4. 評価・検証の展望

(1) 「希望（のぞみ）」における評価・検証

幼稚園においては，教師によるエピソードの蓄積と保護者による質問紙調査で評価・検証する。

小中学校においては，5月と11月に児童生徒質問紙を用いて意識の変化を検証する。また，各単元における事前事後アンケートや，教師による観察，児童生徒の感想等により，ねらいの達成状況を明らかにする。

(2) 教科等における評価・検証

教科等において，開発した単元（題材）の指導案の作成・蓄積ができたか。内容は，「①日本文化の理解・②様々な文化の理解・③読み取ることを中心としたコ

コミュニケーション力・④伝えることを中心としたコミュニケーション力」についてグローバル化に対応する力の育成につながったかを評価・検証する。

また中学校英語科については、評価の観点「外国語表現の能力」及び「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の3段階評価の状況、ALTとの面接におけるパフォーマンス評価結果を検証する。

5. おわりに

本学校園の新領域「希望（のぞみ）」への取り組みは2年目を終えようとしている。私たちは、益々少子高齢化・グローバル化していくであろう10年後、30年後、50年後を生きる子どもたちに「今育むべき資質・能力及び態度・価値観とは何か」を再考、焦点化し、次年度の取り組みを推進していこうとしている。また、小中学校においては教科等との関連を明らかにし、横断的な学習を視野に入れた研究開発の必要性についても検討中である。本構想においては、「グローバルリーダーとなりうる人材の育成」を重点課題と位置づけ、継続してグローバル化に対応した能力・態度・価値観を育むための幼小中一貫のカリキュラムを開発・実践していくことが重要と考えている。

幼稚園では、留学生との交流を継続して行うが、課題を改善し、幼児期の子どもたちの特性を生かした取り組みにしていきたい。幼児期の子どもたちは自ら遊び込んでいく中で様々なことを吸収し、学んでいくため、子どもたちが主体的に活動している中に留学生に入ってもらい、子どもたちと留学生が共に遊んでいく中で、いろいろな国の習慣や文化などにふれることができるような視点を盛り込み、それらを遊びに生かすことができるようにする。また、各回の交流においては、同じ留学生に来ていただき、初めてふれあう外国の方に子どもたちが慣れ親しんでいけるようにする。

小学校では、「希望（のぞみ）」の学習領域「つながり」単元（1・2・5・6年生の「留学生さんとの交流」や「外国の方へのインタビュー」）などにおいて、より一層系統性をもたせることや、各教科におけるグローバルの視点を取り入れた単元開発を行うことで、横断的なカリキュラム開発に努めていく。

中学校では、海外からの視察団の学校訪問を活用したり、生徒が日常的に英語に触れる場を増やしたり、各教科で我が国の伝統・文化に関する学習をする際、伝える相手を設定して、学習の成果を短い英文で説明できるようにするなどの単元（題材）開発を進めていく。

これら学習活動を通して、新領域「希望（のぞみ）」や教科・領域・行事等との関連を図り、子どもたちが学びをつなげながら英語によるコミュニケーション活動を行うことで、グローバル化に対応する力を培えるようにする。また、外部講師の招聘を積極的に推進することで、グローバル化に対応するための環境の整備にも取り組むこととする。

文献

- 1) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成 19 年度研究開発実施報告書第 5 年次』2008
- 2) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成 20 年度研究開発への取り組みに関する部会実践事例集第 6 年次』2009
- 3) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成 20 年度研究開発実施報告書第 6 年次』2009
- 4) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成 25 年度第 16 回幼小中一貫教育研究会紀要』2013

Ⅶ. グローバル人材に求められる能力や態度を育むカリキュラムの開発 ～持続可能な社会の構築に向けての基盤となるクリティカルシンキング育成を中心課題として～

広島大学附属福山中・高等学校

1. グローバル化に求められる資質・能力とその育成

(1) グローバル化に求められる資質・能力とは

グローバル化に求められる資質・能力については、本報告書の冒頭の「グローバル人材に求められる資質・能力とその要素」の中でまとめられているが、広島大学附属福山中・高等学校（以下、当校）での実践との関連を明確にするため、当校が目指している「グローバル化に求められる能力や態度」についてまとめてみたい。

日本の経済的な地位の低下が懸念される状況の中で、グローバル人材育成の要請は産業界から「大学教育」をターゲットとしておこなわれた。経済産業省による「産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会」（2010）は、大学・産業界・政府に対する提言をとりまとめたものである。p.2 の図1に示された、①「社会人基礎力」、②外国語でのコミュニケーション能力、③「異文化理解・活用力」に加え、グローバル人材育成委員会による報告書では「基礎学力」（読み書き、算数、基本ITスキル等）や「専門知識」、「人間性、基本的な生活習慣」（思いやり、公共心、倫理観、基本的なマナー、等）などが重要であることが付記されている。

p.2 に示された「グローバル人材育成推進会議」による、育成していくべき「グローバル人材」の概念の3つの要素についても、「このほか、「グローバル人材」に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質としては、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等を挙げることができる」と付記している。

これらに付記された内容も含めて、「グローバル化に求められる能力や態度」であると、当校では考えている。また、中等教育段階において、最も重視すべきものは何かという考察もおこなっている。

例えば、p.2 の要素Ⅰの「語学力・コミュニケーション力」については、スキルを向上させるという目標や方法論が立てやすく、他の要素に比べると比較的短期間で習得が見込めるものではないかと感じている。

当校がこれまで様々な形でお世話になってきた広島大学の先生方にかがうと、「科学者としての英語力・コミュニケーション能力は実践の中で身につけるものである。」と主張する方が多いと感じている。世界を舞台とする科学者は、自らの経験として学生時代の留学や共同研究の現場で英語力やコミュニケーション能力を磨いてきている現実があると聞く。科学者を目指す学生について言えば、多くの場合、英語力が低いことよりも、使い慣れていないことに課題がある。そして、実際に留学などで英語を使い、それに慣れ、使いこなしていく実践的な経験によって、世界の学会で議論ができるだけの実践的英語力やコミュニケーション能力を身に付けている。

また、当校の英語教育はかつて英検成績優秀者・優秀団体表彰式において「文部科学大臣奨励賞（団体部門）」を受賞した経歴もある、トップクラスの実績を誇っている。

このようなことを鑑みると、当校で今以上に語学力に焦点を当てるよりも、中等教育段階に欠くことのできない、全人教育としての能力や態度の育成が課題となると考える。特に、発達段階を考慮し、この段階で身に付けさせることが重要であり、この段階でなければ身に付けさせることが難しいような能力や態度があれば、そうした内容を焦点化することが重要であると考えられる。

では、中等教育段階におけるグローバル人材育成ではどのような能力や態度が求められるのだろうか。

文部科学省は、平成 26 年度から指定が始まる「スーパーグローバルハイスクール (SGH)」について、その目的を「急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する」と記している。具体的な授業レベルの取り組みとしては、「グループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーション、プロジェクト型学習等の実施 (英語によるものも含む)」があげられており、単に英語に力を入れるのではなく、p.3 の表 1 の要素Ⅱ、要素Ⅲ、その他の要素、そして上述のそれぞれの報告書で付記された内容が重視されていることがうかがえる。この考え方は、中等教育段階でのグローバル人材育成の方向性を示すものだと考えられる。

(2) クリティカルシンキングを育む

では、当校では「グローバル化に求められる能力や態度」をどのように焦点化していくべきなのであろうか。

当校では、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、持続可能な社会の構築に向けての基盤となるクリティカルシンキングを育成するため、新教科「現代への視座」を柱にした中学校・高等学校の系統的な教育課程を開発している。

「持続可能な開発」とは、国連の「環境と開発に関する世界委員会」が 1987 年に発表した報告書『地球の未来を守るために』で示した理念であるが、将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような発展を指し、環境の保全、経済の開発、社会の発展を調和の下に進めていくことを目指していくものである。2004 年の国連総会において、持続可能な開発のためには、教育が極めて重要な役割を担うとの認識のもと、日本からの提案により 2005 年より始まる 10 年間で「国連持続可能な発展のための教育 (ESD) の 10 年」(ESD : Education for Sustainable Development) とすることが全会一致で決議され、日本は世界の ESD を主導する立場にある。

ESD の理念は、グローバル人材育成の上で欠くことのできないものである。当校では、「ESD で求められる能力や態度」を教育課程の中に焦点化している。また、様々な教材や指導方法の開発を進め、「表現力」や「論理的思考力」、「創造力 (創意・工夫)」にも焦点を当てたカリキュラムを構築している。そして、これらの能力や態度を育成することは、中等教育段階においての「グローバル化に求められる能力や態度」を育むことにつながると考えている。

(3) 当校の教育課程で扱う「テーマ」、「構成概念」、「ねらいとする能力・態度」

当校の教育課程は、研究開発学校による新教科「現代への視座」を柱に、「総合的な学習の時間」では問題解決に向けた生徒の活動を重視する展開を行うとともに、既存教科では「発展的単元」を設定してねらいとする能力・態度の伸張を図るカリキュラムを構成している。新教科「現代への視座」とその中の 9 つの科目の目標は、昨年度の報告書に掲載したので省略し、ここでは、「現代への視座」と「総合的な学習の時間」で扱う「テーマ」、「構成概念」、「ねらいとする能力・態度」について整理し、科目間、

教科間の連携，内容のつながりを確認する。

A テーマについて

持続可能な社会の構築に関連したテーマについては，たとえば「エネルギー教育」，「環境教育」，「国際理解教育」など，現在の社会で課題となるテーマを扱う「〇〇教育」という表現をされる場合がある。当校では，多くのテーマが考えられる中，教科間の連携を意識して，以下の5つをテーマとして設定した。

- A 資源・エネルギー B 環境・防災 C 安全・健康
D 地域・文化 E 国際化・グローバル化

また，これらのテーマに関連してはいるが，さらに大きな範疇で取り扱う場合などは，F その他 として分類し，整理した。

B 構成概念について

「持続可能な社会づくりに関わる課題」を見いだすためには，その構成要素を明確にすることが重要となる。当校では研究初年度である昨年度，この構成要素については，国立教育政策研究所の先行研究で示された構成概念（例）をもとに，各教科・科目で扱う主要概念を表1に整理した。

◆人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念

- I 多様性・・・自然・文化・社会・経済は，起源・性質・状態などが異なる多種多様な事物から成り立ち，それらの中では多種多様な現象が起きていること
II 相互性・・・自然・文化・社会・経済は，互いに働き掛け合い，それらの中では物質やエネルギーが移動・循環したり，情報が伝達・流通していること
III 有限性・・・自然・文化・社会・経済は，有限の環境要因や資源（物質やエネルギー）に支えられながら，不可逆に変化していること

◆人（集団・地域・社会・国など）の意思・行動に関する概念

- IV 公平性・・・持続可能な社会は，基本的な権利の保障や自然等からの恩恵の享受などが，地域や世代を渡って公平・公正・平等であることを基盤にしていること
V 連携性・・・持続可能な社会は，多様な主体が状況や相互関係などに応じて順応・調和し，互いに連携・協力することにより構築されること
VI 責任性・・・持続可能な社会は，多様な主体が将来像に対する責任あるビジョンをもち，それに向かって変容・改革することにより構築されること

C ねらいとする能力・態度について

「持続可能な社会の構築」へ向けてのカリキュラムを構成する際，これまでのクリティカルシンキング育成プログラムでめざしていた「クリティカルシンキング（態度，知識，能力）」に加えて，「未来志向で問題解決に取り組む力」や，集団で議論し調整する力（「コミュニケーション力」，「協力する態度」，「進んで参加する態度」）なども主要なねらいとなる。そこで，昨年度より，このねらいとする能力・態度についても，国立教育政策研究所の先行研究で示された能力・態度（例）を参考に整理した。

- ① 批判的に考える力，クリティカルシンキング（批判的）
② 過去や現在に基づき，未来像を想定して，それを他者と共有しながら，計画す

る力（未来）

- ③ 事象のつながりなどのシステムを理解して多面的、総合的に考える力（多面的・総合的）
- ④ 自分の考えなどを論理性や科学性に配慮して的確に表現するとともに、他者を尊重して積極的にコミュニケーションを行う力（コミュニケーション）
- ⑤ 他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、協力・協同して物事を進めようとする態度（協力）
- ⑥ 人、もの、こと、社会、自然などと自分とのつながり・かかわりに関心を持ち、それらを尊重し、大切にしようとする態度（つながり）
- ⑦ 自分の役割を理解するとともに、ものごとに主体的に参加しようとする態度（参加）

新教科「現代への視座」および「総合的な学習の時間」において扱う「テーマ」、「構成概念」、「ねらいとする能力・態度」を次の表1に示す。

表1 当校の教育課程における「テーマ」、「構成概念」、「ねらいとする能力・態度」

テーマ						構成概念						ねらいとする能力・態度							
A	B	C	D	E	F	I	II	III	IV	V	VI	新教科 「現代への視座」 総合的な学習							
資源・エネルギー	環境・防災	安全・健康	地域・文化	国際化・グローバル化	その他	多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
			◇	◇	※7	◎		○	◎	◎	○	5年(高2)							
			◇	◇		◎	◎	○	○			現代評論 B	◎	◎	◎	◎	◎		◎
◇	◇	◇	◇	◇		◎	◎	◎			○	現代評論 A	◎		◎	◎		○	
◇	◇				※6	◎	◎				○	数理情報	◎	◎	◎		○		
			◇	◇	※5	◎	◎					4年(高1)							
			◇	◇		◎						現代評論 A	◎		◎	◎			
			◇	◇	※4	◎						クリティカルシンキング	◎		◎	◎			
◇	◇		◇	◇	※3	○	○	◎	◎	○	◎	社会科学入門	◎	◎	◎		○	○	○
◇	◇					◎	◎	◎			○	自然科学入門	◎	○	◎			◎	
◇	◇		◇			○	◎	○			○	3年(中3)							
			◇		※2	◎					◎	地球科学と資源・エネルギー	◎	◎	◎		○	◎	
						◎				◎	○	総合的な学習	◎		◎	◎			
◇	◇	◇				◎	◎	◎		◎	◎	2年(中2)							
					※1	○	○	○	○	○	○	環境	◎	○	◎	◎		○	○
						○	○	○	○	○	○	1年(中1)							
					◇	○	○	○	○	○	○	総合的な学習	◎	○	◎	◎			

⑥その他
 ※1 研究主題による ※2 科学 ※3 倫理
 ※4 論証の方法・論理 ※5 抽象語・抽象概念
 ※6 問題解決の手順と手法 ※7 時事問題

※構成概念・ねらいとする能力・態度について
 主となるもの=◎
 取り組むもの=○

上述のように、当校で編成した教育課程は、新教科・科目の目標を明示し、また、持続可能な社会の構築のために必要となるテーマや構成概念、ねらいとする能力・態度を過不足なく配置し、新教科・既存教科のそれぞれの科目間、教科間の連携をはかり、内容のつながりを意識した全体構成を取ることができていると考えている。

この表1の表し方は、グローバル人材育成会議による要素等とは直接リンクしないものもあるが、当校での実践内容を当てはめると、p.3の表1の当校の欄に示した内容となる。

(4) 編成した教育課程の内容

以上述べてきたような当校で焦点化したねらいとなる複眼的でグローバルな視点を持った問題解決力と読解力を育成するために、中学校、高等学校を通して学ぶ新教科「現代への視座」を創設した。このねらいの達成のため、年間指導計画に基づいた独自のテキストを作成し、教科・科目とした展開を行っている。この新教科では、各科目の担当を複数の既存教科とし、教材の内容の開発、吟味を協同して行い、必要があれば、TTで展開する場面も取り入れている。

このような教科間連携を行う取り組みは、これまで「総合的な学習の時間」で行われてきており成果を上げている。今回、「現代への視座」を「総合的な学習の時間」ではなく、新教科として設定したのは、「総合的な学習の時間」が、問題解決に向けた生徒の活動を重視しているのに対して、「現代への視座」では、それぞれの領域の基礎的知識の習得とその活用をも重視しているためである。教科として位置づけることで、領域横断的で系統性のある内容および生徒の発達の段階に合わせた能力・態度の育成につながると考える。

一方、教科横断型の新教科の設置に伴い、学習指導要領で決められた既存教科の内容との関連も課題となる。学習指導要領で決められた内容やねらいを漏らすことないように新教科で扱う内容を吟味し、当校の研究開発で育みたい能力・態度の育成にあわせた展開に心がけて教育課程の開発を行っている。また、既存教科や総合的な学習でも、「現代への視座」を柱にして内容の連携を行い、発展的单元などの工夫をすることで、ねらいとする能力・態度の伸張を図っている。

当校の教育課程の詳細な内容については、当校の平成25年度研究開発学校報告書または平成25年研究紀要を参照いただきたい。

(5) 平成25年度の研究の特徴

国立教育政策研究所による先行研究では、ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項として、「教材のつながり」、「人のつながり」、「能力・態度のつながり」の3つの「つながり」が挙げられている。今年度の研究開発は、この3つのつながりをどのように具体化していくかを中心課題とした。「持続可能な社会の構築をめざした」当校研究開発では、国立教育政策研究所の案を踏まえつつ、研究開発委員会を中心にカリキュラム開発および授業展開として重要となる具体的事項について検討を重ね、運営指導委員会の助言をいただく中で、「つながり」を以下のように整理した。

- ・教材のつながり・・・教材が他の教科や他の学年で扱われる教材とつながっており、実生活・実社会とのつながりがあることに気づき、それらを相互に関連づけて考える。教材や教科の内容的なつながり、学校や地域の具体的事例から、社会や国際化への拡張する展開などによる空間的つながり、過去に学び、現在を分析し、未来を想像（創造）していく展開などによる時間的つながりを考慮した教材を開発する。
- ・人のつながり・・・学習過程において自分と他者とが時間と場所を共有しながら学

びあい、生徒間のつながり、地域とのつながり、多様な立場や世代間のごつながりを意識させる取り組みを行う。他者と議論したり、アドバイスを与えあったりすることで議論を深める授業展開を行ったり、実社会での事象や歴史的事項にふれたりすることで人の営みのつながりを感じる展開を取り入れる。

- ・能力・態度のごつながり・クリティカルシンキングをはじめとして身につけた能力・態度を行動や実践につなげる。持続可能な社会に関連する種々の事象に対して、課題を発見し、自分の問題として捉え取り組むとともに、現実的な問題解決とのつながりを実感する授業を行うことで学習と活動のごつながりを図る。

カリキュラムの構成では、学年進行に伴い教材がどのように扱われてごつながっているか、その際、能力・態度がどのように深まっていくのかなどを整理し、教師間で共有することが重要となる。そのため、今年度は、カリキュラムで扱う「テーマ」、「構成概念」、「ねらいとする能力・態度」を表にまとめ、学年進行に伴い、具体的な事象から、抽象化されたより複雑な事象へと各テーマが深まるよう構成できているかを確認し、それぞれの科目での具体的な扱い方や構成概念などを共有化した。ねらいとする能力・態度についてもごつながりを確認した。また、これらの能力・態度を育むために各科目で具体的にどのような授業展開や教材の工夫をするのかも議論しまとめた。

一方で、生徒自身がこれらの「ごつながり」を実感することが必要である。新教科「現代への視座」の科目間だけでなく、各教科間での教材のごつながりを感じるとともに、一つのテーマに対して多面的な視点の育成が感じられることが重要である。そのため、教師間でも、各科目での教材やデータを互いに出し合い、それに対するいろいろなアプローチの仕方について議論をする取り組みを行った。また、「人のごつながり」については、生徒が協同で学び議論し取り組むことで、新たな課題を発見したり、新しい知見や問題解決の糸口を得たりできる実感を持てる展開が必要となる。そのため探究活動などでは、各自の研究結果などの報告を行うだけでなく、質疑応答やアドバイスを互いにする展開も有効となるだろう。これらのいろいろな展開を試行する中で、生徒の変容をとらえ、その効果を評価していった。

次節では、今年度の具体的な事例を示しながら、実践の経過を報告する。

2. 実践の事例 2年 現代への視座「環境」

(1) 「3つのごつながり」の実践について

「環境」では、教科横断的な教材を扱い、実験や測定のご体験をもとに、データのご収集、まとめ方、考察のしかたといった基本的な技能や方法を課題に応じてご体験させ、研究の手法を身につけさせることをねらいとしている。環境問題を系統的・網羅的に扱うのではなく、例えば「酸性雨」を例としてその研究方法を学び、実際のご観測を行いながら技能や能力などの研究手法を身につけさせる。将来、他の環境問題に対面する際にも、この科目で身につけた技能や能力が転移され、有効にはたらくようになることを期待している。

この科目は、総合的な学習の時間のご位置づけで実施してきた内容を、時代の要請に応じながら内容を改変している。これまで、環境に関わる内容を扱う、理科、保健体育科、家庭科が共同して、教科の境界領域での教材づくり等を積み重ねてきた。ふだんの教科の授業ではスポットを当てることご少ない内容を取り上げたり、同じ題材をそれぞれの教科特有の切り口で扱うことで多面的な見方を育てるなどの工夫を行ってきた。また、それぞれの教科で育まれた能力が、「環境」の授業では様々な形で活用され、未知のご体験や未知の課題を解決していく場面も設定してきた。誕生以来、常に「教材のごつながり」が意識さ

れながら組み立てられてきた授業である。

以下では「環境」の授業で「教材のつながり」、「人のつながり」、「能力・態度のつながり」が端的に表れている例を取り上げて、ESDの考え方を取り入れることで、どのように授業が変容したか、そして、どのように生徒が変容したかという視点で報告する。

(2)「教材のつながり」をつくる実践

「環境」の最終単元「生活を見つめる」では、自分の生活をターゲットとして、持続可能な社会のために何ができるのか、どのような行動が求められていくのかを「エネルギーの視点」をもとに明らかにしていき、科学的な根拠に基づいて意思決定していくための、ものの見方や考え方を養う教材の開発をおこなった。その中で、生活におけるリサイクルを取り上げた、家庭科と理科が共同して開発した教材の事例を紹介する。

A 授業展開

アルミニウムは2011年の年間消費量は、約30万トン(約185億缶)そのうち、回収量は約27万トン(約170億缶)となっている。これは、ボーキサイトからアルミニウムを精錬するよりも、回収済みのアルミ缶を高温で溶融してアルミニウムの地金をつくる方が、エネルギーが少なく済む。当然、コストも安くなる。こうした背景があることを反映していると考えられる。

これに対してペットボトルは、2011年の年間生産量は約53万トン、回収量は約35万トンで、その内14万トン(約40%)が繊維やシートなどに再資源化されており、再びペットボトルとして還流した量は1万2千トン(約3.5%)にとどまる。資源包装リサイクル法の施行以来、リサイクルが進んでいると考えがちだが、現実はそうっていない。

資源包装リサイクル法の施行以来、リサイクルが進んでいると考えがちだが、現実はそうっていない。

以上のことを理解した上で、「もし、同じ飲料製品(例えばコーラ)がペットボトルとアルミ缶に入って売られていた場合、あなたはどちらを買うか」を判断させ、その理由も答えさせる。また、「それを決めるために、考えなければいけない内容やデータはほかにはないだろうか」という投げかけもおこなって、自由に記述させた。

B 生徒の反応

生徒の反応は、「リサイクルといいながら、現実には難しい。」と言いながら、「ペットボトルはふたができて便利がよいのでそちらを選ぶ。」「軽くて輸送も楽。」といった内容が多く見られた。さらに、リサイクルではなく瓶のリユースを主張する生徒もいる。「瓶は重くて輸送にエネルギーや費用がかかるが、それ以上に資源やエネルギーを無駄にしないメリットがある」といったことを気付いて記述している。エネルギーの視点から、「リサイクルできてよいが、すべてアルミ缶にするのは大丈夫だろうか(たくさんエネルギーが必要になる?)」という記述も見られた。

最後に、右の表を見せ、国民が負担しているゴミの処理費用について学習した。税



	アルミ缶	スチール缶	びん	PETボトル
1. 収集費用	696,906,048	1,771,716,507	3,542,129,639	27,956,027,568
2. 処理費用	347,637,180	927,757,108	2,114,202,274	282,815,305
3. 売却収入	1,122,981,469	95,990,325	116,131,852	45,054,644
費用合計: 1+2-3	-78,438,241	2,603,477,288	5,540,200,061	28,193,788,227

財団法人日本アルミニウム協会
<http://www.aluminum.or.jp/box/junkan/keizai.htm>の資料より

**重量で、アルミ缶が2%、スチール缶が5%、
 びんが11%、ペットボトルが82%
 アルミ缶は売却収入の方が多い**

金から支出されるゴミの処理費用は年間2兆円。こうしたデータを示して、ペットボトルはリサイクルされるから、環境や循環型社会にとって「よいもの」であるという思い込みについて考えさせている。

(3) 「人のつながり」をつくる実践

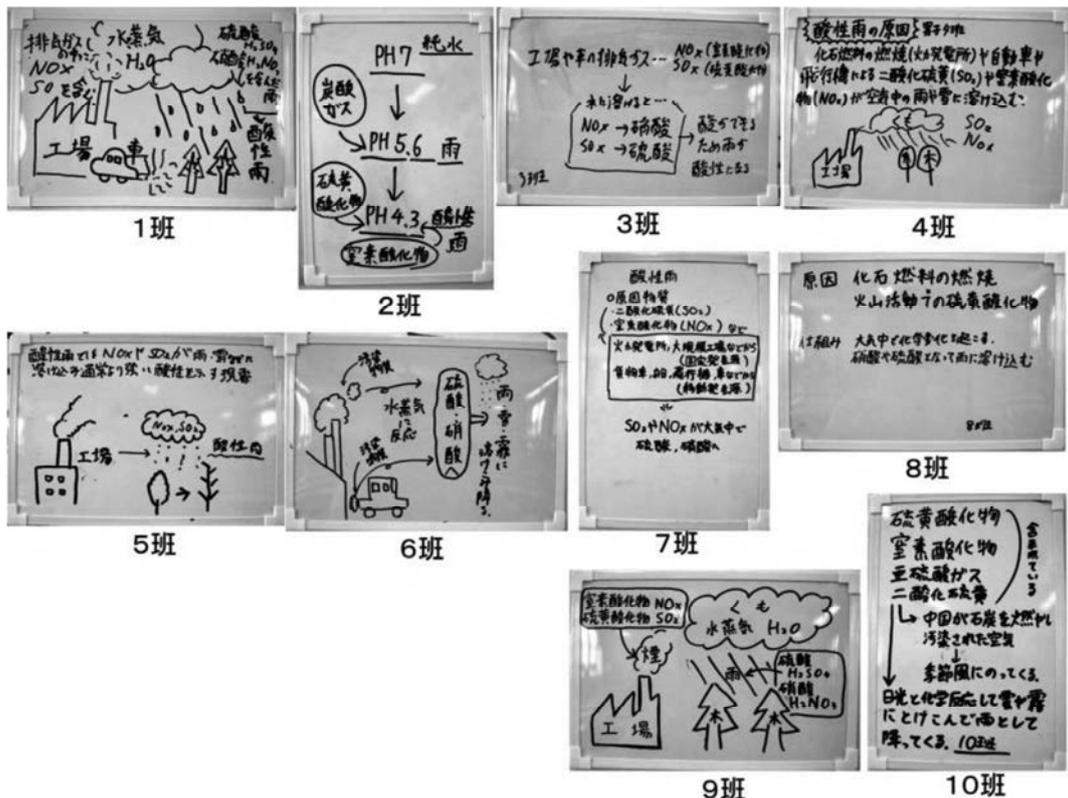
現代への視座「環境」 第1単元 外的環境では、「酸性雨が降るしくみをまとめる」という課題を設定した。小学校でも酸性雨について学習しており、生徒たちはかなりの知識を持っている。生徒によっては環境の授業でpHについて学習する前から、酸性雨とはpHが5.6より低い雨を指すという知識を持っている生徒もいる。ただし、生徒によって知識の量や質にはかなりの差がある。このような状況の中で、個々の生徒が持つ知識を少人数のグループで共有し、それをまとめて発表する協働学習を実施し、「ひとのつながり」を作り出すことを試みた。

A 授業展開

小学校等で既習の内容である「酸性雨がどのようなしくみで降っているか」という課題に対して、4～5人グループで自分たちの持っている知識を共有し、内容の整合性を取る作業を、時間を10分に区切って実施した。続いて100円ショップのホワイトボード1枚に、自分たちが共有した内容を、文字や図を用いて5分程度でまとめ、発表させた。その際、他のグループの書いていない内容には高いポイントを与えることを伝え、オリジナリティや独創性のある記述を促した。

B 生徒の反応

41人のクラスで10班が描いたものを並べ、他のグループの記述に対して「つつこみを入れる」ことを求めた。1班は2班に、2班は3班にというように、担当の班を決めて必ず何かコメントや質問を出させる。また、他の班からの自由な質問も受け付ける。



質問の際の作法として、他の班のよいところに気付き、それを讃える発言も、必ずおこなうように指導した。

内容の点で大きな間違いを記入している班は見られなかった。質問は、「硫酸化物」や「窒素酸化物」といった難しい用語に対する質問が多く出された。NO_x や SO_x という用語も多くの班が記入している。

こうした中で、例えば「酸性雨は中国だけの責任か?」、「汚染物質が水蒸気と反応とあるが本当か?」、「NO_x が雪に溶ける」というのは間違いでは?」などの疑問が出され、それらについて記述していた班が説明していく。

最終的には、「言い過ぎはないか」を互いにチェックし、内容を深めていった。

はじめに独創性を求めたことが、他の班とは違うものを作ろうという意欲になり、また、それがあとで「突っ込みを入れられる」材料にもなり、活発な発言が続いた。他の班への質問も、同じ班のメンバーが相談して考えるなどの姿が見られた。

(4) 「能力・態度のつながり」をつくる実践

「能力・態度のつながり」については、ESD で獲得した能力を、将来に向けての態度として「参加」につなげることが重要である。学校の授業において実際に参加の場面をつくることは難しいと考えられるが、従来より家庭科では、生活の中での実践を求めてきた。持続可能な社会に関連する生活の中での事象に対して、自分の問題として捉え、取り組むとともに、現実的な問題解決とのつながりを実感することのできる授業を行うことで、学習と活動のつながりを図ることができると考えている。

「環境」の最終単元である「生活を見つめる」では、それまでに身につけた技能や能力を生活の中で生かし、活用し、自分たちの生活を見つめ、科学的な根拠に基づいて意思決定する体験を取り入れている。自分の生活が環境に影響を与えており、自分の行動に責任を持つことが必要であることを実感させたいと考えている。

A 授業展開

「環境」の最終単元「生活を見つめる」の最後の内容として、自分の家庭で有効な「エコチャレンジ」の計画を立てる課題に取り組みさせた。その際にどうしてその内容が自分の家庭で有効なのか、その理由を家族に説明できるように、できるだけデータも示して書かせる。そして、それを実際に自分の家庭で実践するように求めた。

生活を見つめるの単元では、右に示したような内容の教材や活動を実施している。ただし、リサイクルに関する内容、保温調理法を用いたエコクッキング、エコチャレンジの作成は必ず実施するようにしているが、時間的な制約からそれ以外の内容はすべてを毎年実施するのではなく、この中からいくつかを取り上げて実践している。テキストには、上のすべての内容を収録しており、エコチャレンジ作成の際には、それらを参考資料として利用させている。

B 生徒の反応

生徒の記述では、「冷蔵庫の開閉を減らす」：父も母も冷蔵庫を長時間開けておくせがあるから。「エアコンの設定温度を上げる」：使用電力量が多い機械だから。「洗濯をできるだけまとめてやる」：電力だけでなく水も節約できるから。といった、それぞれの家庭の様子が伝わる内容が提案された。

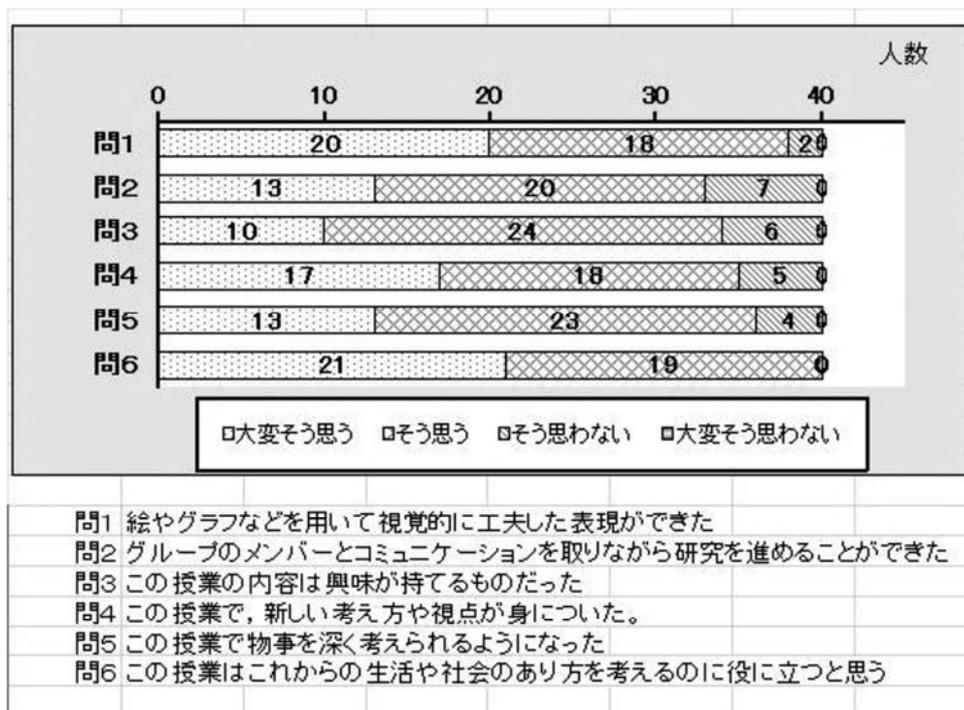
家庭でどのように家族に提案し、どのように実践していったかという追跡はできていない。何人かの生徒に聞いたところでは、「この程度の実践は常にやっている」という意識の高い家庭もある。そういった意識の高い家庭の生徒は、エコチャレンジの内容をどのようにするか、苦労したという感想も言っていた。また、家庭でこれまでなかなか実

行できなかった内容をエコチャレンジに記入したことがきっかけとなって家族で話をし、実践が継続しているという生徒もいた。

(5) 授業後のアンケート

A 授業のねらいを生徒がどのように捉えたか

「環境」の最後の授業時間を利用して6つの設問で行ったアンケート結果は以下の通りである。



40名中34名が興味を持てる内容だった(問3)と答えている。その他の問についても、否定的な見方をしている生徒は少ないと言える。特に、「この授業がこれからの生活や社会のあり方を考えるのに役立つと思う」(問6)は、すべての生徒が肯定的に捉えている。昨年度の報告書では、「環境」で取り組んだ「非連続型テキストを描く」ことを意識させる授業展開を報告したが、今年度のアンケートからも「絵やグラフなどを用いて視覚的に工夫した表現ができた」(問1)も、すべての生徒が肯定的に答えている。こうしたことから、特に重点を置いて取り組んできた内容が生徒にもしっかり意識され、好意的に捉えられていることがわかる。

B 自由記述から

同じアンケートの中で実施した「この授業を受けての感想」(自由記述)を分析した。○エコや環境について考えたことが印象に残っています。この授業を受けて、今まで「酸性雨」や「地球温暖化」などのことばや原因は知っていても、詳しい解決方法は分かってるようで分かっていなかったのだと思いました。授業でエコクッキングなどをしたことでどうすればいいのかという方法はたくさん知ることができました。その知識を行動に移すことができ初めて「分かっている」と言えると思うので、少しずつでも実行していきたいです。

○当たり前のように、私たちは水を使ったり食べ物を食べたり生活している。そのような生活の中で環境はどのように変化しているかを考えてもいなかった。環境の授業では

「何が起きているか」「何が不足なのか」「何が大切なのか」を考えさせてくれた。今、私ができることは小さなことかもしれないけど、将来大きなことができるようになるまで環境のことについて知識をたくさん持っていきたいと思う。

○この授業を通して、自分たちが環境にどんな影響を与え、負荷をかけているのかがよく分かった。一人一人が努力しても意味がないと思っていたけど、ものを買うときも環境によいものを意識して買えば、企業側も動くことになり、十分に環境改善に貢献できると思った。世の中のしくみを理解し、行動していきたいと思った。

○よくテレビなどでE C Oとか言っているが、今までは正直、あまり実感がわいていなかった。この授業を受けてみたら、なんだか身近に感じられるようになり、気をつけなければいけないんだと思えるようになった。p Hなど実際の値を目で見ることで、よりよく分かり、今後もいろいろなデータを見ていきたいと思った。

こうした文章の中で「自分の問題として考えることができているか？」を拾い出す。その際、未来がこうなっているだろうというような記述ではなく、自分がどのように関わっていくか、どう行動するかという記述に注目した。上の4人の生徒の場合、下線部の表現から、「自分の問題として考える」という目標が達成できていると評価した。

こうした分析の結果、40名中18名の記述に、「自分の問題として考える」という目標が達成できていると評価できる内容が見られた。過去の生徒による自由記述と比較すると、根拠に基づいて、行動する決意を表現している生徒が増加していることが見いだされている。

(6) まとめ

「環境」のカリキュラムは、生徒に好意的に捉えられていることが明らかになった。生徒がどのような変容を遂げているか、生徒の記述から捉えることも、試行することができた。

生徒が社会の中で、環境に対して行動する意欲を持ち続けていくことができるかどうかは、強い信念として植え付けられること、あるいは、科学的な根拠に基づいて深く理解し深く考え判断していく態度を持つことが重要である。信念は時の経過とともに様々な経験を経て変化することもあるだろうが、論理に基づく判断は、生徒にとっていかなる場合でも揺るがないものとなる。

自由記述の3人目の生徒が書いていたように、「世の中のしくみを理解し、行動していきたい」という態度こそ、この授業で育むべき態度であると、あらためて感じている。過去10年以上にわたる自由記述の感想の中で、この内容の記述ははじめて見たものである。これも現在のカリキュラムの成果であると感じている。

3. まとめ

今年度の実践では、現代への視座で、そしてそれ以外の総合的な学習や既存の教科で、E S Dがねらいとする能力や態度の育成のために、新たな取り組みが行われた。それらの詳細については紙面の都合で紹介できないので、当校の平成25年度研究開発学校報告書を参照いただきたい。特に、今年度の実践では、3つのつながりの中でも「人のつながり」を重視してきた。授業の中に発表の活動を取り入れ、コミュニケーションや相互評価を求める実践である。現代への視座 3年「地球科学と資源エネルギー」では、風力発電を題材にした探究活動の発表の場面で、他のグループが「つつこみ」を入れることに取り組んだ。この授業は、当校の公開研究会で授業を公開し、高い評価をいただいた。

コミュニケーションについては、現代への視座 現代評論Aは日本語を用いて、そして

現代評論Bでは英語を用いて、相互評価を取り入れながら議論の方法を学んでいる。これらも、当校の実践のオリジナリティが高く評価されている。

問題解決の過程は、現代への視座 数理情報でクローズアップされた。

他にも、数多くの新しい実践が生まれてきた。そして、実践内容が深化している。

今年度の研究は、計画に基づいて順調に推移してきた。その中で、以下の3点を来年度に向けた課題として指摘する。

能力や特に態度の育成には、教育方法としての新たな取り組みを行っている。現在は試行段階の実践であるが、これらが確実に生徒の意識や意欲、態度を変容させているか、検証にはまだ時間が必要だと感じている。生徒の発表では、その発表そのものが成果物であり、それを評価することは可能である。しかし、その持続性や普段の生活への転移など、社会の中でも生きてはたらくようにするためには、スパイラルの中での反復なども必要かもしれない。この点についてのカリキュラム評価と改善が、来年度に向けての1点目の課題であると考えている。

4年前にクリティカルシンキングの研究に取り組み始めた頃は、校内の教員全員が共通の理解をしていくことが出発点であった。さらに生徒や保護者、あるいは研究会参加者など、ことある度に、クリティカルシンキングとは何かを説明し理解を得るように説明を繰り返した。そのときと比べると、「持続可能な社会の構築に向けた教育」の研究については、共通理解を得ることは容易であった。しかし、それが本当の意味で浸透しているかは、もう少し確認に時間がかかる。教員間での議論を研究推進委員会などだけでなく、いろいろな場面で進め、教科を越えた新たな教材開発など内容面での深化につなげていくことができると感じている。こうした風土づくりも来年度に向けての2点目の課題である。

生徒の評価方法については、多面的な評価方法を開発し、成果物に対してルーブリックを用いて評価するなどの手法を開発してきた。パフォーマンス評価などの開発も行っている。的確に評価し改善する繰り返しが、よりよいものを生み出す原動力となる。しかし、評価内容や評価方法が独りよがりのもになっていないかは常に注意しなくてはならない。パフォーマンス評価でも学年集団など複数の目でルーブリックを作成することが必要であり、誰の目から見ても適正と考えられる方法を確立していくことも、来年度に向けての3点目の課題である。

参照・引用文献

グローバル人材育成推進会議(2012) グローバル人材育成戦略 審議のまとめ. 平成 24(2012)年 6 月 4 日. 文部科学省. (<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/>)

経済産業省 (2010) 報告書～産学官でグローバル人材の育成を～. 産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会. 2010 年 4 月

(http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/global_jinzai.htm)

文部科学省 スーパーグローバルハイスクールの概要

(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sgh/_icsFiles/afieldfile/2014/01/16/1342988_01.pdf)

国立教育政策研究所, 研究代表者 角屋重樹 (2012), 学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 [最終報告書],

広島大学附属福山中・高等学校 (2014), 平成 25 年度研究開発学校実施報告書

海外の取組

海外の取組

シンガポール視察 報告書

1. はじめに

本年度の附属学校園の年度計画では、「初等中等教育カリキュラム及び教員の質を保証する教育実習制度を開発するため、大学と連携して具体的な研究開発システムを構築する」ことを目標としている。その目標を達成する1つの手段として、昨年度に引き続き、海外の先進的な取組をしている学校や大学機関を訪問する機会を得た。

今回の視察は、アジアの中でも先進的な教育改革を推進し、なおかつ昨年度訪問実績のあるシンガポールであった。具体的には、第1日目に Temasek Junior College、そして第2日目に国立教育学院（National Institute of Education）を視察した。

なお、本稿の執筆分担は以下の通りである。

章立て	執筆者（敬称略）
1. はじめに	岩田・松浦
2. シンガポール視察における研修の概要	梶山
3. 研修内容	
(1) Temasek Junior College の視察	梶山
1) 学校概要	梶山
2) リーダーシップ人材育成のための取り組み	梶山・松本・野添
3) 視察授業報告	
(2) シンガポール国立教育学院（NIE）の視察	岩田
1) 講話の概要	
2) シンガポールにおける中等教育から学ぶ7つの視点の概要	
3) 日本の中等教育への示唆	
4. グローバル化に対応する各附属学校園の課題と展望	
(1) 附属中・高等学校	梶山
(2) 附属東雲中学校	野添
(3) 附属三原中学校	松本

2. シンガポール視察における研修の概要

(1) 参加者	広島大学副理事（附属学校担当）	松浦 伸和
	広島大学大学院教育学研究科 准教授	岩田 昌太郎
	広島大学附属中・高等学校 教諭（理科）	梶山 耕成
	広島大学附属東雲中学校 教諭（理科）	野添 生
	広島大学附属三原中学校 教諭（美術）	松本 裕子

(2) 日程, 視察校, 講演者

- 1月15日（火）福岡市内前泊
- 1月16日（水）福岡空港 発—シンガポール・チャンギ国際空港 着
- 1月17日（木）終日 Temasek Junior College 訪問
- 1月18日（金）国立教育研究所（NIE）齊藤英介先生による講話と討議
シンガポール・チャンギ国際空港へ移動
- 1月19日（土）チャンギ国際空港 発—福岡空港 着

3. 研修内容

(1) Temasek Junior College の視察

1) 学校概要

学校の概要については、平成25年3月の広島大学附属学校園研究推進委員会発行「社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発」（pp.67-68）にも紹介されているため、以下の「①学校規模」、「②生徒の様子」、「③施設・設備の様子」についてのみ概説する。

①学校規模

対象生徒：中等教育の第1年（日本でいう中学校1学年；12歳）から中等学校6年（日本でいう高等学校第3学年；18歳）までで、総生徒数約4,300名の大規模校である。

学年構成：ホームルーム1クラスは約24人、クラス数は1学年約30クラスもある。

教職員の構成：校長（principal）1名、教頭（assistant principal）3名、heads18名、副校長（Deputy Heads）29名、主要職員（Key Personnel）51名、リーダー教員（Lead Teachers）2名、ベテラン教員（Senior Teachers）13名、教員（Teachers）109名、EAS38名、総勢213名の教員集団。

②生徒の様子

中等教育の4年次にも設置されている大学進学か職業技能訓練、あるいは就職等の進路を学力の相違によって選択していく試験である the Singapore Cambridge-General Certificate of Education（GCE）には、3つのレベル（A:Advance, O:Ordinary, N:Normal）がある。その

GCE-A レベルの試験を TJC の学生は 100%通過しており、多くの生徒が奨学金を得て大学に進学する。海外への進学率は約 20%程度である。生徒の 86.9%は理工系コースを選択している。

③施設・設備の様子

施設としては、オールウェザーのトラックに加えて、全面芝で整備されたグラウンド、そしてスタンドが設備されていた。教室は、Admin Block & Science Block, Arts Hub, Auditorium & Lecture Theater の 3 ブロックに分かれて、それぞれの教室で 24 名、実験室は約 40 名で収容できるスペースを確保している。それぞれの教室には ICT 機器として、プロジェクター等を設置している。また、生徒達が文化活動を発表するためのステージがあったり、校舎の中心には会話を楽しむためのカフェのようなスペースが設けられていた。

さらに、職員室においては、教師の机は各教科、科目ごとに集まり、数十人が一つの大きな部屋にそれぞれ分かれている。各人ごとに仕切りで区切られ、ある程度のプライバシーを保ちながら仕事ができるようになっている。



2) リーダーシップ人材育成のための取り組み

リーダーシップを育成するためのプログラムとして、次の 4 つの取り組みを行っている。マゼラン・プログラム、テマセック海外奉仕プログラム、Go Green Day (新聞紙を収集して資金を稼ぐ)、テマセックの著名人による演説である。さらに、次頁の概念図 (図 1) は、TJC のリーダーシップを育成するためのプログラムを 3 つのレベルにわけ、そのレベルに対してどのくらいの生徒が参加しているかの割合を示している。





リーダーシップ育成プログラムのレベル別の参加度

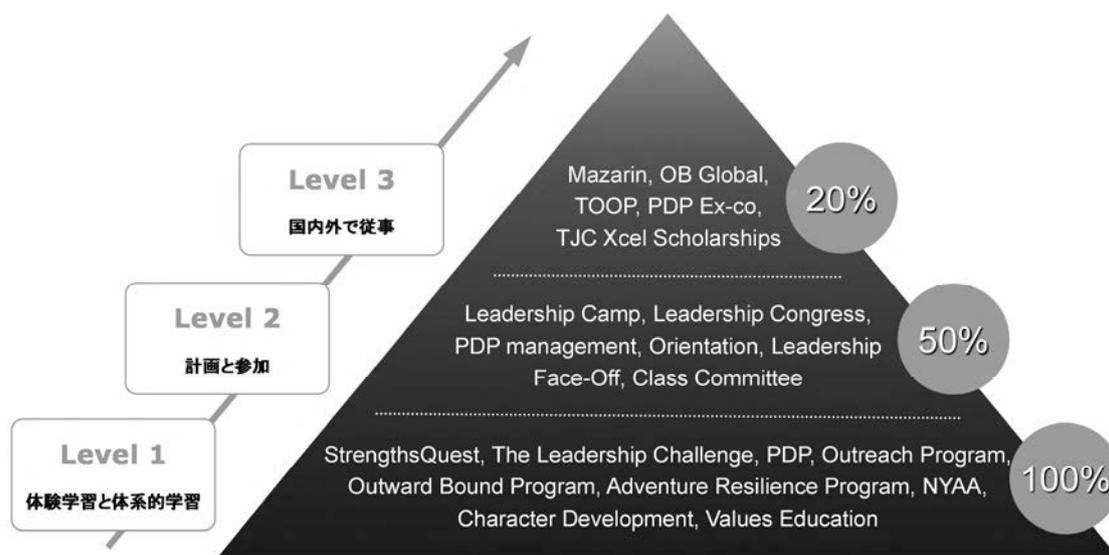


図1 TJCのリーダーシップ育成プログラム

3) 視察授業報告

①9:10-10:00 化学 (Chemistry) : Mr Timothy Ho

ア 参加生徒数 21 名

イ 学年 中等学校第4学年 (16歳)

ウ 授業内容

この授業は化学結合—特にファンデルワールス力や水素結合に関する授業であった。導入ではファンデルワールス力や水素結合に関する説明を教師が行った後、生徒たちは水とヘキサンをビーカーに入れて2つの層をつくり、そこに片面を鉛筆で塗りつぶした紙片を数枚入れて、ゆっくりかき混ぜるという実験を行った。その結果、紙片は2つの層の間に留まり、かつ、全ての紙片において鉛筆で塗りつぶした面がヘキサンの層、



塗りつぶしていない面が水の層に面している結果を全員で確認した。黒鉛とヘキサスがファンデルワールス力で引き合う一方で、塗りつぶしていない面の紙（セルロースのヒドロキシ基）と水が水素結合で引き合うという考察を通して、ファンデルワールス力と水素結合といった化学結合を理解するという内容であった。

エ 所見

非常に印象的だったのは、シンプルな生徒実験と濃密な考察の組み合わせという授業スタイルである。時間の使い方がわが国の一般的な理科の授業とは正反対であった。わが国ではどちらかといえば、実験が終わると授業の残り時間がほとんどなく、考察を教師が板書してしまうパターンや、宿題にしてしまうパターンの授業が多く見られる。今回の授業のように、生徒実験にかかった時間（約 10 分間）の 3 倍以上を費やして考察を行うためには、教師が意図的にそのような授業を行う必要がある。つまり、生徒が集中力を欠かさないう魅力的かつ難易度の高い生徒実験を用意し、教師がでしゃばらずに適度な支援を行うという授業スタイルである。実際に、この授業で生徒たちは、なぜそのような結果になったのかを班の中で、時には班を超えて話し合い、理由を考えており、教師は各班を回りながら、生徒の質問に答え、また、必要に応じてヒントを出していた。

②9:10-10:00 美術 (Arts)

当初の計画にはなかったが、先方のご配慮で美術担当の先生方から校内展示作品や授業内容についての説明を受けることができた。

校内の至るところに、80号程度のキャンバスに描かれた絵画や、壁に取り付けられたアクリル板に挟んだ半立体の生徒作品等が数多く展示されており、美術を選択した高校生の意欲と技能が見とれた。(写真1・2)。また、本校を卒業した大学生による現代美術系の作品展が開催されており、中高生が感性を刺激されるような空間が設けられていた。

日本と異なり中学校の必須美術は、中等学校第1学年（13歳）の1月から5か月のみで、内容は“draw・paint・craft”とのことであった。担当のFarah先生の実践は、私たち日本の美術教師が大切にしていることと重なるところが多く大変共感できた。具体的には、「完成を焦らず、段階を踏んで緩やかに進め、美術が好きな生徒も、苦手な生徒も自己表現を充実させることができるよう工夫している。」「進度の速い生徒は、友だちを手伝うこともあるが、できるだけ振り返りの活動を充実させるようにしている。」「教師も生徒の感想や作品をもとに実践を振り返り、題材や指導方法の改善に取り組んでいる。」等である。



写真1 校内に展示されたキャンバス作品



写真2 アクリル板に固定された半立体作品



写真3 名前の鏡文字デザイン

以下、Farah 先生に例示していただいた題材を紹介する。写真3は中1の導入題材で、自分の名前を線対称（鏡文字）に描き何かに見立ててイラスト化するというやや容易な活動を通して、創造活動への関心・意欲を高めることがねらいである。写真4・5は、“Self-Portrait-Painting”で、日本の教科書でも「自分探しの旅」として類似題材が掲載されている。「自分の顔を写真に撮る。⇒鉛筆でデッサンする。⇒マインドマップ（写真4）を用いて、テーマを選択する・アイデアスケッチ⇒下絵づくり⇒配色計画（暖色・寒色バージョン）⇒彩色⇒振り返り」という流れで、制作の各過程を大切にした取り組みがなされていた。また、完成作品（写真5）には写真6のような教師の評価カードが添付されており、観点別の評価と取り組みへのコメントが丁寧に生徒に還元されていた。総合的な評価方法としては、制作過程を含めた成果物の評価と理論に関するペーパーテストを実施している。

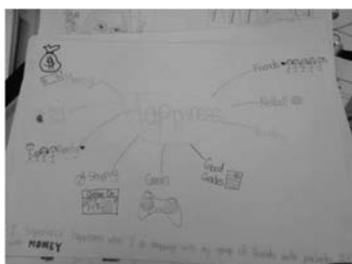


写真4 イメージを広げるためのマインドマップ



写真5 “Self-Portrait-Painting”完成作品

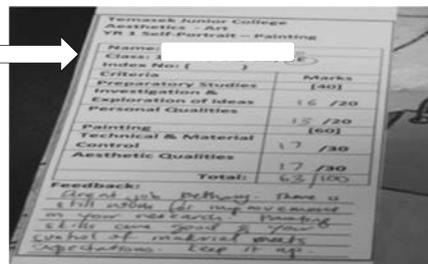


写真6 教師による評価

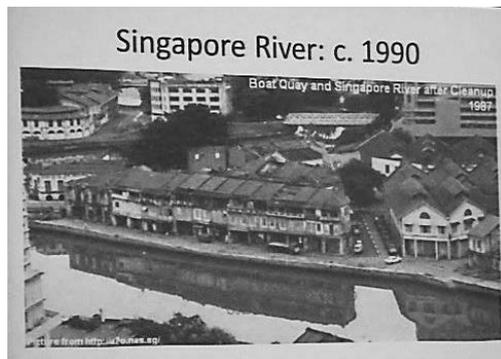
③10:10—10:50 国語 (Language Arts) : Ms Goh Wee Suan

ア 参加生徒数 23 名

イ 学年 中等学校第 4 学年 (16 歳) (CG 4)

ウ 授業内容

この授業は、「読解技術」とでも翻訳すればよい授業である。「Heritage Landscapes and Nation-Building in Singapore」(Hamzah Muzaini)の小論文を素材にして、この内容をどのように理解するかについて、2つの異なる視点から捉えるアプローチを生徒との対話の中から引き出していく授業であった。「あなたにとってシンガポールのランドスケープとは何か」との問いかけから生徒達は自分の経験や友達との対話を通して、シンガポールらしさについて意識を高め、教師が写真スライドで示すシンガポール河川の護岸の1900年から2010年までの変遷を見ていく中で、現実的な理由 (practical Reasons) と心情的な理由 (Sentimental Reasons) とを対比しながらそれぞれの視点から見たシンガポールの変化の捉え方を示していた。最後に、先に示した小論文を配布し、この文章を読む宿題を示していた。



エ 所見

最後に配布した文章をみると、生徒が高校 1 年生としてはかなり高度な資料ではないかと思っただが、教師と生徒との対話が発展していく様子や、教師の説明を生徒が熱心に書き取っているのをみると、今回の授業レベルがこの生徒達には適当であろうかと思われる。分析的、論理的、批判的思考力を養う授業方法であり内容であることがうかがえる。

一方、生徒達がシンガポールのランドスケープとは何かとの問いに対して答えていた内容から、シンガポールという国がどれ程急速に変化しているかを図らずも垣間見ることになった。所属する民族の言語や生活習慣、宗教等、異なる背景をもつ人たちが一つの国家を形成するとき、英語による授業の持つ意味の重さを垣間見た思いであった。

④10:50－11:40 Green Science : Ms Sharifah Sharidah

ア 参加生徒数 24 名

イ 学年 中等学校第 2 学年 (14 歳)

ウ 授業内容

人間の消化に関する授業であった。導入として、ジャガイモのカタラーゼを使った生徒実験を行い、酵素の働きについての学習を行った。その際、スライドやムービーを駆使しながら、生体触媒のメカニズムや酵素が特定の基質だけに作用する性質（基質特異性）などを説明していた。また、酵素反応の最適温度や最適 pH までふれていた。その後、右図のように実際に、人間が消化する過程を演示実験でデモンストレーションしていた。具体的には、食べ物が入る口→胃→小腸→大腸→肛門→便という順に、消化酵素の働きにより分解される過程を視覚的に示しており、生徒たちが積極的に参加するほど興味深い実験であった。



エ 所見

特にこの授業に特化した事ではないが、シンガポールの理科の授業は難易度が高く、学習内容が深い。しかしながら、生徒たちは諦めることなく、むしろ、授業内容を理解するために貪欲に質問を行い、チャレンジすることを楽しんでいるようにも見える。また、教師側の意識も、授業を円滑に行うためではなく、生徒が自分の分からない部分をしっかりと捉え、それを解決するための授業を展開している。「難しいけど楽しい」という理科の授業が展開されており、ここにヒントが隠されているように感じた。ちなみに、この演示実験は非常に工夫された実験で、わが国の理科教育にもぜひ取り入れた方が良いと思われる実験であった。

⑤11:40－12:30 数学 (Maths) : Mr Gan Chin Koon

ア 参加生徒数 23 名

イ 学年 中等学校第 6 学年 (18 歳) (JC2)

ウ 授業内容

シンガポール国内で実施している TOTO の実態を導入にして、確率と期待値について学習していた。生徒に実際に 0～45 までの数字を予想させ、任意の数字が出るおもちゃを使いいくつか数字が当たったかをデモンストレーションしながら、確率の組み合わせの求め方を説明し、実際に使われている TOTO のルールや、国内の当選者数、当選金額と実際のチケットの価格を比較するなど、現実に起こっている事象と学習内容を結びつける内容であった。



エ 所見

事前に配布していた表の空欄に計算式を書き込む活動が主であったため、数学を英語で授業することはそれ程困難ではないと思われる。テキストもあったが、ほとんど教師と生徒とが対話を進めながら授業する様子は、欧米型の授業と類似していた。少人数の授業であることもこうした授業スタイルが可能な要因の一つであろうと考えられる。



(2) シンガポール国立教育学院 (NIE) の視察：齊藤英介先生による講話と討議

シンガポールでは、1980 年代に高等教育が急速に拡大しており、1991 年の南洋理工大学の開学にともなう国立教育学院 (National Institute of Education ; 以下、NIE と略記) の設立によって、教員養成において 4 年間の全日制課程が設置され、学位が授与されている (池田, 2005)。NIE は、1973 年に設立された「教育学院 (Institute of Education : IE)」を前身としており、教員養成と現職研修を行っている。現在でも、教育省と NIE の密接な連携と強力な指導の下、教員養成・現職研修の改革が間断なく進められている (池田, 2005)。



今回は、その NIE に勤務する齊藤英介先生に、以下のタイトルで講話をいただき、その後討議の場を設けた。それでは、以下のその内容を概説していく。



講話のタイトル:「シンガポールの中等教育に学ぶこと」

1) 講話の概要

講話の概要は、大きく 7 つの視点から構成されていた。それは、①学びの質、②共同的な学びと教師の仕事、③カリキュラム構造の問題点、④一方的な授業の問題、⑤グループ学習の問題点、⑥ICT 活用の問題点、⑦子どもの敗北感である。それでは次に、その具体

的な内容を概説していく。

2) シンガポールにおける中等教育から学ぶ7つの視点の概要

①学びの質

高校（進学率 30%）のある教室の風景を VTR にて視聴した。その映像は、寝ている生徒がやがて積極的に授業に参加していったものであった。

その VTR を視聴しながら、齊藤先生は、「授業の質の改善の必要性」を強調された。また、教師がより質の高い授業を行うためには、以下の 3 点に注意を払う必要性があることを指摘された。それは、i) 大学のゼミの経験によって高校教員の授業の質が上がる、ii) 科目の専門性の習得はもちろんだが、専門性を越える教養が必要、iii) 子どもの現実との照射ができること、である。

さらに、課題を持っている生徒への対応として、生徒が興味を持続できるような「しかけ」の必要性とそのための学校文化を作ることが求められることを強調された。

②協同的な学びと教師の仕事

授業に参加できない生徒に、他の生徒に教師が働きかけることによって、その生徒が生徒同士の学びの共同体に入っていくことができた事例の VTR を視聴した。

③カリキュラム構造の問題点

ここで強調されたのは、i) 学びの構造の欠如、ii) 教師の教養（カリキュラム内に留まっている）、iii) 安易すぎる「楽しくやる」ことへの誤解である。

とりわけ、「教師の二面性」について、優れた点において最新の理論に対する熟知（「書く」能力の高さ）、そして問題点としては、「職人」性の問題（子どもが見えていない）、「見せるためだけの授業」になることへの危惧を指摘された。

④一方向性の授業

講話時間の関係上、省略された。

⑤グループ学習の問題点

役割分担の生徒の儀式として、結局、役割分担していてもやるのは一人の生徒であり、教師の命令を効率よく行うことがグループ内の目的となってしまう傾向にあることを強調された。つまり、分からないことを分からないと意思表示できるような生徒を育成していくことの重要性を指摘された。

⑥ICT 活用の問題点

2 つの事例となる VTR を視聴した。例 1 としては、数学の授業（ICT を用いることによって生徒がどこで間違えたのか分かるもの）であった。次に、例 2 として、学びを伝達する道具としての有用性を「化学の実験」の様子であった。

齊藤先生は、授業が変わるためには教師の考えの基本（存在感）が変わる必要性がある

ことを指摘された。

⑦子どもの敗北感

VTR としては、授業中に寝る子で、小学校上級学力別編成後の学ぶ意識が減退している様子のものであった。

齊藤先生は、力のない教師は権威主義的、管理主義的になりやすい。また、評価主義の教育が前提では、「できない」ことは「自殺宣言」に等しく、「分からない」ことを「分からない」といえる権利が必要不可欠であることを再度強調された。

3) 討議：質疑応答

質疑応答については、その内容を以下の箇条書きで列挙する。

Q1. グローバリゼーションの資質能力とは？

- ・抑圧されている人への共感が必要ではないか
- ・世界の問題が解決できなければ自分も幸せになれない、といった感情
- ・社会正義を考えること
- ・コミュニケーション能力とは、言語の習得、自分が当然と思う事を論理的に表現する
- ・シンガポールでの人材流出リスクがある。国民を従業員の65%雇用すると補助金がでる。

Q2. 教師が変革した事例はありますか？

- ・教師が本物の授業に触れることが大切である。

Q3. リーダーシップの育成方法とは？

・どちらを向いている人材かが大切（「俺についてこい」的なリーダーでは駄目で、「後についていける人」も大切、授業で「分からない」と言えて、受け止めることができる人）



Q4. シンガポールの「光と影」はあるのか？

- ・「陰」は、行き過ぎた評価主義、能力編成の教育
- ・「光」は、教師の研究や学びに対するアンテナが高い ベースには英語力がある

4) 日本の中等教育への示唆

日本の中等教育への示唆として、齊藤先生が述べられた意見で印象に残っているものを以下に列挙している。

- ・シンガポールの教育における「光と影」がある。
- ・「わからないこと」を「わからないといえない」生徒たちの学習環境
- ・グローバル化人材育成とは、逆に「このような人材は育てたくない」という発想も必要

ではないか。

- ・東南アジアに共通する「下僚」制度による影響
- ・シンガポールの優秀な人材が流出している。例)「シンガポールは誰のためか」
- ・評価主義による弊害
- ・リーダー像の組み換え
- ・「本物」に触れることの大切さ
- ・シンガポール人は苦しい状況に追い込んでいる側面も有する。
- ・シンガポールの教育から学ぶべきもの

マイナス面として、シンガポールの行き過ぎた評価主義、すなわち子どもを能力別に早期から分別することはかなり子どもたちに歪みをもたらす危険性が潜んでいる。さらに、教師に対する行き過ぎた評価主義も同様である。

プラスのポイント：日本の一部の教師に限定される可能性があるが、研究あるいは学びに対する最先端の情報を得て、それをもとに教育実践ができる強みがある。それを可能としているのは、「英語力」である。したがって、どうしても、そういう点については、やはり英語ができるので有利である。

4. グローバル化に対応する各附属学校園の課題と展望

(1) 附属中・高等学校

本校は、平成 15 年以来、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 事業への取り組みを進める中、平成 24 年度第 3 期 SSH では、国際的視野の獲得を研究開発課題の一つに据え、様々な教育活動を展開している。具体的事例として高等学校第 2 学年 SS コース生徒約 40 人に対して学校設定科目「科学英語表現」を、また、海外との連携として年 2 回の韓国研修を行ってきた。また、平成 25 年度では、事業年数が 2 年間の SSH 科学技術人材育成重点枠事業として、韓国、タイ、ドイツ、チェコの 4 ヶ国との相互交流事業を行い、英語によるコミュニケーション能力の育成とともに、生徒が主体的に活動するグローバルな諸問題を解決するためのカリキュラムを計画、実施し、これらの評価を行っている。

今後は、こうした取り組みの内容を精査し、更に充実させると共に、より多くの生徒が参加できるような方法を工夫する必要がある。現在 SSH 事業、また、学校案内を英語で作成しているが、さらにインターネット等の多様なメディア媒体を通してこうした取り組みを提示、普及させることが求められる。学校全体の人的、物的な組織体制を、より一層密接に結びつけ、例えば、英語による授業を実施したり、生徒に示す掲示物を英語で表記するなど、できるだけ本校が進める国際性の育成の理念に基づいた具体的取り組みを進める必要がある。

(2) 附属東雲中学校

本校は、平成 13 年よりアメリカ合衆国ノースカロライナ州の Exploris Middle School, 平成 19 年よりカリフォルニア州の Odyssey School, 平成 22 年よりインドネシアの MENDOYO 第 4 中学校と国際交流を行っている。毎年、これら 3 校から生徒数名が本校を訪れ、授業

交流や文化交流、ホームステイなどの交流活動を行っている。加えて、Exploris Middle School が来校の際は国際ミーティング、Odyssey School が来校の際はリアル熟議、MENDOYO 第 4 中学校が来校の際はフラワーフェスティバルパレードを行い、特色ある国際交流を展開している。また、毎年 8 月には本校からも 6～8 名の生徒が Exploris Middle School や Odyssey School を訪問し、日米文化の共通・相違点を学んでいる。

今回のシンガポール視察では、Temasek Junior College が英語力や学力の育成だけでなく、リーダーシップ育成のための教育プログラムを実践していたことを学んだ。今後は、本校においても上記の国際交流を主軸とした英語教育の更なる充実に加え、グローバル社会のリーダー育成という視点にも重点を置く必要があると考える。本年度より、東雲中学校（Shinonome）の修学旅行は、自らの使命（Mission）を自覚した上で、問題発見したことを現地で探求（Research）し、その過程において見通しをもった行動（Action）をとることが要求される旅行（Tour）—SMART—へと進化した。これは、問題を発見し、その解決に向けて見通しをもち、仲間と協力してミッションを遂行していく力の育成を図ったものである。従って、今年度から始まった SMART の取り組みをグローバル社会のリーダー育成の主軸として位置付けていきたいと考えている。最終的には、国際交流を主軸とした英語教育と、SMART を主軸としたグローバル社会のリーダー育成を 2 本の柱とし、グローバル化に対応した東雲中学校の特色ある教育を展開していきたいと考えている。

（3）附属三原中学校

本校は、昨年度より「社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発」を研究開発課題とした文部科学省研究開発学校の指定を受け、新領域「希望（のぞみ）」を中心とした幼小中一貫のカリキュラム開発を行っている。この中で「国際」をテーマとし、多文化理解や他国の方々とのコミュニケーションを通して「なりたい自分」を考えていけるような 12 年間の系統性のある「希望（のぞみ）」単元を開発・実践し、社会のグローバル化に対応するための資質や能力、態度・価値観を育成することとしている。中学校における単元は 7 年生「平和公園での外国人の方へのインタビュー」9 年生「アメリカの先生方に平和公園を案内するピース・エデュケーション」で、生徒にとって大変有意義な英語によるコミュニケーションの実践の場となっている。

一方、教科等では、社会・英語・美術・特別活動等において、留学生・海外の中学生・沖縄駐留米軍家族等との交流を通し、英語によるコミュニケーションや異文化理解を図りながら教科等のねらいにせまる単元（題材）を開発し、継続実施しているものもある。

今回のシンガポール教育視察を経て、今後はこれらの取り組みの成果や課題を踏まえ、改善を図ったり、教科や領域・行事等との関連を図ったりすることで、生徒が学びをつなげながら英語によるコミュニケーションを実践し、意欲的にグローバル化に対応する力をつけていけるのではないかと考えた。具体的には、海外からの視察団の学校訪問の際は、参観していただくにとどめず、生徒が交流を通じた学習ができるよう計画していく。また、日々の授業においても、人名、専門用語等カタカナ表記のものを英語で表記したり、校内掲示物に英語訳を添付したり、英語での校内放送を定期的実施したりするなど、生徒が

日常的に英語に触れる場を増やすことが考えられる。また、各教科等において、我が国の伝統・文化に関する学習をする際、実践の場や伝える相手を設定して、学習の成果を短い英文で説明できるようにするなどの単元（題材）開発を進めていきたい。なお、新領域「希望（のぞみ）」は担任・副担任が指導しているため、「国際」単元における生徒の実践に備えた英語のスキル習得の支援体制がとりにくいなどの課題もある。今後、グローバル化に対応する教育効果が上がるよう、外部講師の招聘等の可能性についても検討していく必要がある。

コメント

コメント（１）

教育学研究科 丸山 恭司

【本年度の取り組みの背景】

広島大学附属学校園は第二期中期計画を次のように定めている。

「大学との連携により、地域・日本・世界をリードする人材の育成を目指す初等中等教育カリキュラムの研究開発を行う。」

この計画を実行するために「広島大学附属学校園研究推進委員会」は平成 23 年に発足した。広島大学には 11 の附属学校園があり、これらが 7 つのユニットをつくって、それぞれ教育・研究活動を進めている。研究推進委員会は、これらの附属学校園と大学が、また、附属学校園同士が連携して先進的なカリキュラムの研究開発が行えるシステムの構築を目指している。

今年度の研究推進委員会の取り組みは、昨年度に引き続き「グローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発」であった。昨年度は、グローバル人材に求められる資質・能力を諸議論から抽出して整理し、自校園の取り組みがそうした資質・能力のうちの何を育てようとするものであるのかを考察した。今年度は、得られた資質能力分類表に基づき、自校園の取り組みを全体像のなかで特徴づけるとともに、今後の展望をもつことが目指された。

【成果の分析と評価】

グローバル人材に求められる資質・能力を分類・整理した同一基準に基づいて、11 学校園の取り組みそれぞれを展望できたことは画期的であった。一方、本年度の委員会活動がどこまでカリキュラムの研究開発システムを構築するに資するものであったかは議論の余地がある。

各附属学校園の取り組みは多様であった。それらは次の仕方で分類することができる。①特定教科活動中心型、②日常活動中心型、③プロジェクト中心型。さらにこれらは、それぞれ、a) 既存の枠組み内での工夫、あるいは、b) 新規の試み、のどちらかとして特徴づけることができる。

7 つのユニットの取り組みはどれもよく考えられていて優れた実践であった。一方、体系的カリキュラムのなかでどのような役割を担う活動であるのかが明確でないと、付け焼き刃的に行き当たりばつりの取り組みに見えてしまおう。各学校園が行うべきカリキュラム研究開発としては、資質・能力を特定することから、さらに、取り組みの体系性へと視点を移していくことが望まれよう。

では、本委員会自体の活動はどのように評価されるだろうか。委員会は 11 学校園が基準を共有して自校園の取り組みを整理し直す機会を提供した。この点で、委員会は

カリキュラム研究開発の場になっていると言えるだろう。今後は、いかに研究開発システムを構築していくのかを研究の対象とすることが求められよう。

【提言】

今後、大学と連携したカリキュラム研究開発システムを構築するにあたって、次の二点を提言したい。

1. 大学との様々な連携のあり方を模索する。たとえば、①留学生や大学教員という人的リソースの活用、②教育学研究科のグローバル化対応との連携、等が考えられる。

すでに、留学生に協力を求めた取り組みがある。留学生にとっても貴重な経験になっているはずである。また、教育学研究科は先に「広島大学における初等中等教育段階でのグローバル化対応教育を見据えた教員養成・人材養成について」（平成 25 年度教育学研究科ビジョンと戦略提案ワーキング・グループ答申）をとりまとめている。この答申では、学士課程における副専攻プログラムとして「グローバルマインドを育成できる教員の養成プログラム」が提案されている。また、博士課程前期では「グローバルな社会で指導できる教員養成プログラム」、博士課程後期では「グローバルな研究者の育成プログラム」と「グローバルな教師教育者の育成プログラム」が提案されている。附属学校園との連携は、留学生や大学（院）教育にとって有意義なものとなりうる。そうした連携がどのように実現可能であるか検討されるべきである。

2. 附属学校園間の連携のあり方を模索する。たとえば、①他校園の報告への自校園からの応答、②他校園の取り組みへの参加、等である。

自校園の取り組みを報告書にまとめるだけでなく、他校園の取り組みから自校園は何を学ぶか、他校園にどのような助言ができるのか、今後、他校園とどのような協働がありうるのか、に答えることによって、連携が始まる。また、附属学校園間で、プログラム評価法を開発・共有し、ピアレビューアとして他校園教員にプログラムに参加してもらうことも可能であろう。

コメント（２）

グローバル化社会における附属学校園の使命 —グローバル教育によるグローバル人材の育成—

附属学校再編計画室長 竹田 敏彦

１．はじめに

少子化・高齢化の進展，グローバル化の進展，雇用環境の変容，地域社会・家族の変容，格差の再生産・固定化，地球規模の課題（環境問題，食料・エネルギー問題，民族・宗教紛争等）への対応など，持続可能な社会の構築に向けて取り組む必要のある課題が山積している。とりわけ，グローバル化の進展に伴う我が国の国際的な存在感の低下は，我が国を取り巻く危機的状況の一つと捉えられる。

このような中，日本政府は，平成 25 年 6 月 14 日付の閣議決定により，第 2 期教育振興基本計画（計画期間：平成 25 年度～平成 29 年度）を公表し，次の 4 つの基本的方向性を示した。

- ①社会を生き抜く力（多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力）の養成
- ②未来への飛躍を実現する人材（変化や新たな価値を主導・創造し，社会の各分野を牽引していく人材）の養成
- ③学びのセーフティネット（誰もがアクセスできる多様な学習機会）の構築
- ④絆づくりと活力あるコミュニティ（社会が人を育み，人が社会をつくる好循環）の形成

グローバル人材の育成は，上記①～④のいずれにも関係する重要な施策であり，グローバルを冠する人材育成であることを念頭に据えて取り組む必要がある。

２．グローバル化社会とグローバル人材

(1) グローバル化社会

社会・経済のグローバル化の進展，技術革新・情報化等に伴う産業構造の変化など，社会が急速に変化している。「グローバル化」とは，今日，様々な場面で多義的に用いられるが，総じて，次のように理解される。（*1）

グローバル化は，情報通信・交通手段等との飛躍的な技術革新を背景として，政治・経済・社会等あらゆる分野で「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」が国境を越えて高速移動し，金融や物流の市場のみならず人口・環境・エネルギー・公衆衛生等の諸課題への対応に至るまで，全地球的規模で捉えることが不可欠となった時代状況を指す。

「グローバル化社会」とは、上記のような「グローバル化」が進展した社会ということになるだろうか。その定義は定まっていない。

(2) グローバル人材

我が国がこれからのグローバル化した世界の経済・社会の中にあって育成・活用する人材を「グローバル人材」と定義することとする。その概念には次のような要素が含まれる。(*2)

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

このほか、「グローバル人材」に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質として、次のことが挙げられる。(*3)

○幅広い教養と深い専門性 ○課題発見・解決能力 ○チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ ○公共性・倫理観 ○メディア・リテラシー 等
--

3. グローバル人材育成のための教育改革

知識基盤社会、グローバル化社会、多文化社会が現実味を増している現在、学校教育において幼児・児童・生徒のグローバルな視野を育み、社会変化に即応した新しい能力を育成することが急務である。

(1) グローバル教育の重要性

教育基本法は、教育の目的が「人格の完成」にあることを明示している。そうであるならば、学校における教育活動の目的が自律した学習者の育成、すなわち社会の形成者として生涯にわたって学び続ける基盤づくりや、そのことを助成する「グローバル教育」が重要であろう。

「グローバル教育」とは、「グローバル化社会における複雑な諸課題をひも解きながら自己の生き方を見つめ、探究心，リフレクション能力，思考力，判断力，表現力，課題解決能力などを鍛え，多様な背景を持つ他者を尊重しながらコミュニケーションを図ろうとする教育」(*4)であり，「ローカル，ナショナル，グローバルというレベルを問わず，地球的視野から，様々な問題を捉え，多角的にものを考え，人権や文化的多様性の尊重，平和，地球環境の持続可能性を土台とし，グローバル社会に生きる市民としての自覚と責任をもって課題解決にあたらうとするグローバルシティズン(地球市民)の育成を目指す教育」(*5)である。

学校において「グローバル教育」の実践を深化させるには，石森(2013)が指摘する

ように、次のことが必要不可欠である。（*6）

①グローバルシティズンの資質を問い直し、その涵養を目指す教育的枠組みを明確にする。

②実践上の課題を精査し、授業の枠組みの構築に役立てる。

③「グローバル教育」を学校教育の中に定着させ有意義に展開していくため、授業設計と評価の相互関係や機能を整備し、アセスメントの視座から授業のあり方を根本的に問い直す。

ここにいう「グローバル教育」は、上記のグローバル人材育成推進会議が明らかにした「グローバル人材育成戦略」（平成24年6月4日付）にいう要素Ⅰ・Ⅱ・Ⅲや、「グローバル人材に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質」と軌を一にするものである。

（2）グローバル教育実践の現況と課題—広島大学附属学校園の取組

「グローバル教育」はクロスカリキュラム的な要素を多分に含むことから、各教科等（各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動、〈外国語活動〉）の有機的な関連を図ったホールスクールアプローチ（学校全体で展開する方法）によって実践することが望まれる。

しかし、「グローバル教育」の実践は、その多くが教育課程において明確に位置づけられていないのが現状である。石森（2013）は、「多くのグローバル教育は『投げ込み教材』という言葉に象徴されるように、その目標構造や評価を視野に入れた系統的な実施計画に基づいておらず、既存の教科内での各授業の隙間の中で断片的に実践されるのが主流である」と指摘している。（*7）

それでは、広島大学附属学校園の教育実践はどのようなのか。本書（平成25年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書「社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅱ—大学と連携した研究開発システムの構築に向けて—」）にある各附属学校園の取組の中から検証してみたい。どの附属学校園も「グローバル教育」の実践を教育課程に位置づけ、組織的・計画的・系統的に取り組んでいることがよくわかる。

【広島大学附属幼稚園の研究の特色】

当園は、「グローバル人材育成推進会議の審議のまとめ」（2012年6月4日）で明らかにされた「グローバル人材」の概念の要素（要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性・チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ）の基礎を培うものとして「要素0」を位置づけ、その具体的な内容として、次の5点を挙げている。

- ①自己肯定感・他者への信頼感の獲得
- ②好奇心や探究心の育成
- ③豊かな感動体験による感性の涵養

④体力・身のこなしの向上

⑤主体性・積極性、チャレンジ精神の育成

当園は、幼児期においてこの5点を育むことを、グローバル人材を育成する重要な位置づけとし、これらを身につけるための保育実践カリキュラムを開発している。森という環境で自然と触れ合う原体験を保障しながら十分に遊び込むこと(教育課程の中に「挑戦的な遊び」を位置づけ、3年間を見通して実践してきたこと)がその特色ある取組であり、その成果は確かなものとなっている。

【広島大学附属小学校の研究の特色】

当校は、上記「グローバル人材」の概念の要素Ⅰ「語学力・コミュニケーション能力」の向上のため、平成25年度から第1学年～第6学年において英語を教科として位置づけ、6年間の一貫したカリキュラム開発を試みている。今年度は、英語科創設1年目として、カリキュラムの作成、実践、評価方法の開発等を行いその成果を上げている。

また、当校は、上記「グローバル人材」の概念の要素Ⅲ「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」のために、理科学習と異文化理解の関連について「科学的知識の確実な獲得(内容知という側面)」「異文化を理解しようとする際の科学的アプローチの獲得(方法知という側面)」の研究を進めている。例えば、第5学年「電磁石」の実践に見られる「予想した理由等について描画法を用いて自分の考えを表現すること」や、「実験結果の記述を根拠に描画法を用いてわかったことをまとめること」など、興味深い取組が見られる。

【広島大学附属中・高等学校の研究の特色】

当校がこれまで組織的・継続的に取り組んで来たグローバル人材育成のための教育プログラム(グローバル人材育成の3本柱)は、「①ユネスコスクールへの参加、②SSH事業における海外研修、③国際性の育成」である。そのためのカリキュラム開発としては、幅広い視野の育成を目指した取組の観点からの「①SSH事業(通常枠)に関する取組、②ESDに関する国内外の取組、③SSH事業(特別枠)における海外校との連携事業」や、英語によるコミュニケーション能力育成のための取組の観点からの学校設定科目「英語表現」のカリキュラム開発(「プレゼンテーション特別講義」「英語合宿」)がある。

また、平成22年から本格的に実施している国際交流事業(韓国研修)の実践を通して、グローバル人材に求められる資質・能力を4つのカテゴリー「①幅広い視野と見識、②異文化に柔軟に対応する力、③他者と共生し他者のよさを引き出す力、④英語によるコミュニケーション能力」とそれぞれに対応した項目に整理している。

これらが上記「グローバル人材」の概念に対応していることはいうまでもない。

【広島大学附属東雲小学校の研究の特色】

当校は、グローバル化の進む社会において、様々な国々や人々が共生関係を築く上

で基盤となる「協調性・柔軟性」に着目し、これをグローバル人材に求められる資質・能力の柱として捉えている。これは、上記「グローバル人材」の概念の要素Ⅱに含まれるものであり、より焦点化を図った取組といえる。

当校はこの取組の中で、集団活動に関するカリキュラムの見直しを図ることから、カリキュラムにおける集団活動の内容が児童の共生関係を構築する上で有効かどうかを吟味し検討している。次年度は、学級内での活動を通して、児童間の共生関係を形成できるような取組を推進(特に授業に着目)することとしており、含蓄に富んでいる。

【広島大学附属東雲中学校の研究の特色】

当校の教育実践は、上記「グローバル人材」の概念の要素Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを網羅したものになっている。特に、グローバル人材の育成に関して取り組んでいる「国際交流活動」(アメリカ合衆国やインドネシアでの授業交流や文化交流、ホームステイのみならず、「リアル熟議」「国際ミーティング」などのグローバルな問題を考える教育活動)やプロジェクトマネジメント能力の育成が期待できる「SMART(修学旅行)」は、当校の取組の重要な位置づけとなっている。

当校は、今後、今年度構築した「国際交流を主軸とした要素Ⅰ・要素Ⅲの育成」と、「SMARTを主軸とした要素Ⅱの育成」を2本柱とし、グローバル化に対応した特色ある教育を展開したいとしている。(上記「グローバル人材」の概念の要素Ⅱ「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」の育成のさらなる充実を図ろうとしている。)カリキュラムの構築に主眼を置いてきた今年度の取組を、来年度以降の試行によって、生徒にどのような能力がついたのかを検証する取組が期待される。

【広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校の研究の特色】

当学校園は、昨年度から文部科学省研究開発校の指定を受け、新領域「希望(のぞみ)」を中心とした幼小中一貫のカリキュラム開発を行い、新たなキャリア教育の在り方を模索している。この新領域「希望(のぞみ)」は、当学校園がこれまでの「国際コミュニケーション科」の研究で明らかにしたグローバル化に求められる資質・能力とその育成のための取組を基盤とした単元を、「学習領域『つながり』から」に位置づけたものである。12年間の系統性のある「希望(のぞみ)」の単元の開発・実践を通して、グローバル化社会に対応するための資質・能力及び態度・価値観を育成しようとするものである。

とりわけ、「グローバル人材育成」の要素と新領域「希望(のぞみ)」及び教科等との関連を意図した当学校園の実践の表2は、「希望(のぞみ)」で育成する基礎的・汎用的能力、態度・価値観及びその他の教科等で育成する資質・能力とグローバル人材の育成の関連がよくわかるものになっている。

今後の取組として、当学校園が課題として提示した「各教科等横断的な学習を視野に入れたカリキュラム開発」「グローバル化に対応した能力・態度・価値観を育むため

の幼小中一貫のカリキュラムの開発・実践」「より一層系統性をもたせ、グローバルの視点を取り入れた各教科等の単元開発」「子どもたちが学びをつなげた英語によるコミュニケーション活動」が期待される。

【広島大学附属福山中・高等学校の研究の特色】

当校は、文部科学省の研究開発学校の指定校として、持続可能な社会の構築に向けての基盤となるクリティカルシンキングを育成するため、新教科「現代への視座」を柱にした中学校・高等学校の系統的な教育課程を開発してきた。その柱となるESD(Education for Sustainable development)の理念はグローバル人材育成の上で欠くことができないものである。

当校は、「ESD で求められる能力や態度」を教育課程の中に焦点化している。また、様々な教材や指導方法の開発を進め、「表現力」や「論理的思考力」「創造力」にも焦点を当てたカリキュラムを構築している。当校の特色ある教育課程は、研究開発学校による新教科「現代への視座」を柱に、「総合的な学習の時間」で問題解決に向けた生徒の活動を重視する展開を行うとともに、既存教科で「発展的単元」を設定して、ねらいとする能力・態度の伸長を図るカリキュラムを形成しているところにある。持続可能な社会の構築に関連したテーマについては、例えば「エネルギー教育」「環境教育」「国際理解教育」などがあり、教科間の連携を意識して、「A 資源・エネルギー」「B 環境・防災」「C 安全・健康」「D 地域・文化」「E 国際化・グローバル化」の5つを設定し、分類・整理している。また、「持続可能な社会づくりに関わる課題」を見いだすための構成要素を、「Ⅰ 多様性」「Ⅱ 相互性」「Ⅲ 有限性」「Ⅳ 公平性」「Ⅴ 連携性」「Ⅵ 責任性」に置き、さらに、「持続可能な社会の構築」に向けたカリキュラム構成のねらいとする能力・態度を、「批判的」「未来」「多面的・総合的」「コミュニケーション」「協力」「つながり」「参加」として整理している。これらの「テーマ」「構成概念」「ねらいとする能力・態度」が新教科「現代への視座」(総合的な学習)においてどう機能しているのかを明らかにしたものが当校の実践の表1である。学年進行に伴い教材がどのように扱われてつながっているのか、その際、能力・態度がどのように深まっていくのかなどを整理し、教師間で共有し合うことをねらっている。

これらの実践の成果は確かなものと思われるが、当校はさらに、教科を越えた新たな教材開発などの内容面での深化につなげていきたいとして、さらなる高みを目指している。

(3) グローバル人材力強化のための教育改革プラン

文部科学省は、平成25年4月23日に、「人材力強化のための教育改革プラン」を発表した。そのイメージは図1のとおりである。

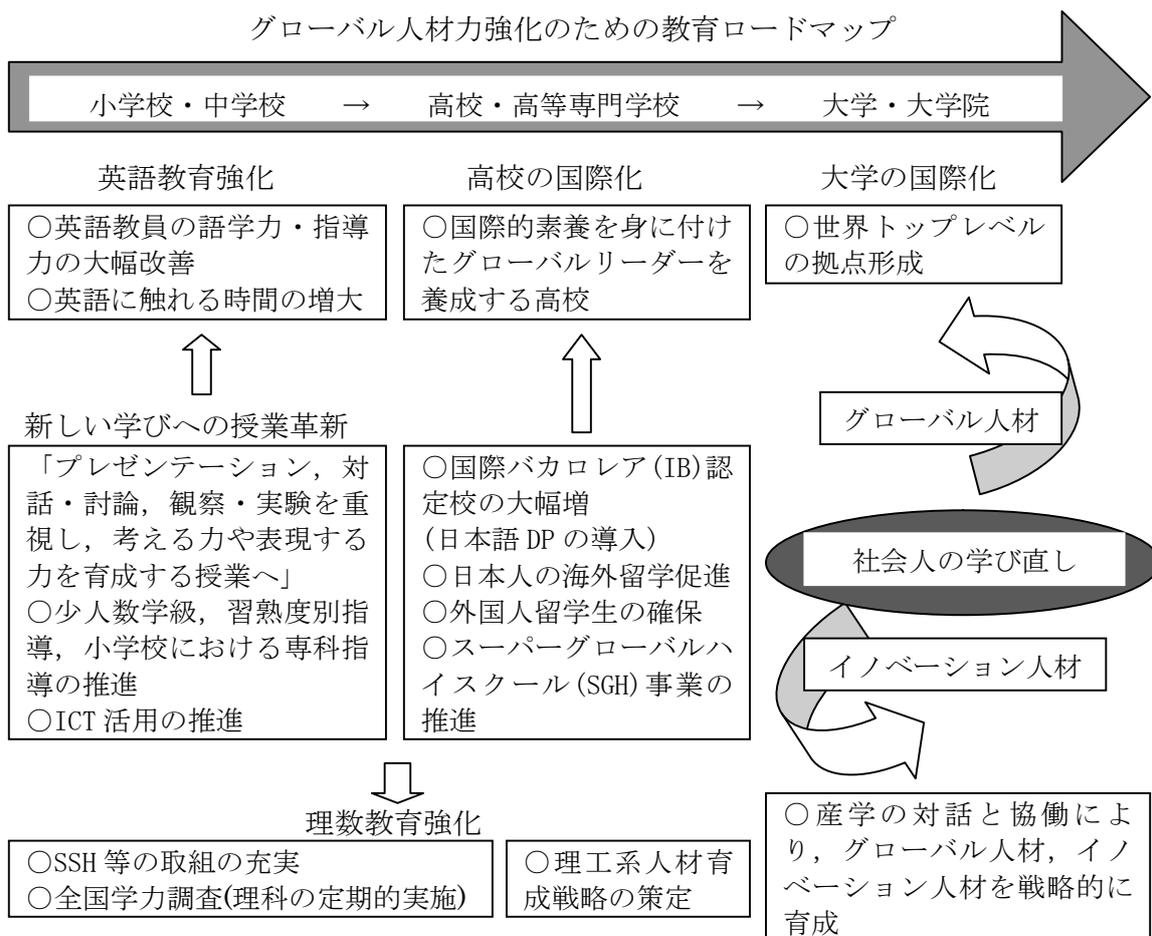


図1 グローバル人材力強化のための教育改革プランに係るイメージ図

グローバル人材力強化のポイントは、小・中学校段階の英語教育強化、高校の国際化、大学の国際化である。その具体は、新しい学びへの授業革新(プレゼンテーション、対話・討論等による思考力や表現力の育成)、国際バカロレア (IB) 認定校の大幅増やSGH 事業等の推進によるグローバルリーダーの育成、SSH 事業等の推進による理数教育強化、世界トップレベルの大学を拠点としたグローバル人材やイノベーション人材の育成にある。

(4) グローバル教育が育む学力と「生きる力」

学力を論じるとき、「課題(問題)解決」「活用」「創造性」「コミュニケーション」「批判的思考」等のキーワードが並ぶのが一般的である。現行の学習指導要領(2009年改訂版)に継承された「生きる力」には、学力の3要素(①基礎的・基本的な知識・技能の習得, ②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力, ③学習意欲)が述べられている。

また、学力論議の際、「人間力」というキーワードもよく使用される。一般に、「人間力」とは、「豊かな人間性」「対人関係能力」「コミュニケーション能力」等を含めた

総合的な力を意味している。

このように、グローバルを冠した学力観には、「人間力」を含めた広義の学力観が求められる。多田(2008)はグローバル教育の視座から、人間力に象徴されるような広義の学力観を根幹とした、グローバル時代に育むべき学力として、表1のような「グローバルシティズンコンピテンス」「多文化リテラシー」を提言している。(*8)

表1 グローバル時代に育むべき学力

グローバルシティズンコンピテンス	多文化リテラシー
○生命の尊厳を重視し、地球生命系のさまざまなつながりを認識する力 ○広い視野、複眼的思考をもち、異なる文化をもつ人々を認め、理解しようとする力 ○自己をもちつつ、多様な他者と良好な関係を作っていける力 ○さまざまな変化に対応でき、その過程で自己成長できる力 ○地域や地域社会の問題に当事者意識をもち、その解決に主体的に参加し協働できる力	多文化共生社会に独り立ちできるために必要な技能。単なる操作能力をこえ、創造的な人間関係を形成でき、希望ある未来を構築していける実学的素養としての技能。

(5) 世界トップレベルの学力の強化

日本の生徒(15歳)及び成人(16歳～65歳までの男女)の学力が高いレベルにあることが、国際的な学力調査(PISA, PIAAC)の結果から明らかになった。これは、日本の教育が狭義の学力観において成果を上げてきた表れである。その詳細は次のとおりである。

①PISA:OECD 生徒の学習到達度調査<2012年調査>

- 対象—高校1年生(15歳)
 - OECD加盟国数—34, 全参加国・地域数—65
 - 公表年月日・機関—平成25年12月3日・国立教育政策研究所(文部科学省)
 - 結果
 - 読解力：1位(538点)/34<加盟国>, 4位/65<全参加国・地域>(496点)
 - 数学的リテラシー：2位(536点)/34<加盟国>, 7位/65<全参加国・地域>(494点)
 - 科学的リテラシー：1位(547点)/34<加盟国>, 4位/65<全参加国・地域>(501点)
- *2000年以降の調査の中で、2012年調査が過去最高。下位層の割合も減少。学習意欲も改善傾向。文部科学省はさらなる学力向上に向けたグローバルJr.の育成のための教育改革を推進している。

②PIAAC(ピアック)：OECD国際成人力調査<2012年調査>

- 対象—16歳～65歳までの男女
- OECD加盟国・地域数—24
- 公表年月日・機関—平成25年10月8日・国立教育政策研究所(文部科学省)

○結果

読解力：1位(296点)/34<加盟国>(273点)，500点満点

数的思考力：1位(288点)/34<加盟国>(269点)，500点満点

IT活用能力：1位(294点)/34<加盟国>(283点)，500点満点

*日本は、パソコンの基本的な操作ができないなどの理由で紙調査を受けた者の割合がOECD平均の24.4%の約1.5倍の36.8%に上った。コンピュータ調査を受けなかった者を母数に含めた割合でみると、OECD平均並み(10位)になる。

○成人の学力(読解力，数的思考力，IT活用能力)は，学校教育終了後も向上し，30歳前後でピークを迎えた後，徐々に低下していく傾向がある。しかし，日本は，ほとんどの年齢で，OECD平均を上回り，加齢にもかかわらず，高い水準を維持している。その一例(成人の読解力と年齢の関係)が図2である。この傾向は，「数的思考力」「IT活用能力」においても同様である。

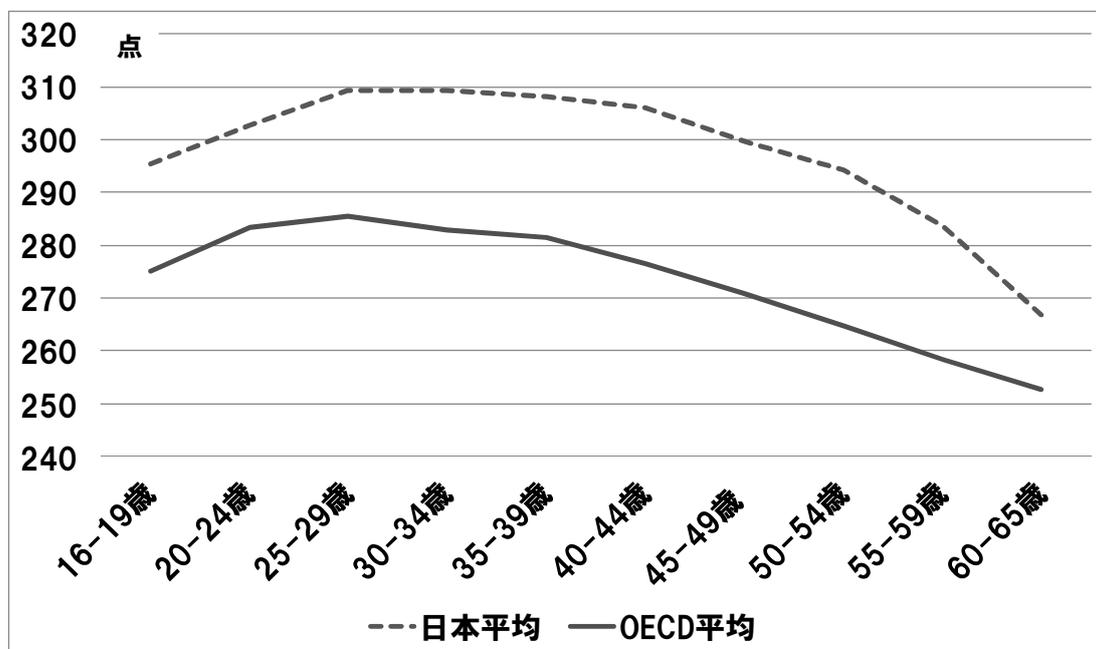


図2 成人の読解力と年齢の関係—OECD平均と日本の比較：16～65歳—

③グローバル Jr. の育成のための具体的施策

文部科学省は、「人材力強化のための教育改革プラン」(平成25年4月23日付)の中で，グローバル Jr. の育成のための具体的施策について，次のことを明らかにしている。その目標値はすこぶる高い。まず，附属学校園においてこの目標値を早い段階で達成し，そのノウハウを公立学校に還元したいものである。

○生徒の英語力強化

☆中卒時の英検3級程度以上→50%以上

☆高卒時の英検2級・準1級，TOEFL iBT57点/120点程度以上(平成25年12月)

13日付)→50%以上

○英語教員の英語力強化

☆英検準1級, TOEFL iBT80点/120点, TOEIC730点/990点程度以上→中学校50%以上, 高等学校75%以上

○高校生留学者数の倍増→6,000人以上, 研修旅行生数5.4万人以上

○国際バカロレア認定校の大幅増→2018年までに200校

(6) グローバル化に対応した英語教育改革

文部科学省は, 平成25年12月13日に, グローバル化に対応した英語教育改革実施計画を明らかにした。その主たる施策は次のとおりである。

① グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方

○小学校中学年: 活動型一週1~2コマ程度

☆コミュニケーション能力の素地を養う。

☆学級担任が中心になって指導する。

○小学校高学年: 教科型一週3コマ程度

☆初歩的な英語の運用能力を養う。

☆英語指導力を備えた学級担任に加えて専科教員を積極的に活用する。

○中学校

☆身近な話題についての理解や簡単な情報交換, 表現ができる能力を養う。

☆授業を英語で行うことを基本とする。

○高等学校

☆英語話者とある程度流暢にやり取りができる能力を養う。

☆授業を英語で行うとともに, 言語活動の高度化(発表, 討論, 交渉等)を図る。

○小・中・高等学校を通じた一貫した学習到達目標の設定

☆英語によるコミュニケーション能力を確実に養う。

② 新たな英語教育の在り方を実現のための体制整備—平成26年度から強力に推進

○小学校における指導体制強化

☆英語教育推進リーダーの加配措置・養成研修を実施する。

☆専科教員の指導力の向上を図る。

☆学級担任の英語指導力の向上を図る。

○中・高等学校における指導体制強化

☆英語教員推進リーダーを養成する。

☆英語科教員の指導力の向上を図る。

○外部人材の活用促進

☆外国語指導助手(ALT)の配置を拡大する。

☆地域人材等の活用を促進する。

○指導用教材の開発

☆先行実施のための教材を整備する。

☆モジュール指導用 ICT 教材を開発・整備する。

(7) 日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実

文部科学省は、東京でオリンピック・パラリンピックが開催される 2020 年を一つのターゲットとして、我が国の歴史、伝統文化、国語に関する教育を推進するとしている。そのねらいは、グローバル化が進む中、国際社会に生きる日本人としての自覚を育むため、日本人としてのアイデンティティを育成するための教育の在り方について検討し、その成果を次期学習指導要領改訂に反映させることにある。その詳細は次のとおりである。

①学習指導要領に基づく取組の推進

○国語教育

☆国語科の授業時数を増加する。(小学校で計 84 時間増，中学校で計 35 時間増)

☆古典に関する指導を重視する。(小学校の低・中学年で古典の内容を新設，中学校の各学年で古典の内容を明確化)

☆文学教材の充実を図る。(中学校で近代以降の代表的な作家の作品を取り上げることを規定)

☆言語活動の充実を図る。(小中高等学校を通じて、国語科をはじめ全教科等で説明，論述，討論等の言語活動を充実)

○伝統文化・歴史教育

☆伝統文化に関する学習内容を充実させる。(そろばん，和装，和楽器，美術文化等の充実，武道の必修化)

☆歴史学習を充実させる。(小学校：我が国の文化遺産の学習を新設，中学校：授業時数増—130 時間<25 時間増>，中・高等学校：近現代史の重視)

②道徳教育の改善・充実

○「心のノート」の全面改訂—平成 26 年度から使用

☆先人等の名言，偉人，伝統文化等に関する読み物などを充実させる。

☆「礼」をはじめ伝統文化に根ざす内容を充実させる。

○道徳教育の抜本的改善・充実

☆道徳教育地域支援事業等で伝統文化も重視する。

○道徳の新たな枠組みによる教科化

☆道徳に関する学習指導要領の見直し等について、「道徳教育の充実に関する懇談会」の報告を踏まえて，中教審で審議する。

4. おわりに

学校現場ではグローバル教育の重要性が認識されつつも、それが教育実践に結実しにくい現実がある。とりわけ附属学校園は、その特質として広島大学との連携のパイプを太くすることから、研究業務や教育実習業務をはじめ様々な業務に追われている。その結果、グローバル教育のように、成果が見えるには時間を要する豊かな教育的営みを展開することが難しい状況にある。

しかし、広島大学附属学校園は、このような厳しい状況の中でも、グローバル教育の意義を浸透させ、学校教育の中にそれを安定的に位置づけようと努力している。その成果が、本書(平成 25 年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書)にある各学校園の取組として結実している。そこには広義の学力観を読み取ることができる。

今後は、石森(2013)が指摘するように、「グローバル教育の授業設計とアセスメントの枠組みを構築する」(上掲書*6)とともに、グローバル教育によって導かれる幼児・児童・生徒の学びを詳細に把握・検証することを通して、「実践理論の行動化」を図ることが求められる。そのことが附属学校園の使命であろう。

文献

- (*1) (*2) (*3) グローバル人材育成推進会議「グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」平成 24 年 6 月 4 日
- (*4) 石森広美『グローバル教育の授業設計とアセスメント』学事出版 2013 p. 4
- (*5) 石森広美『グローバル教育の授業設計とアセスメント』学事出版 2013 p. 14
- (*6) 石森広美『グローバル教育の授業設計とアセスメント』学事出版 2013 pp. 14-15
- (*7) 石森広美『グローバル教育の授業設計とアセスメント』学事出版 2013 p. 19
- (*8) 多田孝志「グローバル時代に対応した学力育成の提言」『教職課程』(Vol. 34 No. 5) 協同出版 2008 pp. 71-72

【おわりに】

グローバル化に対応した人材育成に関する、広島大学附属の11 学校園の研究成果を今年もまとめることができた。社会の「グローバル化」への「対応」はこの数年来の国家的な課題となっており、初等・中等・高等教育のそれぞれのレベルでの取り組みが、全国的に見られるようになってきたが、本学附属学校園での取り組みは、それらのなかでもいち早い取り組みであったと言えるだろう。

本年度の研究は、昨年度の報告書である『社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発』の研究成果を踏まえて、それを前進させるものである。今年度の研究の出発点は、「グローバル化に対応した人材育成」というときの、その「人材」のそなえる力をどのように想定していけばよいのかという問題であった。これは、教育の目標の問題でもあり、また、教育のめざす学力の問題であり、そして、取り組みのなかで何を育て、生み出すことができたのかという、評価の問題でもある。どの学校園においても今年度の研究は、「グローバル化」の理念を議論するフェーズをはるか踏み越えて、そのような具体的な教育のありようを探るフェーズに深く分け入っている。

本報告書をお読みいただくと理解していただけることであるが、それぞれの学校園が求める社会の「グローバル化」に対応する力には、各学校園に共通するものと各学校園に独自のものがある。

「グローバル人材育成推進会議」の審議まとめ（2012年6月4日）によれば「グローバル人材」にもとめられることとして、「語学力・コミュニケーション能力」「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」「異文化に対する理解と日本人のアイデンティティ」の、大きく三つの要素が挙げられている。これらの諸要素を意識した教育の姿は本報告書の各章に共通してあらわれるものである。しかし、このそれぞれの要素を人が成長の過程で身につけていくドラマは、おいそれと要約することのできるものではない。3歳から18歳まで、15年間のどこでどのような力を伸ばしていくことが必要とされているのか、ということを探っていくとした時、また、それぞれの学校園の置かれている社会・文化状況のなかで「グローバル化に対応する人材育成」に取り組んでいくとする時、そこに学校園ならではの取り組みがあらわれる。本報告書に表現されていることの大半はその、独自の取り組みの豊かさである。

読みかけの本のなかで偶々出会った次のような見解は、これからの「グローバル人材育成」にとって重要なことであると考えられる。

他の霊長類は、同じように共同意図・共同注意・相互に想定される協力的動機・コミュニケーション上の慣習を用いてコミュニケーションを構造化することはない。単に、他者の個体レベルの目標・知覚・行動を直接予想したり操ったりしようとするに過ぎ

ない。(中略＝山元)人間の乳幼児は言葉を習得する前から、身振りコミュニケーションを協力的に構造化し始める。しかも、他の協調活動に見られる、共有志向性のより一般的なスキルが出現すると、発達上は同時期にである。(マイケル・トマセロ、松井智子・岩田彩志訳、『コミュニケーションの紀元を探る』勁草書房、2013年、99ページ)

トマセロが言うような、「他の霊長類」には見られない、人間の「協力」的特質を、発達・成長の途上で、絶やすのではなくて、広げ深めていく方向での取り組みを継続していくことが、「グローバル人材」としてのマインドをつくっていくということなのではないだろうか。そのように考えてこそ、「競争」ではなく「共創」の「グローバル社会」を想定しうるはずである。

本報告書もまた、11 学校園の先生方の「協力」の成果である。今後の教育の取り組みのために、11 学校園が共通して取り組み考えたことと、各学校園独自の取り組みとのいずれについても、忌憚のないご意見を賜ることができれば幸いである。

広島大学附属学校園研究推進委員会 委員長 山元 隆春

「広島大学附属学校園研究推進委員会」設置要項

（目的及び設置）

第1 広島大学附属学校園の中期計画である「大学との連携により、地域・日本・世界をリードする人材の育成を目指す初等中等教育カリキュラムの研究開発を行う。」の実施にあたって各年度計画に関連する研究開発を推進するため、広島大学附属学校園研究推進委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（委員会）

第2 委員会は、次に掲げる委員で組織する。

- (1) 副理事（附属学校担当）
- (2) 附属学校園教員のうちから各学校園長が指名する者
- (3) 教育学研究科の教授又は准教授のうちから理事（教育担当）が指名する者若干人
- (4) 教育・国際室附属学校支援グループ主査（企画担当）
- (5) その他理事（教育担当）が必要と認めた者若干人

（任期）

第3 委員会の委員の任期は2年間とし、再任を妨げない。

- 2 任期途中で委員が退任した場合は、新たな委員を補充するものとし、その委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長等）

第4 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員のうちから理事（教育担当）が指名する。

- 2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、副委員長がその職務を代行する。

（委員会の業務）

第5 委員会は、上記の中期計画及び年度計画に基づき、関連する研究開発を円滑に実施していくための連絡調整を行う。

- 2 委員会は、毎年度末に年度計画に関連する報告書を取りまとめ、理事（教育担当）に提出する。

（事務）

第6 委員会の事務は、教育・国際室附属学校支援グループが行う。

（その他）

第7 この要項に定めるもののほか、委員会の運営に必要な事項は、別に定める。

附 則

この要項は、平成24年4月12日から施行し、この要項による改正後の「広島大学附属学校園研究推進委員会」設置要項の規定は、平成24年4月1日から適用する。

附 則

この要項は、平成25年4月1日から施行するものとする。

広島大学附属学校園研究推進委員会 委員名簿

区分	所属	氏名	備考
要項第2条 第1号委員	広島大学副理事(附属学校担当)	松浦伸和	
要項第2条 第2号委員	附属幼稚園教諭 附属小学校教諭 附属中・高等学校教諭 附属東雲小学校教諭 附属東雲中学校教諭 附属三原幼稚園教諭 附属三原小学校教諭 附属三原中学校教諭 附属福山中・高等学校教諭	松本信吾 松岡靖 梶山耕成 新谷和幸 野添生 君岡智央 伊藤公一 松本裕子 平賀博之	
要項第2条 第3号委員	大学院教育学研究科教授 大学院教育学研究科教授 大学院教育学研究科准教授	山元隆春 丸山恭司 岩田昌太郎	委員長 副委員長
要項第2条 第4号委員	教育・国際室附属学校支援グループ主査	濱尾健	事務局
要項第2条 第5号委員	附属学校再編計画室長 附属学校再編計画室員	竹田敏彦 八島等	

(平成25年4月1日)

